

利田横枕遺跡

—主要地方道富山立山魚津線地方特定道路事業に伴う調査報告書—

2001年 1月

立山町教育委員会

序

文化財は、祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく、現在の文化を理解するためにも重要なものです。なかでも埋蔵文化財は地域の歴史に深く関係しており、郷土をよりよく理解するための鍵であるといえましょう。

このたび調査の行われた利田横枕遺跡は『立山町史』にも詳述されている著名な古代の遺跡であり、集落跡は東大寺領大荊庄墾田絵図によって名前だけ知られている「川枯郷」ではないかと注目されていた遺跡です。

今回の調査では古墳時代から古代にかけての集落跡が発見され、絵図の書かれた時期との符合から「川枯郷」に関係する集落である可能性が高まりました。

また、遺跡の中には「置竈」「甑」「鍋」など大陸の様相の強いものがあり、地方文化の形成と渡来人の存在との関連を考えるうえで貴重な資料といえます。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

終わりにになりましたが、調査実施に当たりご協力をいただいた富山県と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

平成13年 1月

立山町教育委員会
教育長 堀 田 實

例 言

1. 本書は主要地方道富山立山魚津線地方特定道路事業に先立つ、富山県中新川郡立山町利田横枕遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は立山町教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成10年4月30日～平成11年11月4日までの延186日間に行った。その後、報告書作成は平成13年1月31日までに行った。発掘調査面積は約6,000㎡である。
4. 調査事務局は立山町教育委員会に置き、社会教育課主任三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長奥村忠彰（平成10年）松井君子（平成11・12年）が総括した。
5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と立山町教育委員会学芸員新本真之、立山町教育委員会臨時調査員越野由香・田中幸生である。
6. 調査にあたり、富山県教育委員会文化財課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示をいただいた。また、宇野隆夫氏（日本文化研究所教授）、高橋浩二氏（富山大学講師）、北野博司氏（現東北芸術工科大学助教授）・谷内尾晋司氏・田島明人氏・安秀樹氏・林大智氏・安中哲徳氏（石川県埋蔵文化財センター）、小田木治太郎氏（天理大学附属天理参考館）河合忍氏（岡山県吉備文化財センター）に御教示をいただいた。記して謝意を表します。
7. 遺物の注記は「TRY」とし、次にグリッド名・層位・日付の順に付した。
8. 遺物整理・実測・製図は三鍋・越野・田中が中心となり、渡辺樹（立山町教育委員会臨時調査員）中谷正和・浅野良治・高志こころ・荒木慎也・砂田普司（富山大学大学院生）、磯村愛子・遠野いずみ・片桐清恵・川端良招・不嶋美穂・的場茂晃・蔦川貴祥（富山大学学生）が協力した。
9. 本書の編集・執筆は三鍋・田中が担当した。

目 次

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2章 調査に至る経緯	1
第3章 調査概要	4
第1節 立地と層序	4
第2節 西調査区	4
(1)調査区の概要	4
(2)遺構	4
第3節 中央西調査区	7
(1)調査区の概要	7
(2)遺構	7
第4節 中央東調査区	16
(1)調査区の概要	16
(2)遺構	18
第5節 東調査区	19
(1)調査区の概要	19
(2)遺構	19
第6節 遺物	
(1)縄文時代の遺物	26
(2)古墳時代前期の遺物	28
(3)古墳時代中期～後期の遺物	44
(4)奈良時代～平安時代の遺物	47
(5)中・近世の遺物	51
第4章 調査成果	52
参考文献	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 調査区区割図	3
第3図 西調査区全体図	折り込み
第4図 西調査区建物・柵配置図	5
第5図 中央西調査区・中央東調査区西側全体図	折り込み
第6図 中央西調査区時期別遺構配置図	9
第7図 中央西調査区遺構実測図 住居-01	10

第8図	中央西調査区遺構実測図	住居-02・04	11
第9図	中央西調査区遺構実測図	住居-03実測図、住居-03遺物・炭化物出土状況実測図	12
第10図	中央西調査区遺構実測図	住居-05・06	13
第11図	中央西調査区遺構実測図	土坑-03・04・05・06・08	15
第12図	中央東調査区東側全体図		折り込み
第13図	中央東調査区遺構実測図	住居-07・08	17
第14図	中央東調査区遺構実測図	土坑-09・10	18
第15図	東調査区全体図		折り込み
第16図	東調査区W地区時期別遺構配置図		21
第17図	東調査区遺構実測図	住居-09	22
第18図	東調査区遺構実測図	住居-10	23
第19図	遺物実測図	包含層	27
第20図	甕分類図		29
第21図	壺・鉢・高杯・器台・蓋分類図		30
第22図	遺物実測図	住居-01・02	37
第23図	遺物実測図	住居-03・05・06	38
第24図	遺物実測図	住居-07	39
第25図	遺物実測図	住居-07、土坑-04、溝-26、土器集中区	40
第26図	遺物実測図	炉-01、土坑-03、溝-27、畝状遺構、穴-100	41
第27図	遺物実測図	包含層	42
第28図	遺物実測図	包含層	43
第29図	遺物実測図	住居-04・09・10、住居-10周溝、建物-21、土坑-07、溝-26、包含層	45
第30図	遺物実測図	住居-08、炉-01、土坑-06、畝状遺構②群、包含層	46
第31図	遺物実測図	建物-01・03、溝-07・26	49
第32図	遺物実測図	建物-01、溝-07、包含層	50
第33図	遺物実測図	包含層	51

表 目 次

表1	住居・土坑出土土器の器種構成	52
----	----------------	----

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北21km、面積は308km²である。

地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぼ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘、北西部が平野部である。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4区分できる。

まず、標高400m以下は暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに続いて標高600m～700mまでは暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるコナラ・クヌギ・クリ類の成育帯で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場でもある。

さらに標高1,500mまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

今回調査を行った利田横枕遺跡の所在する町北部地域は、常願寺川扇状地の扇端部にあたる。遺跡の東側一帯には高野川・栃津川などの中小河川が流入して、三角州・小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。

このような地形の中で、利田横枕遺跡は、八幡川によって形成された微高地上に立地する。

周辺には縄文時代から中・近世に至るまで、ほぼ切れ目なく遺跡が存在する。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った遺跡に関連のあるものとしては、浦田遺跡・五郎丸遺跡・塚越Ⅰ遺跡・辻遺跡・日水遺跡・鉾ノ木Ⅰ遺跡・横沢Ⅰ遺跡（縄文～近世）、本江・広野新遺跡（縄文・古墳）、横沢Ⅱ遺跡（縄文・古代～近世）、江上A遺跡・中小泉遺跡（弥生中期～後期）、江上B遺跡・正院新遺跡（弥生中期～古墳）、日中源兵衛腰遺跡（弥生時代後期～古墳）、竹内天神堂古墳・稚児塚・塚越古墳・藤塚古墳（古墳）、東江上遺跡（古代）、利田堀田遺跡・利田高見遺跡（古代～中世）、総曲輪遺跡（古代～近世）などがあげられる。また、若干南に離れているが、須恵器生産地である上末古窯跡群も、関連遺跡として重要である。

第2章 調査に至る経緯

利田横枕遺跡の発見は、昭和45年の八幡川水路工事中に多数の土器片が出土したことを契機としている。『立山町史』においては利田仕入遺跡と呼んでいた遺跡を含め、昭和62年度実施の分布調査で設定し直したものである。

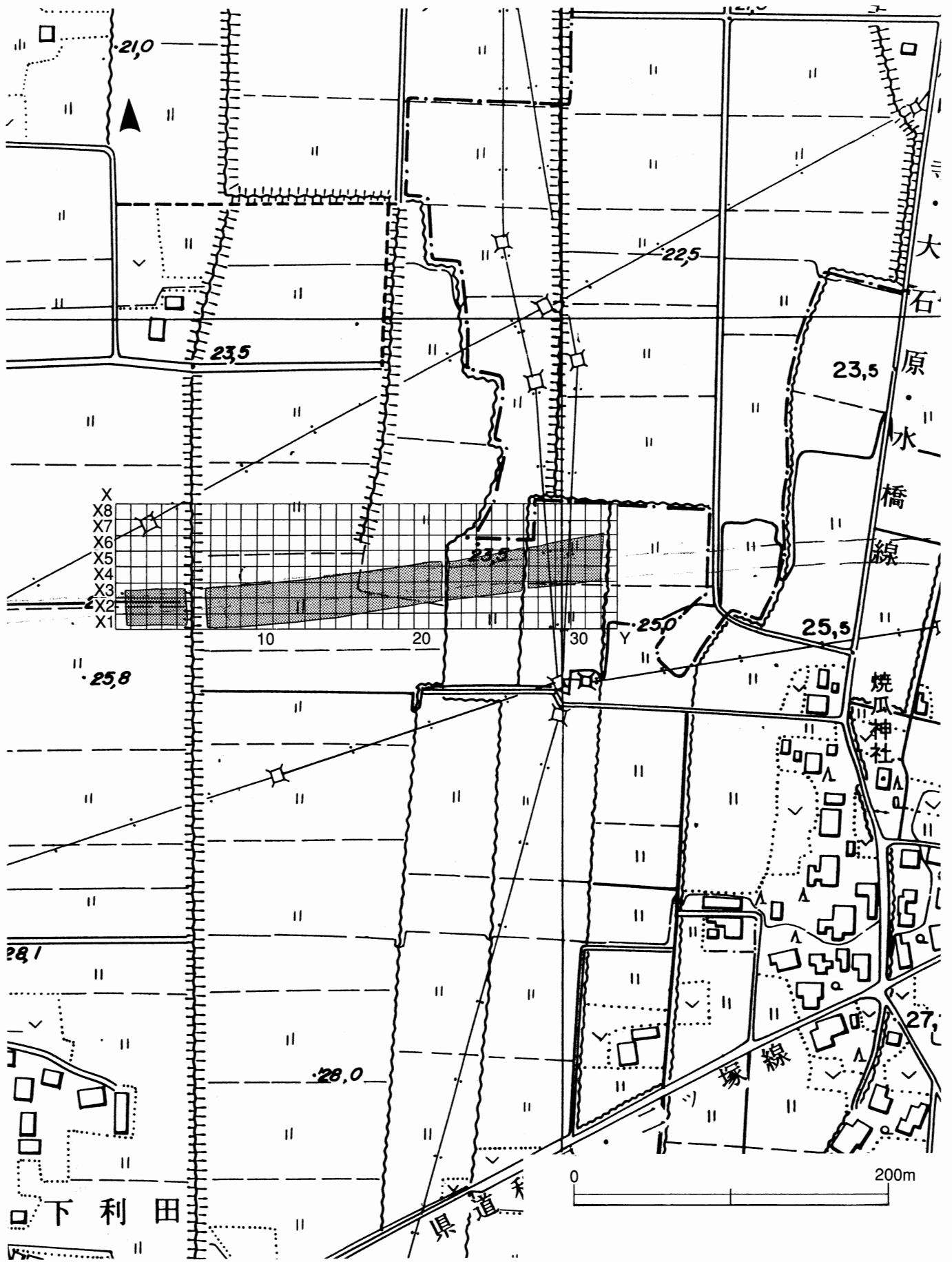
仕入地区は昭和43年の送電線工事の際に遺物が出土し、昭和47年に立山町教育委員会が遺物包含層確認のため発掘調査を行った。遺物としては弥生時代中期末に比定できる櫛描文を施した壺形土器、鉢形土器、蓋形土器などが出土し、また、径5～8cm程度の礫を敷き詰めた敷石遺構を検出した。

横枕地区では昭和48年の八幡川用水の工事の際に多数の土器片が出土し、同年、立山町文化財保護調査委員会が発掘調査を行った。調査では溝に伴う木杭の列及び列石群が検出され、8～9世紀代を中心とする土師器・須恵器と木片などが出土した。土師器・須恵器の中には墨書土器を含み、木片の中には木簡や人形の可能性を持つものも出土したことから、通常の集落とは異なる性格を持つのではないかと指摘されていた。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 利田横枕遺跡
2. 東江上遺跡
3. 江上B遺跡
4. 江上A遺跡
5. 中小泉遺跡
6. 正院新遺跡
7. 浦田遺跡
8. 竹内天神堂古墳
9. 本江・広野新遺跡
10. 塚越I遺跡
11. 塚越古墳
12. 鉾ノ木I遺跡
13. 総曲輪遺跡
14. 利田堀田遺跡
15. 利田高見遺跡
16. 五郎丸遺跡
17. 横沢II遺跡
18. 横沢I遺跡
19. 稚児塚
20. 辻遺跡
21. 日水遺跡
22. 日中源兵衛腰遺跡
23. 藤塚古墳
24. 上末古窯跡群



第2図 地形と区割図

第3章 調査概要

第1節 立地と層序 (第2図)

遺跡は、富山地方鉄道稚児塚駅の西1.7km、立山町利田地内に所在する。一帯は、常願寺川扇状地の末端部湧水地帯にあたる。遺跡の東側一帯には高野川・栃津川などの中小河川が流入して、三角州・小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。

遺跡は、八幡川及びその小支谷によって開拓された微高地上に立地する。遺跡の規模は、昭和62年に実施された分布調査で南北400m、東西350mにわたって広がっていることが確認されており、標高は約25mを測る。調査対象地区は水田として利用されていた。

今回の調査では、調査対象区域内を南北に流れる用水路を境にして、3つの調査区を設定し、中央部の調査区は発掘調査の便宜上、さらに東西2つの調査区に分割した。調査区名は西調査区、中央西調査区、中央東調査区、東調査区である。

層序は、第1層・耕作土、第2層・茶褐色土、第3層・暗茶褐色土、第4層・黒褐色土、第5層・黄褐色土の順で堆積しているが、地点によってはかなりの変化がみられる。耕作土は20～50cmで、西側ほど厚く、茶褐色土・暗茶褐色土は中央東調査区の一定範囲にのみ存在する。また、西調査区西端では、遺構検出面が黄褐色土層から礫層に転換する。第4層の黒褐色土層が遺物包含層で、平均20cmの厚さで堆積しているが、中央西調査区の西端から約10～25mの範囲では、土層が数回途切れる。また、中央東調査区の中央部では、幅30～50mの範囲で攪乱を受けており、黒褐色土層は確認できなかった。

第2節 西調査区

(1) 調査区の概要 (第3図)

発掘調査面積は約900m²である。この調査区は南東方向から北西方向に緩やかに傾斜しており、遺構・遺物の分布はほぼ東半に限られる。また、調査区の西端において遺構検出面が黄褐色土層から礫層に転換することから、調査対象地域内においては、当調査区の西端を遺跡範囲の西端と判断した。

検出された遺構は、掘立柱建物6棟・柵列1列・土坑2基・穴96個・溝1条・畝状遺構17条・流路1条である。時期は、縄文時代・古代～近世と幅広いが、遺構・遺物ともに奈良・平安時代に属するものが多い。

(2) 遺構

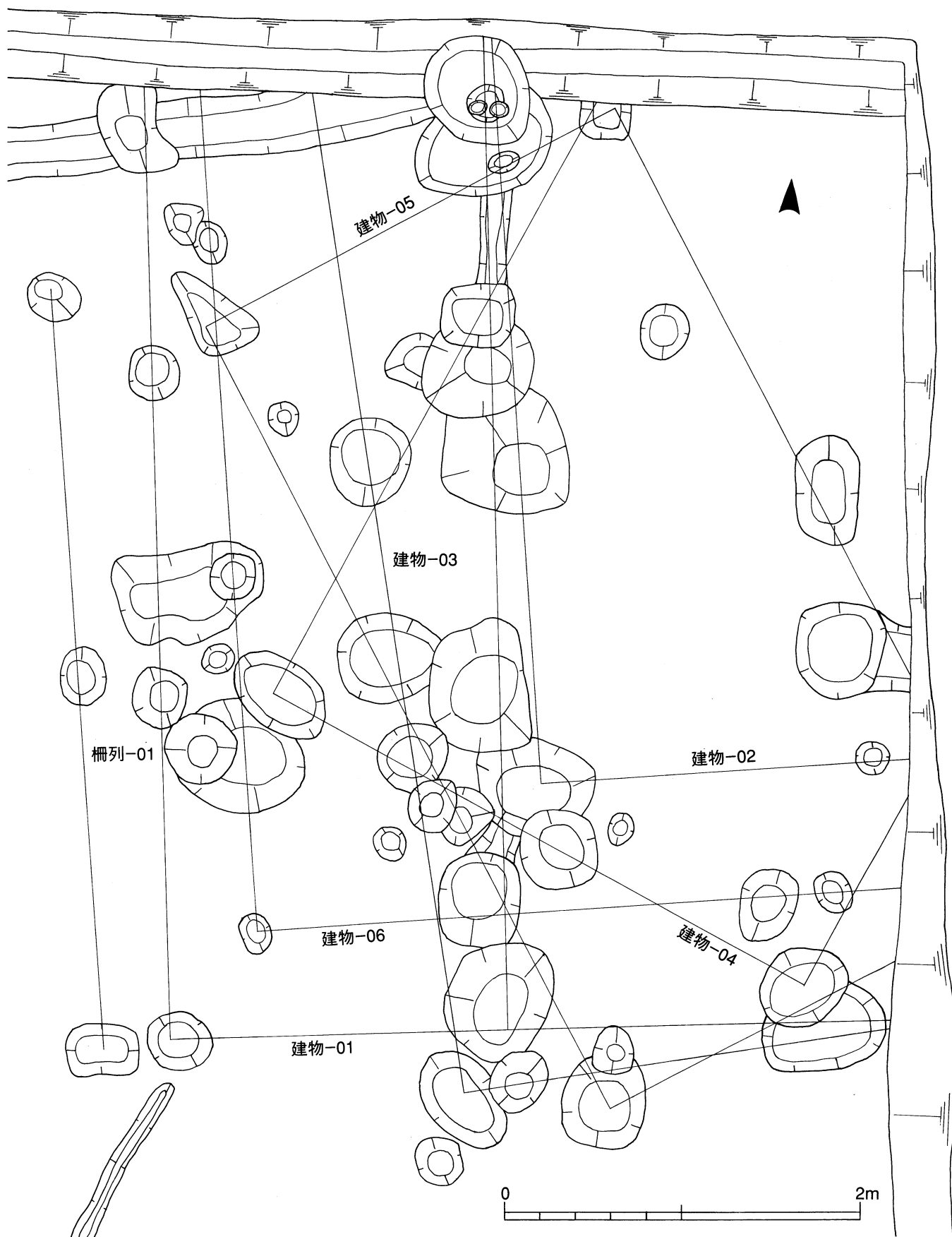
建物-01 (第3・4・31・32図)

調査区北東側で検出された、3間以上(5.1m以上)×2間以上(4.0m以上)の掘立柱建物である。建物-02～06と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、建物-02・03・05より新しく、建物-04に先行するものと考えられる。建物方位は、南北柱列でとるとN-7°-Wを指す。この建物は、西側に廂を有し、東側は調査区外のため明らかではないが、2面に廂を持つ建物となる可能性を残す。身舎の柱間寸法は、桁行が北から1.5m・1.8m・1.9m、梁行は推定2.2m以上を測る。廂の柱間寸法は、桁行が北から1.8m・1.9m、梁行は1.8mを測る。柱穴掘方は、身舎と廂で大きく異なる。身舎の柱穴掘方は、長軸約70cm、短軸約60cmの不整楕円形で、深さは35～55cmを測る。一方、廂の柱穴掘方は、30～34cmの円形で、深さは20～28cmを測る。

遺物は、9世紀代の須恵器杯蓋(第31図308・309)、須恵器杯A(第31図333)、土師器椀(第32図347)が出土している。



第3図 西調査区全体図 (S=1/200)



第4図 西調査区建物・柵列配置図 (S=1/30)

建物-02 (第3・4図)

調査区北東側で検出された、2間以上(3.7m以上)×1間以上(2.3m以上)の掘立柱建物である。建物-01・03～06と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、建物-01・04に先行するものと考えられる。建物方位は、南北柱列でとるとN-9°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が北から1.8m・1.9mを測り、東西柱列は2.3m以上と考えられる。柱穴堀方は、一辺60～70cmの隅丸方形である。深さは30～40cmを測る。

建物-03 (第3・4・31図)

調査区北東側で検出された、2間以上(5.6m以上)×1間以上(2.1m以上)の掘立柱建物である。建物-01・02・04～06と重複しており、柱穴の切り合い関係から見て、建物-01・04に先行するものと考えられる。建物方位は、南北柱列でとるとN-12°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が1.8m、東西柱列が2.1mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)36～60cmの円形・楕円形である。深さは10～22cmを測る。

遺物は、8世紀中頃の須恵器盤(第31図343)が出土している。

建物-04 (第3・4図)

調査区北東側で検出された、2間(3.9m)×1間(3.8m)の掘立柱建物である。建物-01～03・05・06と重複しており、柱穴の切り合い関係から見て、建物-01～03・05より新しい建物と考えられる。建物方位は、南北柱列でとるとN-22°-Eを指す。柱間寸法は、桁行が西から1.8m・1.6mを測り、梁行は2.4mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)36～60cmの隅丸方形・円形・楕円形と不揃いである。深さは21～31cmを測る。

建物-05 (第3・4図)

調査区北東側で検出された、2間(4.9m以上)×1間以上(2.5m以上)の掘立柱建物である。建物-01～04・06と重複しており、柱穴の切り合い関係から見て、建物-01・04に先行するものと考えられる。建物方位は、南北柱列でとるとN-28°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が北から2.3m・2.6mを測り、東西柱列は2.5mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)50～60cmの円形・楕円形・不整楕円形で、深さは15～24cmを測る。

建物-06 (第3・4図)

調査区北東側で検出された、2間以上(4.7m以上)×1間以上(3.2m以上)の掘立柱建物である。建物-01～05と重複するが、柱穴の切り合い関係がなく、前後関係は不明である。建物方位は、南北柱列でとるとN-9°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が1.85mの等間、東西柱列が3.2mを測る。柱穴堀方は、径20～26cmの円形・楕円形で、深さは12～16cmを測る。

なお建物-06は、建物-02と方位を同じくし、その柱穴が、他の掘立柱建物の柱穴と比べて極端に小さいことから、建物-02に伴う柵列であった可能性がある。

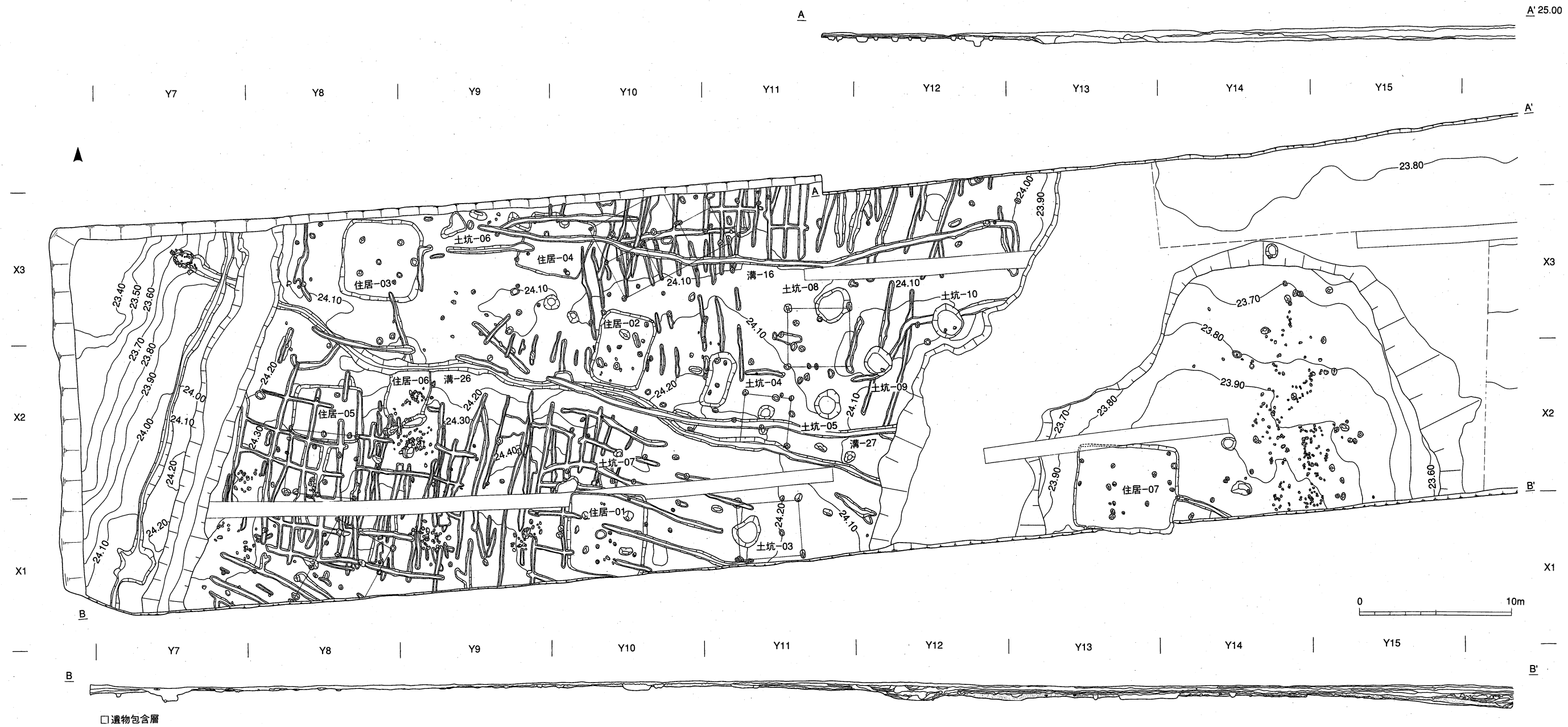
柵列-01 (第3・4図)

建物-02の西側に、建物とほぼ平行する形で検出された柱穴列である。柱穴列の方位はN-9°-Wを指す。柱間寸法は、北から2.2m・2.1mを測る。柱穴堀方は、径35cm前後の円形で、深さは11～25cmを測る。

なお、建物-02・06と柵列-01は、方位を同じくすることから、柵列-01は建物-02もしくは建物-06に伴うものであった可能性を持つ。

溝-01 (第3図)

調査区の北側で検出された。南側に緩く弧を描きながら東西に走り、さらに調査区外へと延びている。幅は約30cm、断面形態は「U」字状をなし、深さは15～25cmを測る。Y3地区で流路-01と切り合っているが、覆土の状況より、溝-01が古くなる。覆土は暗オリーブ褐色土の単層である。



第5図 中央西調査区・中央東調査区西側全体図 (S=1/200)

土坑-01 (第3図)

調査区の東半、X2Y4区で検出された。遺構の西側で土坑-02と重複しているが、覆土の状況より、土坑-02に先行するものと考えられる。平面形は、長軸約1.2mの不整楕円形を呈し、深さは33cmを測る。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土ブロック混じり暗褐色土の順で堆積している。

出土遺物はなく、遺構の所属時期は不明である。

土坑-02 (第3図)

調査区の東半、X2Y4区で検出された。遺構の東側で土坑-01と重複しているが、覆土の状況より、土坑-01より新しいものと考えられる。平面形は、径約1mの不整形を呈し、深さは32cmを測る。覆土は、第1層・暗褐色土、第2層・黄褐色土ブロック混じり暗茶褐色土、第3層・暗黄褐色土の順で堆積している。

遺物は出土しておらず、遺構の所属時期は不明である。

畝状遺構 (第3図)

全ての畝状遺構が、調査区の東半で検出された。17条が確認されているが、本来は6条であったものと考えられる。畝の方位はおおよそN-20°-Eで揃っている。出土遺物はないが、畝の方位・覆土から中央西調査区の畝状遺構②群と同時期である可能性が高く、6世紀後半から7世紀前半に属するものと考えられる。

第3節 中央西調査区

(1) 調査区の概要 (第5・6図)

発掘調査面積は約1,300m²である。この調査区は、今回の調査範囲の中で、遺構・遺物とも最も密度が高い。調査区の西端にある流路以東では、2条の溝が調査区内を東西に流れ、その両側に竪穴住居と畑跡と考えられる畝状遺構が一面に分布する。一方、流路以西では傾斜が急になり、遺構の分布は僅かとなる。また、調査区の西端から約10~25mの範囲では、遺物包含層が数回途切れる。

検出された遺構は、竪穴住居6棟・掘立柱建物6棟・土坑13基・穴162個・溝4条・畝状遺構192条・流路1条である。時期は、縄文時代~近世におよぶが、古墳時代~平安時代に顕著な遺構が集中している。

なお、本調査区は発掘調査の便宜上、中央東調査区と分割設定した地区であり、調査区の東端は、中央東調査区と接する。

(2) 遺構

住居-01 (第5~7・22図)

調査区南端の中央やや東寄り、X1Y10区に位置し、一部が調査区外にかかる形で検出された。上部に畝状遺構が重複し、それらの下部は本遺構の壁・覆土上部に達する。平面形態は一辺約5.3mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは20cm前後を測る。4本主柱で、主軸方位はN-2°-Eを指す。柱穴掘方は50~80cmの円形・楕円形・不整長方形と不揃いで、床面からの深さは27~36cmを測る。柱穴間距離は、東西約2.7m、南北約2.2mである。覆土は、第1層・オリーブ褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗茶褐色土の順で堆積している。

住居床面から古墳時代前期に属する遺物が出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

住居-02 (第5・6・8・22図)

調査区の中央やや東寄り、X2・3Y10区に位置する。上部に畝状遺構、穴-151・156が重複し、穴-156は住居床面まで、その他の下部は本遺構の壁・覆土上部に達する。平面形態は東西約3.5m、南北約4.8mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは20cm前後を測る。2本主柱で、主軸方位はN-15°-Eを指す。柱穴掘方は長軸78cm、44cmの楕円形を呈し、床面からの深さは、約40cmを測る。柱穴間距離は、約1.9mである。覆土は第1層・黒褐色土、第2

層・茶褐色土の順で堆積している。

住居床面から古墳時代前期に属する遺物が出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

住居一03 (第5・6・9・23図)

調査区の北端の中央やや西寄り、X3 Y8・9区に位置し、一部が調査区外にかかる形で検出された。上部に畝状遺構が重複し、それらの下部は本遺構の床面に達する。平面形態は東西約5.3m、南北約5.2mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは20cm前後を測る。4本主柱で、主軸方位はN-4°-Eを指す。柱穴掘方は35~45cmの円形で、床面からの深さは14~28cmを測る。柱穴間距離は、東西約2.3m、南北約2.0mである。床面直上には炭化材や炭化物が放射状に散乱し、床に据え付けられたまま潰れた状態の土器が、住居の西壁沿いと北東隅付近で出土していることから、本竪穴住居は焼失家屋と考えられる。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・暗茶褐色土の順で堆積している。

古墳時代前期に属する遺物が多数出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

住居一04 (第5・6・8・29図)

調査区の北端の中央やや東寄り、X3 Y9・10区に位置する。上部に畝状遺構が重複し、一部は住居床面まで達する。平面形態は東西約4.4m、南北約4.0mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約10cmを測る。主柱配置は不明であるが、主軸方位はN-20°-Eと推定される。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物は古墳時代終末の甕(第29図292・295)が出土しているが、埋土の類似する畝状遺構に切られており、どちらの遺構に所属する遺物であるのか明らかでない。

住居一05 (第5・6・10・23図)

調査区の中央やや西寄り、X2 Y8区に位置する。上部に畝状遺構、穴-104・141・142が重複し、畝状遺構2条、穴-104・141・142は住居床面まで、その他の下部は本遺構の壁・覆土上部に達する。平面形態は東西約4.5m、南北約3.6mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは15~20cmを測る。床面からは、径30~40cmの穴を3基検出したが、主柱配置は不明である。主軸方位はほぼ真北を指すものと推定される。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・暗茶褐色土の順で堆積している。

古墳時代前期に属する遺物が出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

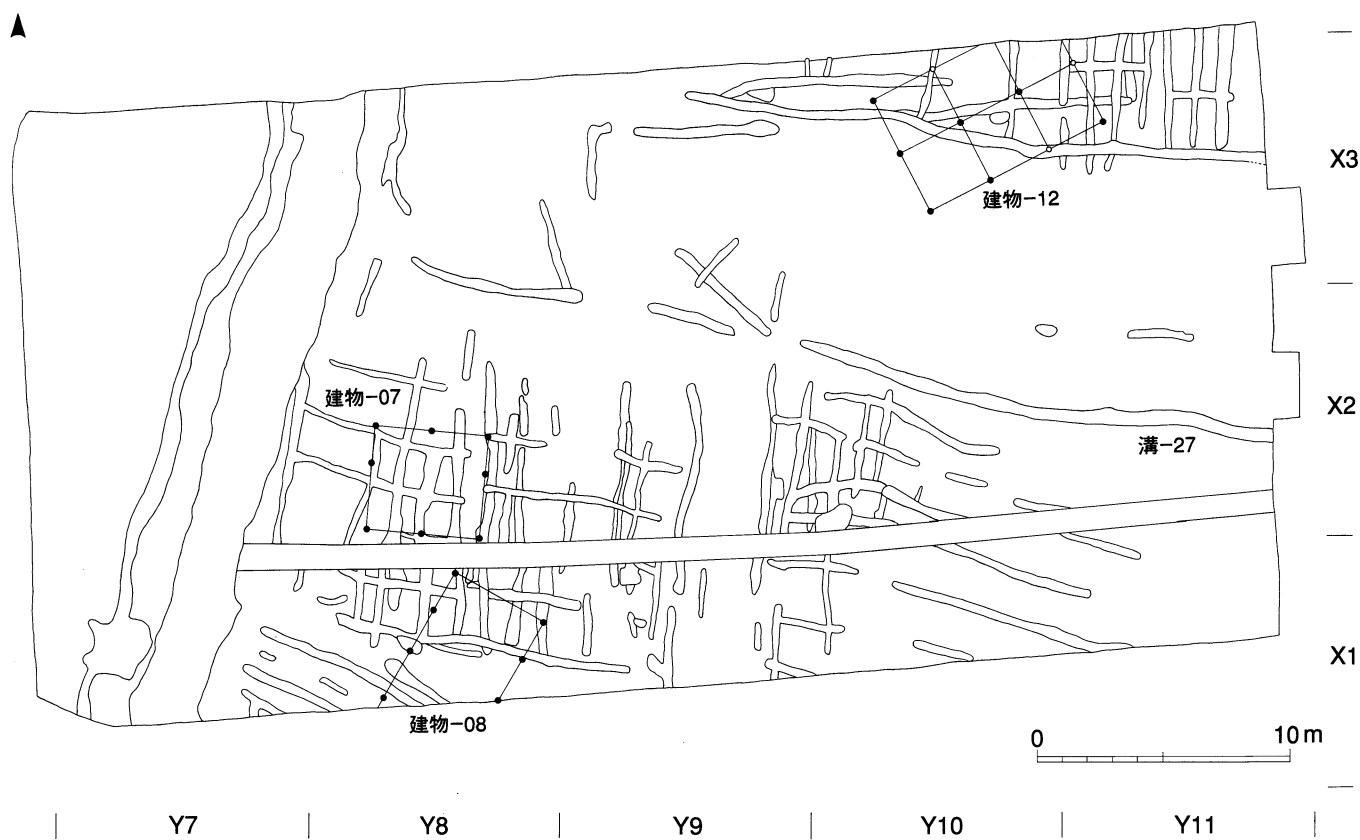
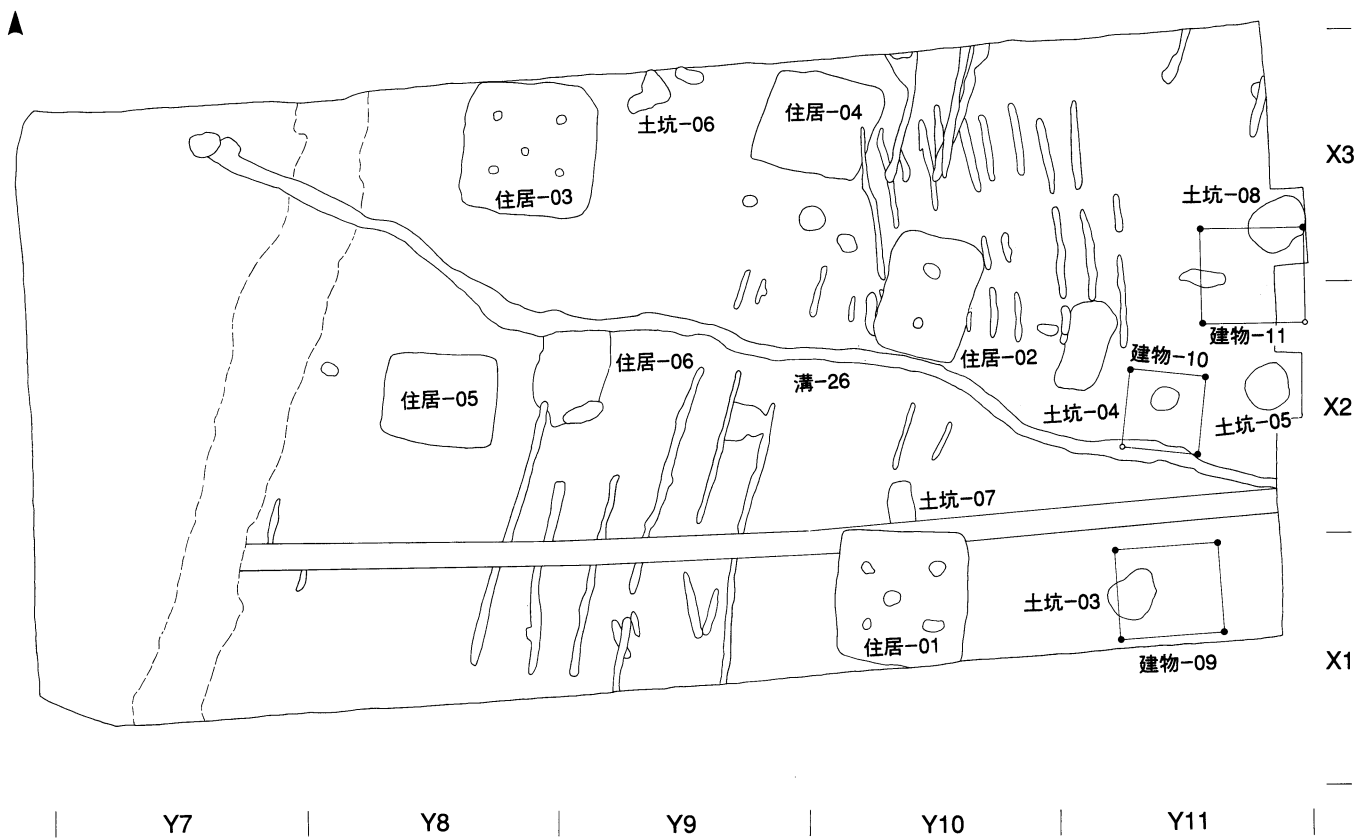
住居一06 (第5・6・10・23図)

調査区の中央やや西寄り、X2 Y8・9区に位置する。上部に溝-26、畝状遺構、土坑-09が重複し、溝-26・土坑-09は住居床面まで、その他の下部は本遺構の壁・覆土上部に達する。平面形態は長軸3.3m以上、短軸約2.8mの楕円形を呈し、検出面からの深さは23cmを測る。主柱配置は不明であるが、主軸方位はN-15°-Eを指すものと推定される。中央東寄りには、長方形の石組炉を配し、長辺84cm×短辺70cm×深さ28cmの規模を測る。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・暗茶褐色土の順で堆積している。

古墳時代前期に属する無文の有段口縁甕が2点出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

建物一07 (第5・6図)

調査区中央やや西寄りのX2・Y8区で検出された、2間(4m)×2間(3.6m)の掘立柱建物である。住居一05・畝状遺構と重複しており、住居一05よりも新しい。建物方位は、南北柱列でとるとN-6°-Eを指す。柱間寸法は、南北柱列が南から2.5m・1.5m、東西柱列が1.8mの等間である。柱穴掘方は、20~50cmの円形を呈し、深さは10~22cmを測る。



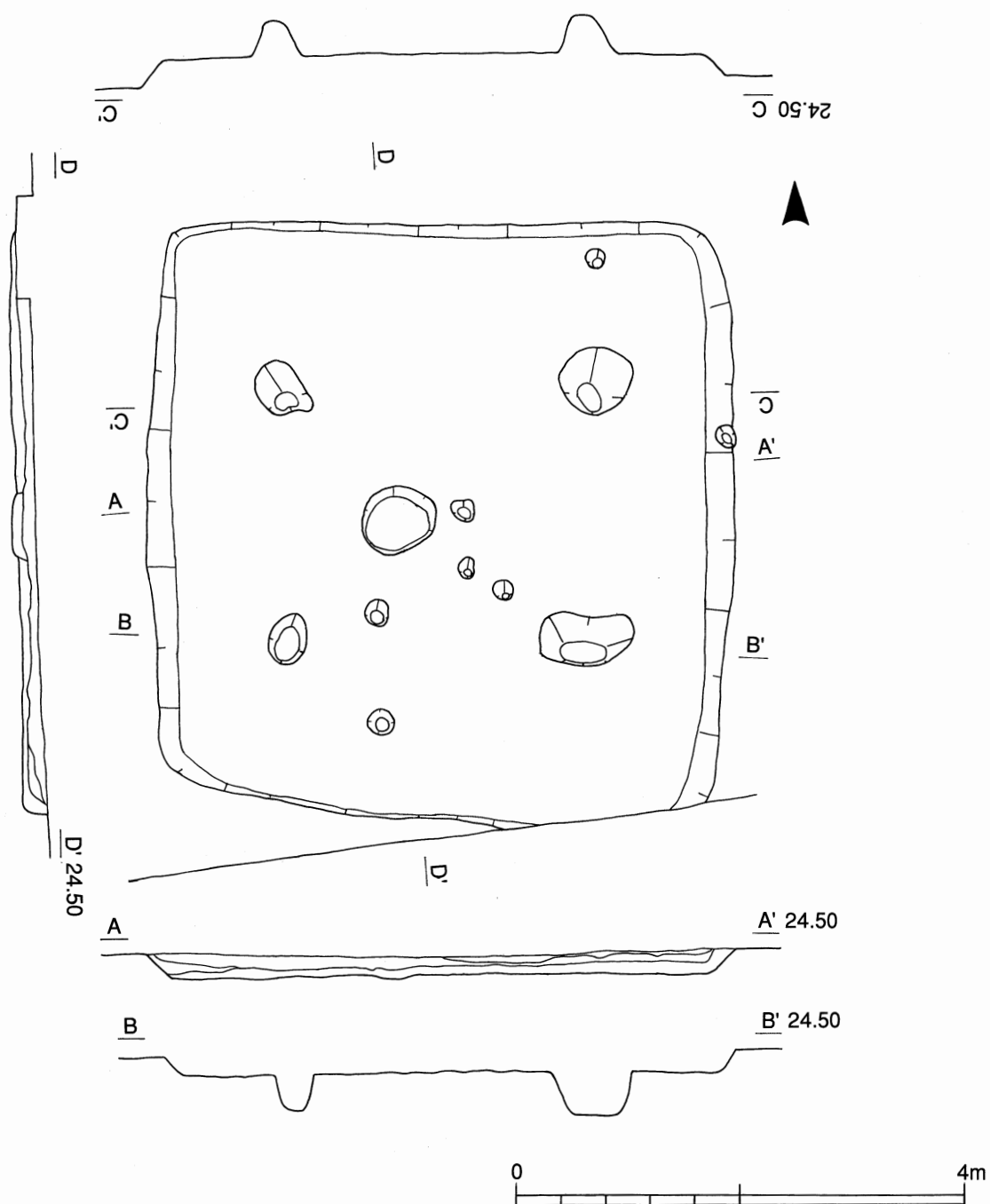
第6図 中央西調査区時期別遺構配置図 上図 古墳時代後期以前 下図 古代以降 (S=1/300)

建物-08 (第5・6図)

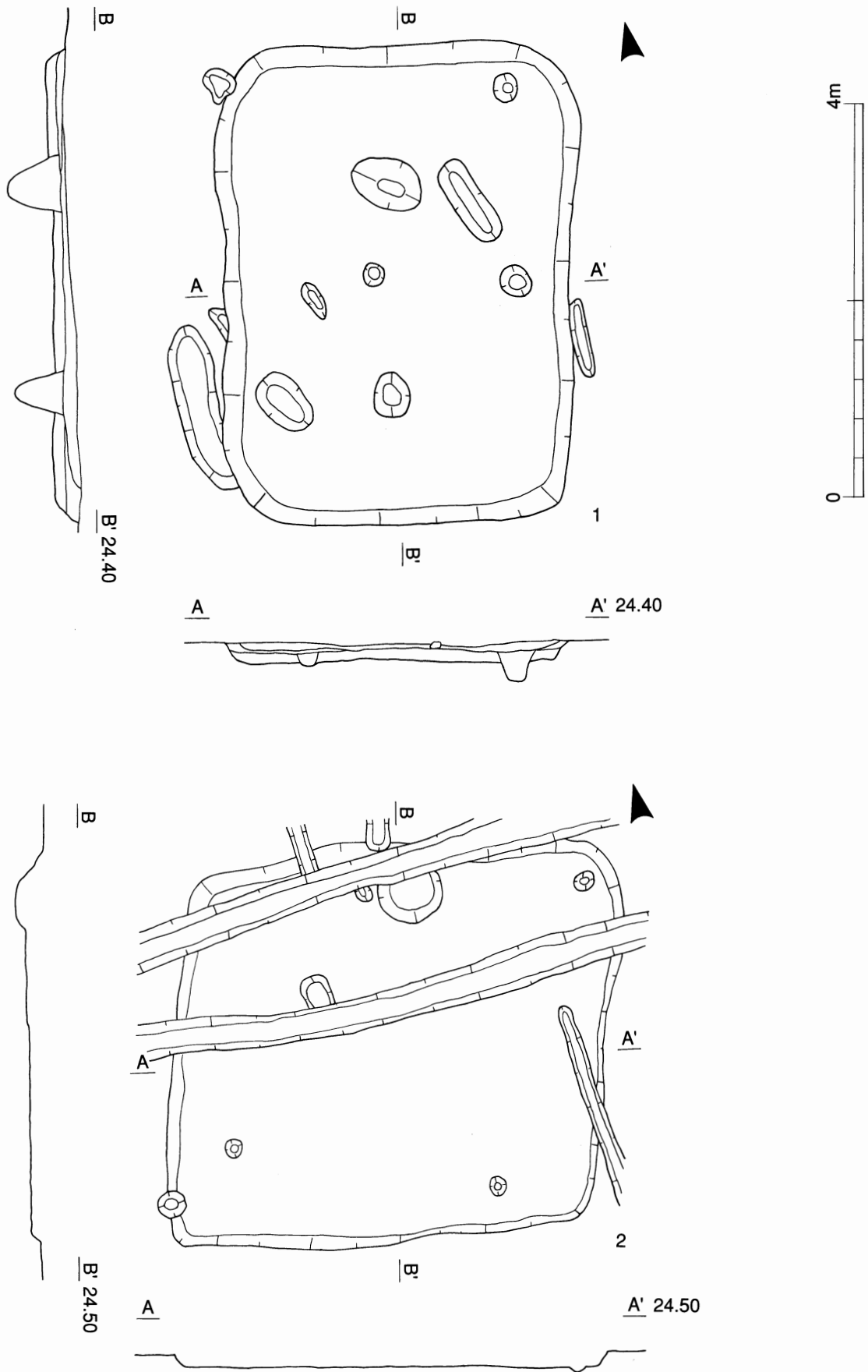
調査区南端の中央やや西側で検出された、3間以上(5.4m以上)×1間(3.7m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-22°-Eを指す。柱間寸法は、南北柱列が南から1.8m・1.6m・1.4m、東西柱列が3.7mを測る。柱穴掘方は、24~40cmの円形で、深さは8~28cmを測る。

建物-09 (第5・6図)

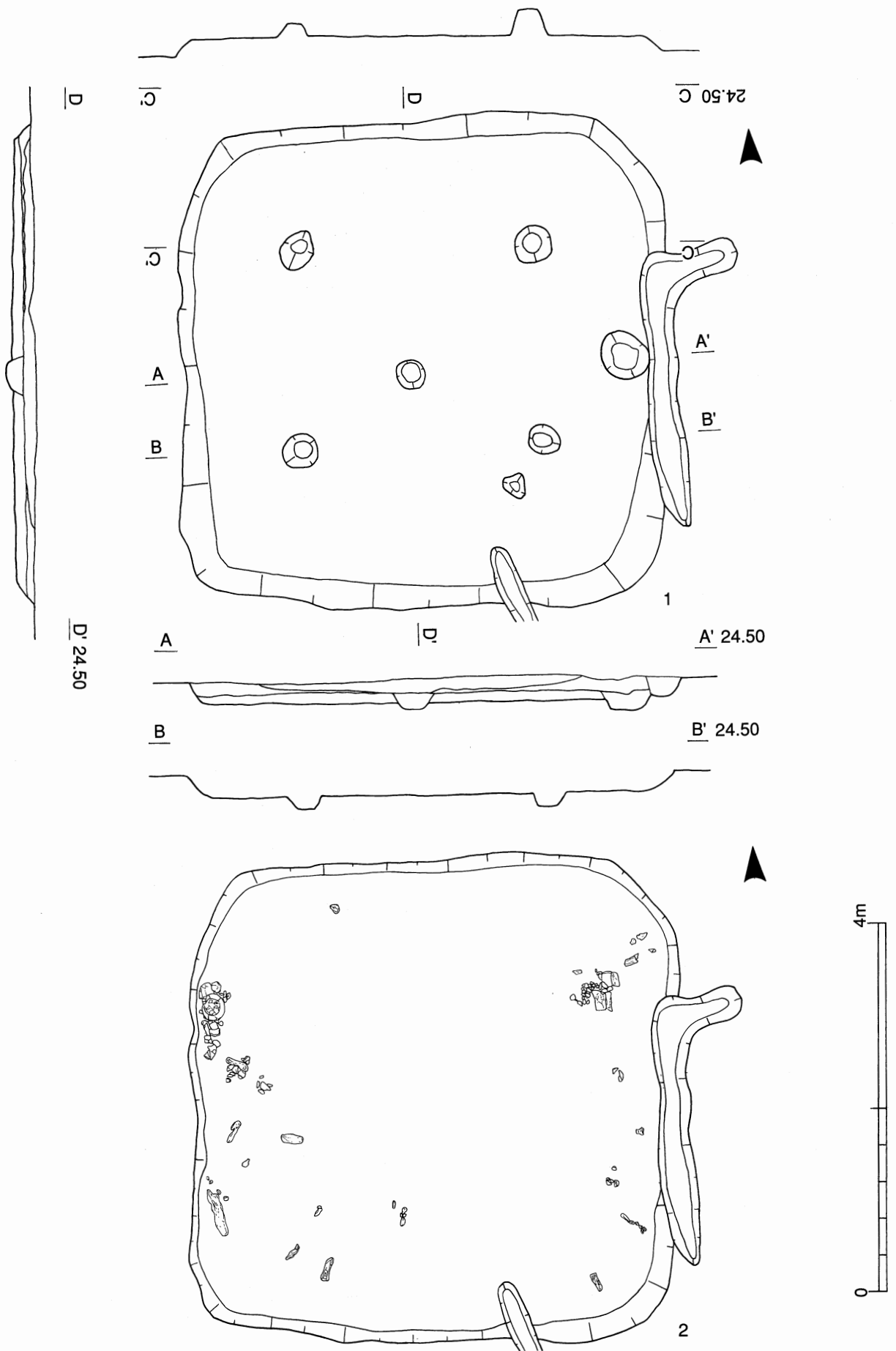
調査区南東側で検出された、1間(3.2m)×1間(3.6m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-4°-Wを指す。柱穴掘方は、長さ(径)44~60cmの円形・楕円形を呈し、深さは20~42cmを測る。



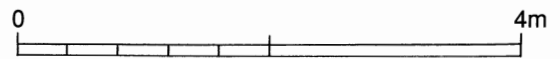
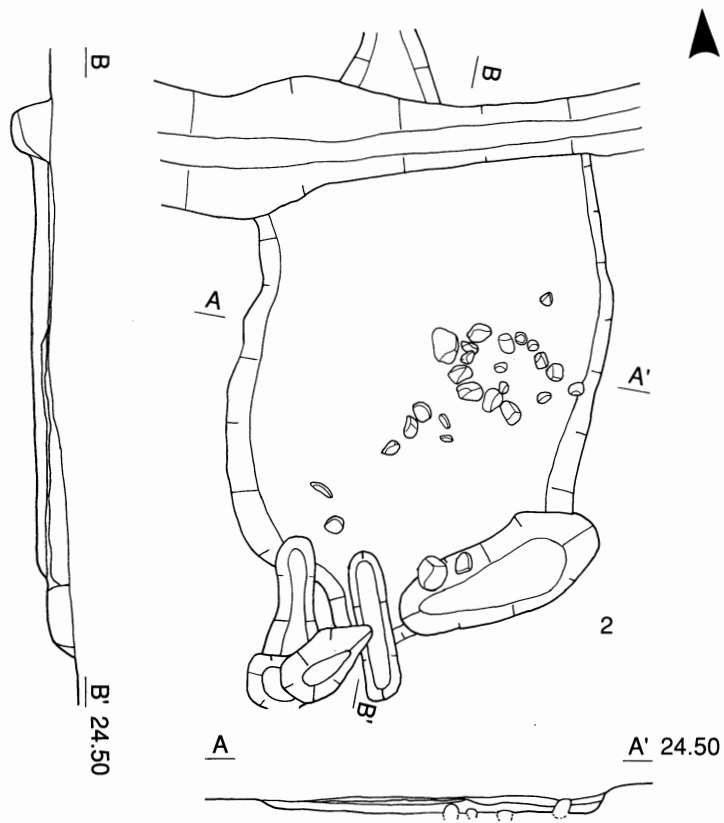
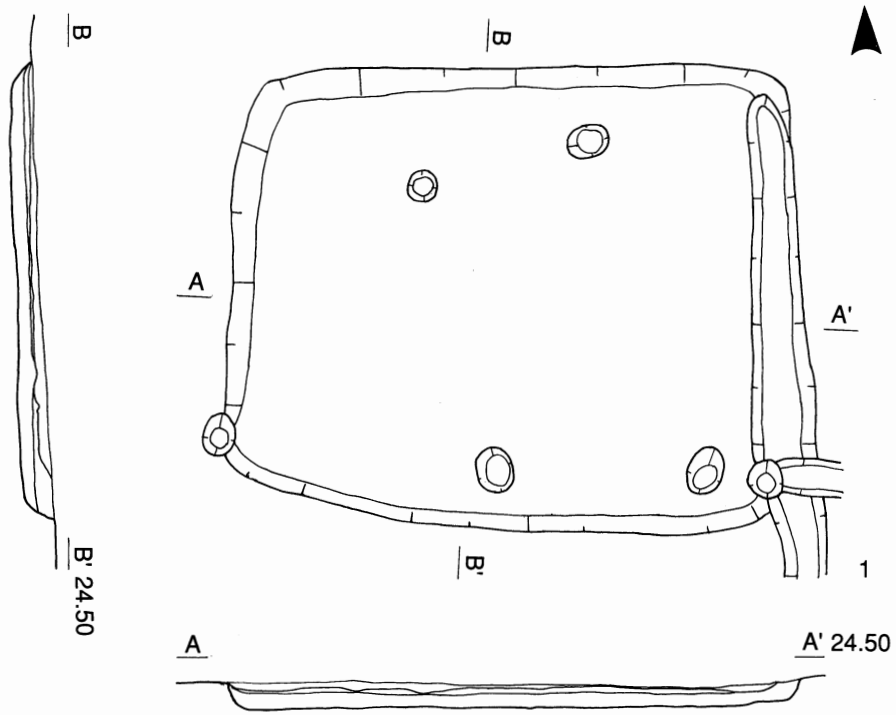
第7図 中央西調査区遺構実測図 住居-01 (S=1/60)



第8図 中央西調査区遺構実測図 1. 住居-02 2. 住居-04 (S=1/60)



第9図 中央西調査区遺構実測図 1. 住居-03 2. 住居-03遺物・炭化物出土状況実測図 (S=1/60)



第10図 中央西調査区遺構実測図 1. 住居-05 2. 住居-06 (S=1/60)

建物-10 (第5・6図)

調査区中央東側で検出された、1間(2.8m)×1間(2.8m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-7°-Eを指す。柱穴堀方は、約30cmの円形で、深さは18~24cmを測る。


建物-11 (第5・6図)

調査区中央東端で検出された、1間(3.4m)×1間(3.6m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-1°-Wを指す。柱穴堀方は、長さ(径)44~52cmの円形・楕円形を呈し、深さは26~33cmを測る。

建物-12 (第5・6図)

調査区北東側で検出された、3間(7.5m)×2間以上(4.8m以上)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-28°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が南側から2.2m・2.4m、東西柱列が西側から2.4m・2.2m・2.0mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)22~56cmの円形・楕円形を呈し、深さは16~34cmを測る。

溝-07 (第5・6・31・32図)


調査区の西側で検出された。南北にまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。溝-26と重複しており、本遺構の方が新しい。幅は30~80cmで、断面形態は地点によって異なるが、基本的に船底形または「」形を呈する。深さは14~36cmを測る。

遺物は9世紀~10世紀初頭の須恵器・土師器が出土しており、遺構の時期も同時期と考えられる。

溝-16 (第5・6図)


調査区の北側で検出された。東西にほぼまっすぐに走っており、中央東調査区へ延びている。住居-04や土坑-06のほかに、多くの畝状遺構と重複しているが、本遺構が最も新しい。また、溝-26・27とほぼ方位を同じにする。幅は30~45cmで、断面形態は「U」字状をなしており、深さは15~25cmを測る。覆土は暗オリーブ褐色土の単層である。

溝-26 (第5・6・25・29・31図)

調査区の中央を東西に走り、中央東調査区へ延びている。住居-02、溝-27、穴-88・139、流路-02と重複しており、溝-27・流路-02より古く、穴-88・139より新しい。幅は35~98cmで、断面形態は基本的に「」形をなし、深さは5~32cmを測る。覆土は地点により異なるが、基本的に第1層・黒褐色土、第2層・灰白粗砂である。

遺物は古墳時代前期に属するもののほか、古墳時代後期や古代のものが混在しており、遺構の所属時期は明らかでない。

溝-27 (第5・6・26図)

調査区の中央を東西に走り、中央東調査区へ延びている。溝-26、穴-88・91・139、畝状遺構と重複しており、本遺構が最も新しい。断面形態は「」形を呈し、幅は32~69cmで、深さは6~19cmを測る。覆土は第1層・茶褐色土、第2層・灰白粗砂である。

遺物は古墳時代前期~9世紀代のものが出土しており、遺構の所属時期は明らかでない。

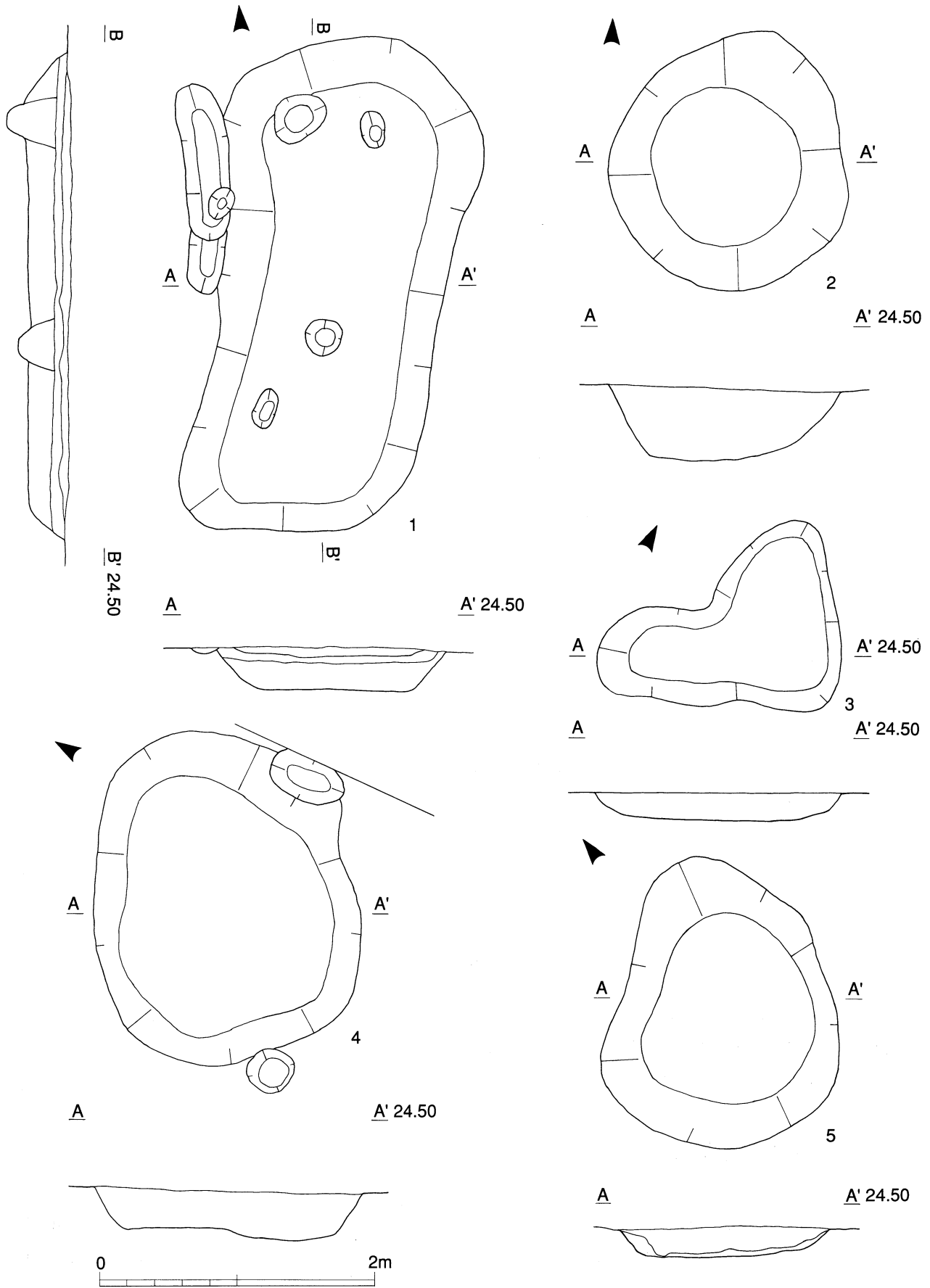
土坑-03 (第5・6・11・26図)

調査区の南東隅、X1Y11区で検出された。長軸約2.1m、短軸約1.7mの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは19cmを測る。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土ブロック混じり暗オリーブ褐色土の順で堆積している。

古墳時代前期に属する遺物が比較的まとまって出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

土坑-04 (第5・6・11・25図)

調査区の中央東側、X2Y10・11区で検出された。長軸約3.6m、短軸約1.6mの不整隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは19cmを測る。上部に、穴-163、畝状遺構が重複し、穴-163は遺構床面まで、その他の下部は壁面・覆土上層に達する。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土ブロック混じり暗茶褐色土の順で堆積しており、第2層は貼り床の可能性を持つ。



第11图 中央西調査区遺構実測図 1. 土坑-04 2. 土坑-05 3. 土坑-06 4. 土坑-08 5. 土坑-03 (S=1/40)

古墳時代前期の遺物が出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

土坑-05 (第5・6・11図)

調査区の東端、X 2 Y 11区で検出された。径約1.7mの不整円形を呈し、検出面からの深さは50cmを測る。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土ブロック混じり暗茶褐色土の順で堆積している。

遺物は古墳時代前期の土器片が出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

土坑-06 (第5・6・11・30図)

調査区の北端中央、X 3 Y 9区で検出された。長軸約2.3m、短軸約1.2mの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。覆土は、黒褐色土の単層である。

遺物は6世紀末～7世紀前半の土師器甑(第30図300)が出土しており、遺構の時期も同時期と考えられる。

土坑-07 (第5・6・29図)

調査区の中央やや南東側、X 2 Y 10区で検出された。長軸約1.7m、短軸約1mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。上部には畝状遺構が重複し、本遺構の壁面・覆土上層に達する。覆土は、黒褐色土混じりのオリーブ褐色土の単層である。

遺物は6世紀末～7世紀前半の土師器甕(第29図293)が出土しており、遺構の時期も同時期と考えられる。

土坑-08 (第5・6・11図)

調査区の東端、X 2 Y 11区で検出された。径約2.4mの円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。覆土は、暗オリーブ褐色土の単層である。

遺物は細片のみの出土であり、遺構の所属時期は明らかではない。

畝状遺構 (第5・6・26・30・31図)

調査区の広範囲で検出され、特にX 1・2 Y 8～10区、X 3 Y 10・11区で密に分布する。反対に調査区西側の流路02以西では全く検出されず、X 1・2 Y 11区も密度が薄い。出土遺物・方位などから、①真北からやや西にふる一群、②真北から20～30度程東へ振る一群、③ほぼ真北方向及びそれに直交する一群、④真北からやや東方向へ振るもの及びそれに直交する一群の4群に分類可能である。

各群の前後関係は、切り合い関係・出土遺物から①→②→③→④の順になると考えられる。時期は②が6世紀後半から7世紀前半、③が8世紀前半～中頃、④が8世紀後半～9世紀代と考えられ、①は出土遺物がなく時期は明らかではない。

流路-02 (第5・6図)

調査区の西側で検出された。調査区を南北に縦貫し、さらに調査区外へと延びている。幅は2.2～3.5m、断面形態は船底状をなし、地山からの深さは約40cmを測る。覆土は、大まかに5層に分類でき、第1層・暗灰色土、第2層・茶褐色土、第3層・灰色土、第4層・暗灰色土、第5層・黄褐色土の順で堆積している。

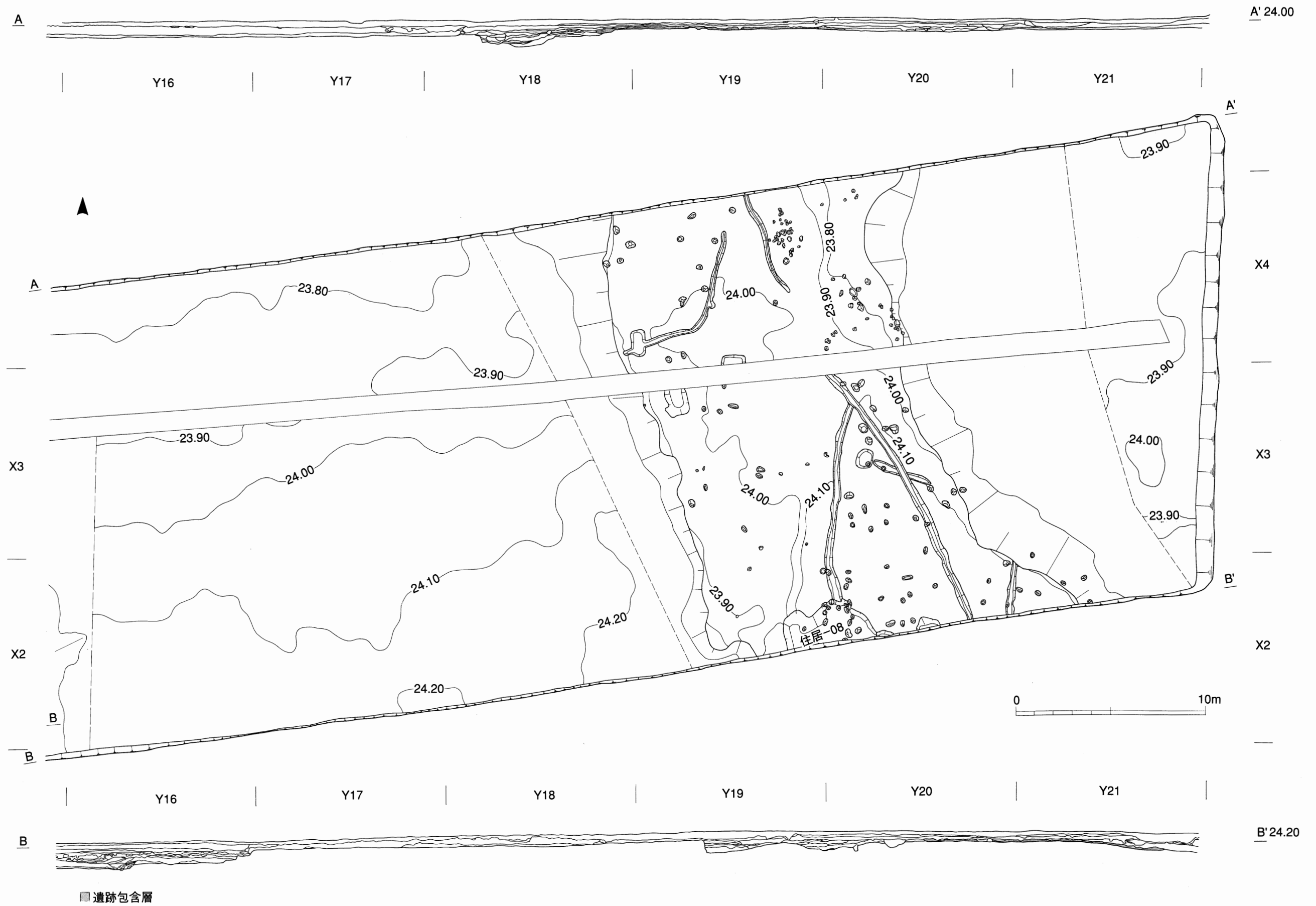
遺物は細片のみの出土であり、遺構の所属時期は明らかではない。

第4節 中央東調査区

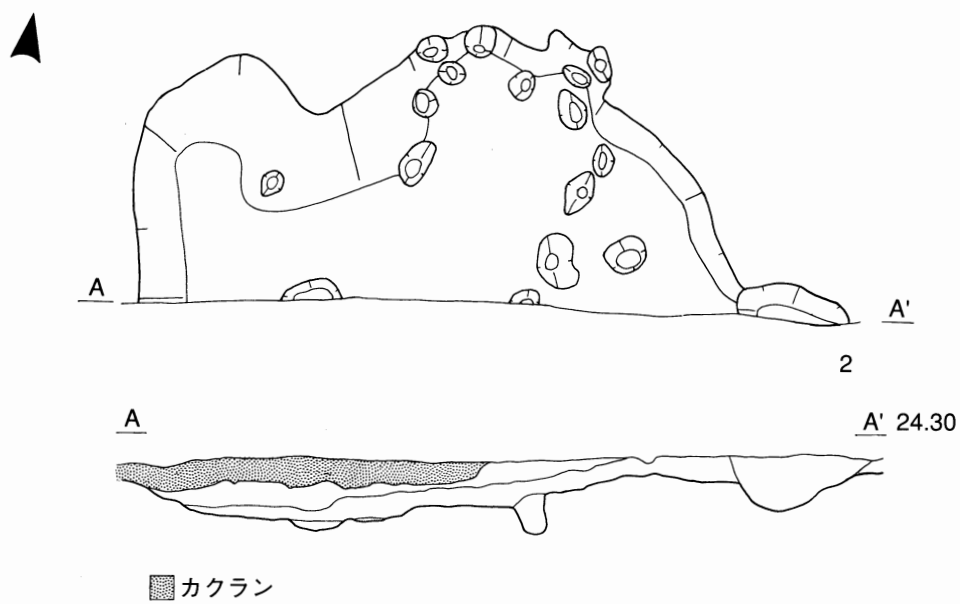
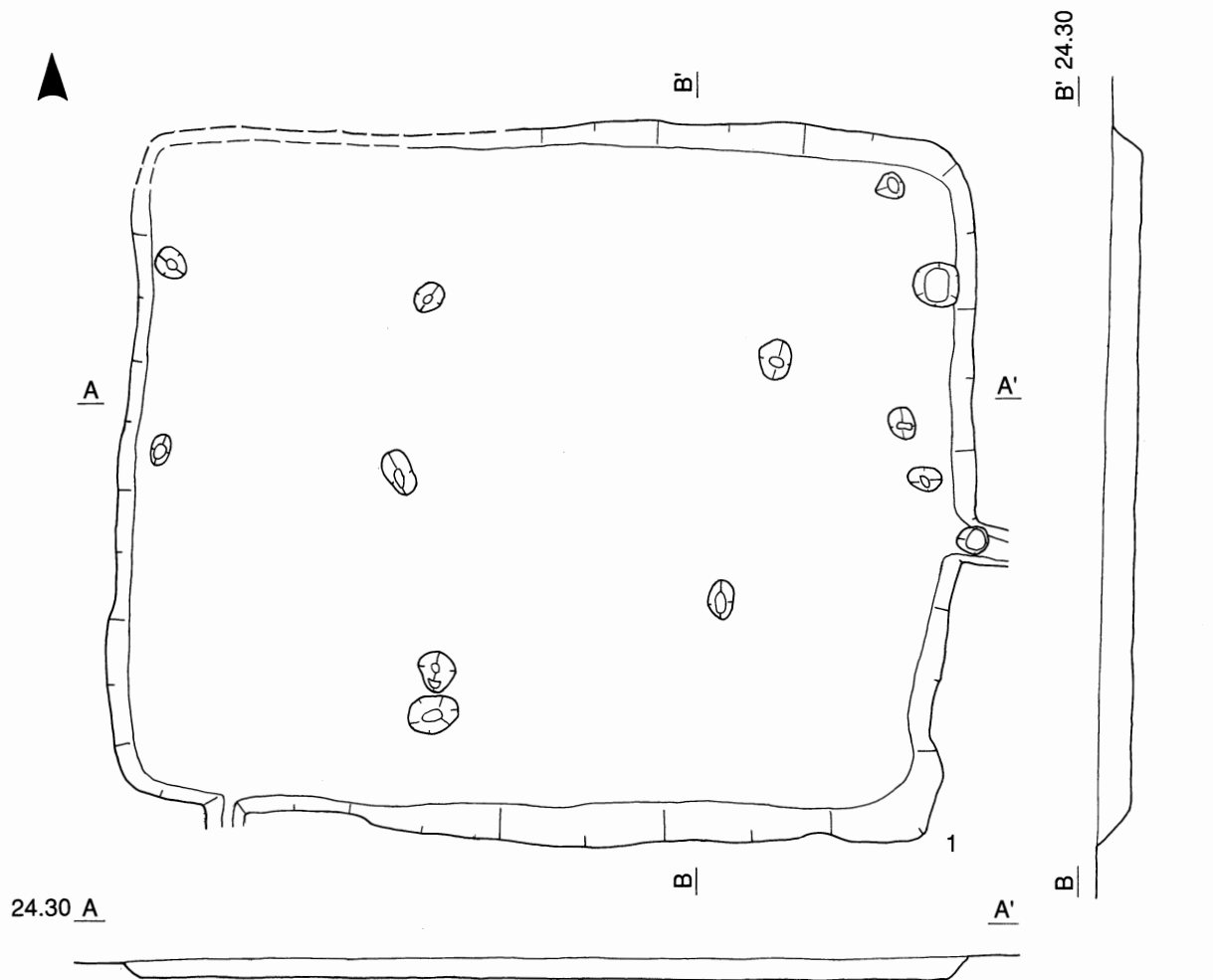
(1) 調査区の概要 (第5・12図)

発掘調査面積は約1,700㎡である。この調査区は発掘調査の便宜上、中央西調査区と分割した地区であり、調査区の西端は、中央西調査区と接する。また、調査区中央の幅30～50mの部分には、改修以前の旧八幡川の流路跡があり、遺構は全く検出されなかった。

検出された遺構は、竪穴住居2棟・土坑4基・穴111個・溝3条・畝状遺構25条・流路3条である。これらの遺構は、流路跡によって調査区の東西に分かれて存在し、東西で時期が大きく異なる。



第12図 中央東調査区東側全体図 (S=1/200)



第13図 中央東調査区遺構実測図 1. 住居-07 2. 住居-08 (S=1/60)

西側の遺構・遺物の時期は、縄文時代から近世におよぶが、古墳時代～平安時代に顕著な遺構が集中している。一方、東側の遺構・遺物の時期は縄文時代と古墳時代終末～古代前期にはほぼ限定される。

(2) 遺構

住居-07 (第5・13・24・25図)

調査区の南端の西寄り、X 1・2 Y 13・14区に位置し、一部が調査区外にかかる形で検出された。平面形態は東西約6.8m、南北約5.8mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。住居南側と東側には調査区外へと延びる排水溝を持つ。主柱配置は4本または6本主柱と考えられるが、東西の壁際に対応する穴が検出されていることから、壁際の多主柱型住居の可能性もある。主軸方位はN-3°-Eを指すものと推定される。覆土は、黒褐色土の単層である。

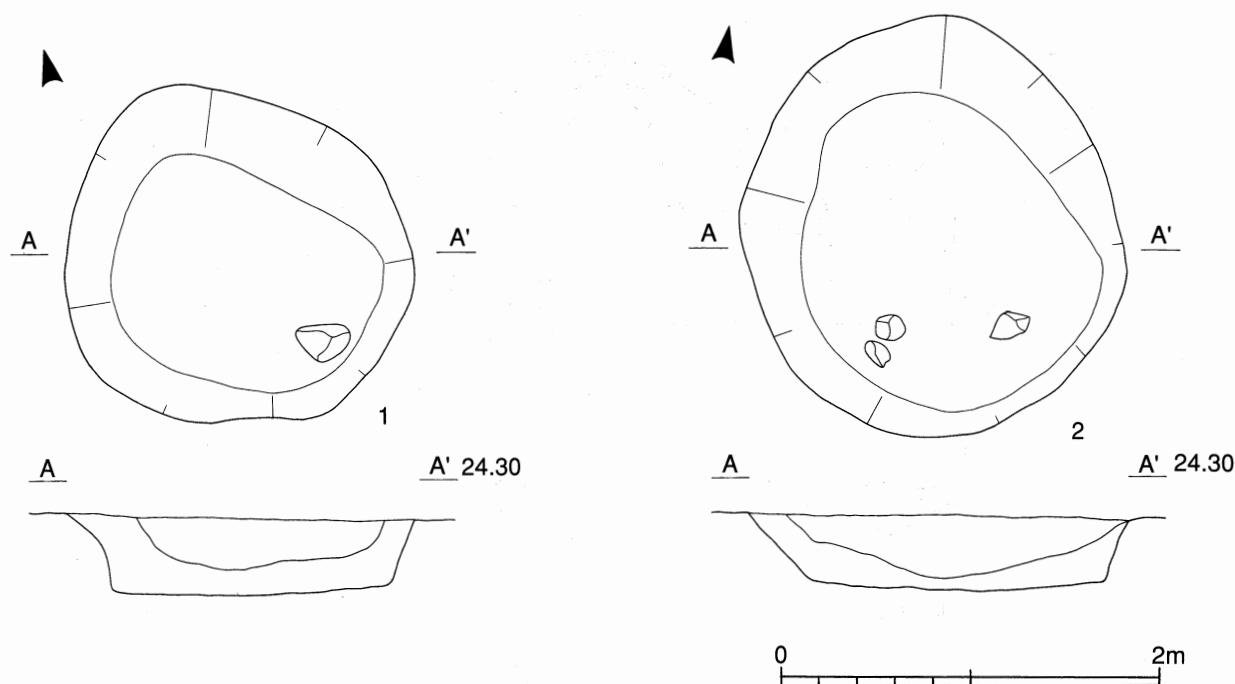
住居床面から古墳時代前期に属する遺物が多数出土しており、遺構の時期も古墳時代前期と考えられる。

なお、本遺構検出中に多数の遺物が出土しており(第25図123~140)、住居出土品と類似する時期のものであることから、土器集中区として扱った。それらの遺物も本遺構に属していた可能性がある。

住居-08 (第12・13・30図)

調査区の東側、X 2 Y 19・20区に位置し、南壁にかかる形で検出された。住居跡の北隅が明らかになったのみで、残る大半は調査区外にあって、未調査である。上部に穴-369が重複し、住居床面に達している。また、遺構面上層は後世の攪乱を受けており、平面形は崩れているが、隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは50cmを測る。南壁沿いで検出された穴が柱穴になる可能性を持つが、主柱配置・住居方位は不明である。また、住居跡北隅で、多数の小穴が検出されている。覆土は第1層・暗灰色粘質土、第2層・暗褐色粘質土で、攪乱は第2層・住居床面には達していない。

遺物は、床面直上から6世紀末～7世紀前半と考えられる鍋(第30図301)が出土しており、遺構の時期も同時期と推定される。



第14図 中央東調査区遺構実測図 1. 土坑-09 2. 土坑-10 (S=1/40)

土坑一09 (第12・14図)

調査区の西端、X 2 Y12区で検出された。径約2mの円形を呈し、検出面からの深さは46cmを測る。溝一17と重複し、本遺構の方が新しい。覆土は第1層・黒褐色土、第2層・暗オリーブ褐色土である。

遺物は細片のみの出土であり、遺構の所属時期は明らかではない。

土坑一10 (第12・14図)

調査区の西側、X 2 Y12区で検出された。径約2.2mの円形を呈し、検出面からの深さは41cmを測る。溝一20と重複し、本遺構のほうが新しい。覆土は第1層・暗オリーブ褐色土、第2層・オリーブ褐色土である。

遺物は細片のみの出土であり、遺構の所属時期は明らかではない。

畝状遺構 (第5図)

畑跡と想定される畝状遺構は、出土遺物・方位などから、真北から20～30度程東へ振るものとほぼ真北を向くものの2群に分類できる。前者は中央西調査区の畝状遺構②群、後者は③群と方位を同じくし、両者の切り合い関係や出土遺物からも、それぞれが中央西調査区の畝状遺構②・③群と同一グループになると考えられる。

第5節 東調査区

(1) 調査区の概要 (第15・16図)

発掘調査面積は約2,300m²である。この調査区は、用水によって東西に二分され、東西で遺構の在り方が大きく異なる。用水の西側をW地区、東側をE地区とする。W地区では、遺構が一面に分布し、特に調査区の西半で密となる。一方、E地区は、遺構の分布が疎らで、顕著な遺構も少ない。

検出された遺構は、竪穴住居2棟・掘立柱建物27棟、土坑7基、穴712個・溝4条である。時期は、縄文時代・古墳時代終末～近世におよぶが、時期が確定できる遺構は古墳時代後期のものだけである。特に、掘立柱建物は共伴遺物が少なく、時期を確定できるものは少ない。

(2) 遺構

住居一09 (第15～17・29図)

W地区の中央やや西寄り、X 3・4 Y23・24区に位置し、周囲には、若干丸みを帯びた方形の外周溝が、南東側を開放する形で巡っている。上部に土坑一22、穴516・517・1071～1073・1075～1089・1091～1129・1131～1151が重複し、それらの下部は住居床面に達している。平面形態は長辺約9.4m、短辺約9.1mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは10～20cmを測る。4本主柱で、主軸方位はN-40°-Eを指す。柱穴堀方は46～56cmの円形・不整円形で、住居床面からの深さは32～59cmを測る。柱穴間距離は、南北約4.3m、東西約3.4mである。住居跡と溝との距離は、最大で約3.4m、最小で約1.2mを測る。

覆土は、第1層・黄褐色土混じり黒褐色土、第2層・黄褐色土の順で堆積している。

遺物は6世紀末の須恵器杯H (第29図281)・土師器甕 (第29図288・290・291・295) が出土しており、遺構の時期も同時期と考えられる。

住居一10 (第15・16・18・30図)

W地区西側の北端、X 5 Y23・24区に位置し、一部が調査区外にかかる形で検出された。住居の周囲には、若干丸みを帯びた方形の外周溝が、南西側を開放する形で巡っている。上部に穴1152～1163が重複し、それらの下部は住居床面に達している。平面形態は東西約5.0m、南北4.2m以上の隅丸(長)方形を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。2本主柱と考えられ、主軸方位はN-10°-Eを指す。柱穴堀方は48cmの円形で、床面からの深さは31cm

を測る。住居跡と溝との距離は、最大で約4.1m、最小で1.3mを測る。

覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土混じり黒褐色土、第3層・黄褐色土の順で堆積している。

遺物は6世紀末～7世紀前半の土師器甕（第29図294）が出土しており、外周溝からも同時期の土師器甕（第29図285・296）が出土している。住居-09・10の外周溝は連結しており、住居-09と同様に6世紀末の可能性が高いものと考えられる。

建物-13（第15・16図）

W地区南東端で検出された、3間以上（5.2m以上）×2間（6.4m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-29°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が東から1.5m・1.5m・1.3m、梁行が南から2.8m・2.9mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）24～46cmの円形・楕円形を呈し、深さは12～18cmを測る。

建物-14（第15・16図）

W地区南東端で検出された、2間以上（6.4m以上）×1間（3.9m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-16°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が南から1.5m・2.1m・2.8m、梁行が3.9mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）25～41cmの円形・楕円形を呈し、深さは12～24cmを測る。

建物-15（第15・16図）

W地区南東で検出された、3間以上（4.4m以上）×2間（3.4m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-15°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が南から1.2m・1.4m・1.8m、梁行が1.7mの等間である。柱穴堀方は、長さ（径）26～34cmの円形・楕円形を呈し、深さは12～32cmを測る。

なお、本遺構は北に1間（1.6m）延び、梁行は1間となる可能性もある。

建物-16（第15・16図）

W地区南端やや西側で検出された、2間（3.2m）×1間以上（2.0m以上）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-2°-Eを指す。柱間寸法は、南北柱列が2.0m、東西柱列が東から1.7m・1.5mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）22～41cmの円形・楕円形を呈し、深さは8～17cmを測る。

建物-17（第15・16図）

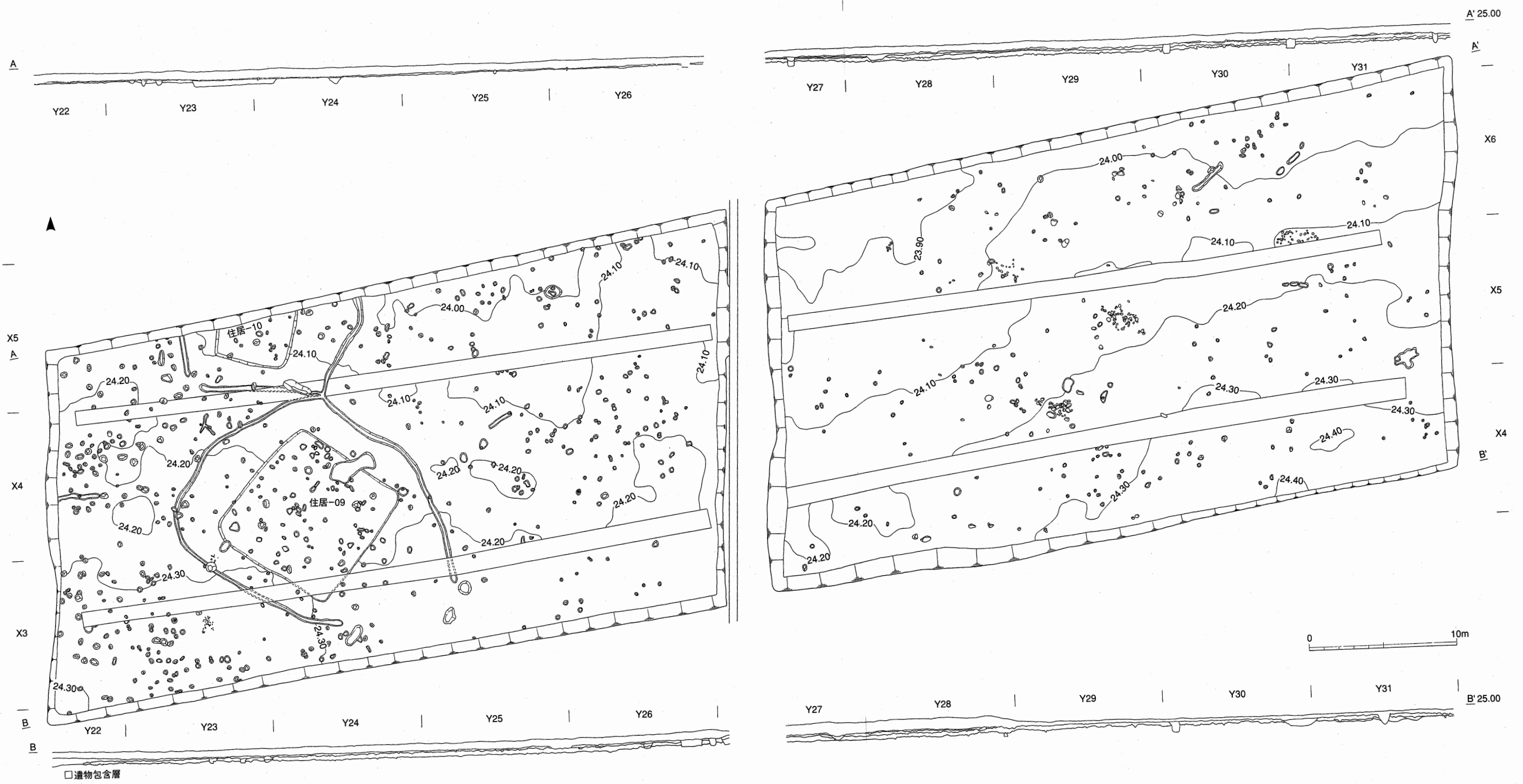
W地区中央やや南で検出された、2間（2.8m）×2間（2.8m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとると真北を指す。柱間寸法は、南北柱列・東西柱列ともに1.4mの等間である。柱穴堀方は、長さ（径）28～48cmの円形・楕円形・不整楕円形を呈し、深さは12～41cmを測る。

建物-18（第15・16図）

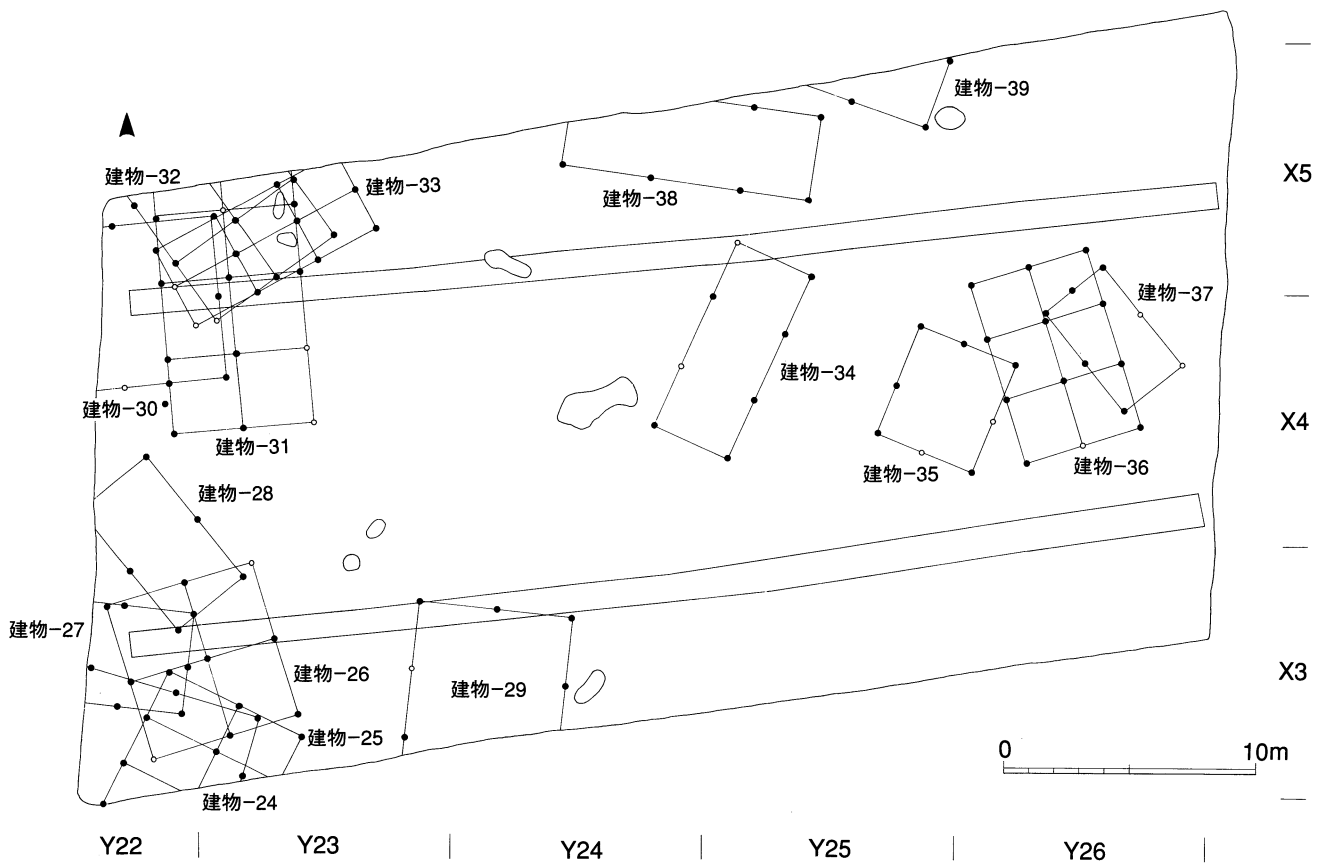
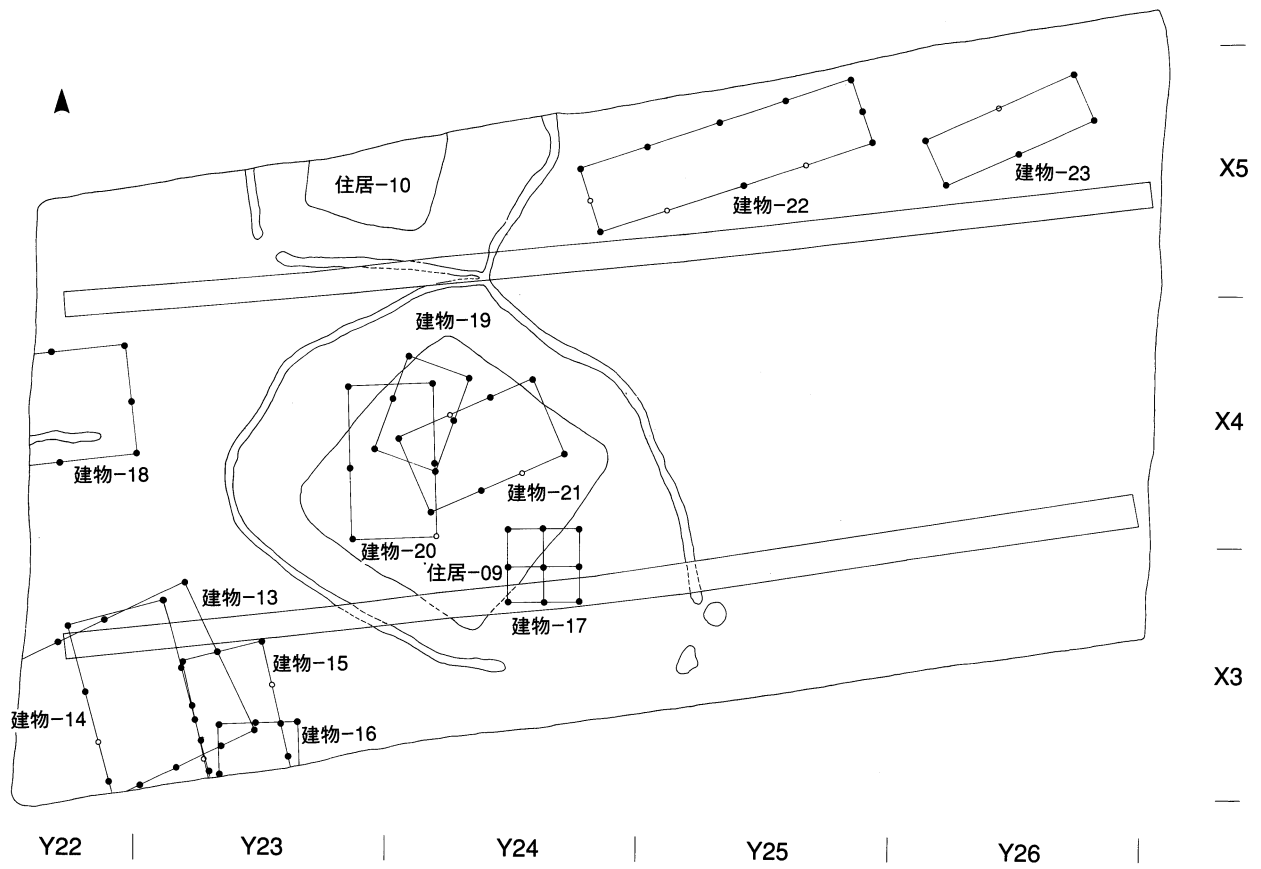
W地区東端中央で検出された、2間（4.4m）×1間以上（2.9m以上）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-8°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が南から2.1m・2.3m、東西柱列が2.9mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）12～45cmの円形・楕円形を呈し、深さは10～18cmを測る。

建物-19（第15・16図）

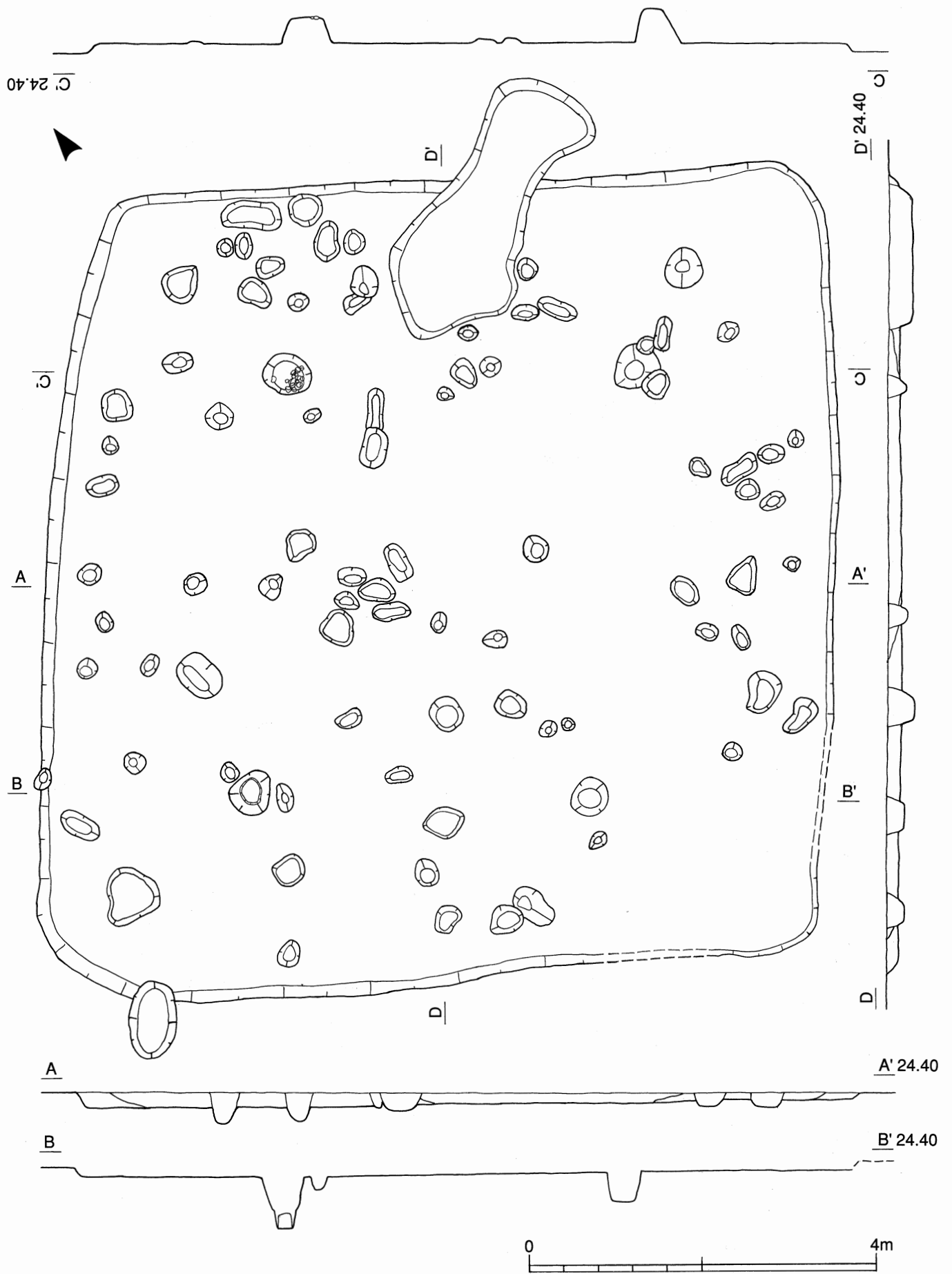
W地区中央やや西側で検出された、2間（4.0m）×1間（2.4m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-20°-Eを指す。柱間寸法は、桁行が南から2.2m・1.8m、梁行が2.4mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）23～40cmの円形・楕円形を呈し、深さは8～20cmを測る。



第15図 東調査区全体図 (S=1/200)



第16図 東調査区W地区時期別遺構配置図 上図 古墳時代後期以前 下図 古代以降 (S=1/300)



第17図 東調査区遺構実測図 住居-09 (S=1/60)

建物-20 (第15・16図)

W地区中央で検出された、2間(6.1m)×1間(3.5m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-2°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が南から2.9m・3.2m、梁行が3.5mを測る。柱穴掘方は、長さ(径)24~36cmの円形・楕円形を呈し、深さは10~22cmを測る。

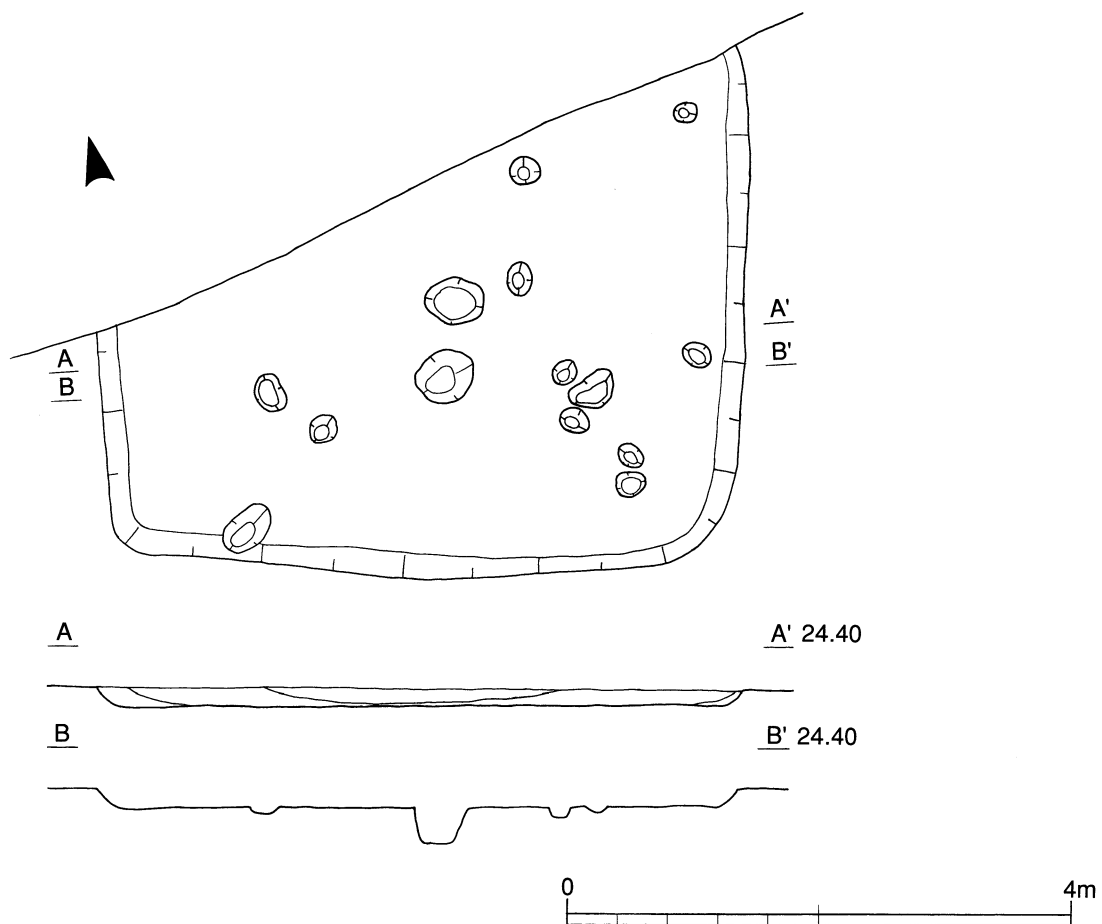
建物-21 (第15・16図)

W地区中央で検出された、3間(5.7m)×1間(3.3m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-24°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が東から1.8m・1.8m・2.1m、梁行が3.3mを測る。柱穴掘方は、長さ(径)28~42cmの円形・楕円形を呈し、深さは12~23cmを測る。

柱穴から7世紀初頭と推定される杯H(第29図279)が出土しており、遺構の時期も同時期と考えられる。

建物-22 (第15・16図)

W地区南東端で検出された、4間(11.4m)×2間(2.4m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-20°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が西から2.8m・2.8m・3.0m・2.8m、梁行が1.2mの等間である。柱穴掘方は、



第18図 東調査区遺構実測図 住居-10 (S=1/60)

長さ（径）19～43cmの円形・楕円形・不整楕円形と不揃いで、深さは12～24cmを測る。

建物-23（第15・16図）

W地区南東端で検出された、2間（6.4m）×1間（2.1m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-24°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が3.2mの等間、梁行が2.1mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）22～36cmの円形・楕円形を呈し、深さは11～15cmを測る。

建物-24（第15・16図）

W地区南東端で検出された、2間以上（6.4m以上）×1間以上（2.4m以上）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-17°-Eを指す。柱間寸法は、南北柱列が2.4mを測り、東西柱列が3.2mの等間である。柱穴堀方は、長さ（径）22～40cmの円形・楕円形を呈し、深さは10～12cmを測る。

建物-25（第15・16図）

W地区南西端で検出された、3間以上（5.6m以上）×2間（5.8m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-25°-Eを指す。柱間寸法は、桁行が南から1.8m・2.0m・1.8m、梁行が東から2.8m・3.0mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）32～60cmの円形・楕円形を呈し、深さは12～24cmを測る。

建物-26（第15・16図）

W地区南西端で検出された、2間（6.4m）×2間（6.0m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-17°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が3.2mの等間、東西柱列が東から2.8m・3.2mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）24～40cmの円形・楕円形を呈し、深さは12～18cmを測る。

建物-27（第15・16図）

W地区南西端で検出された、2間（4.1m）×1間以上（2.6m以上）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-6°-Eを指す。柱間寸法は、南北柱列が南から2.0m・2.1m、東西柱列が2.6mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）40～50cmの円形・楕円形を呈し、深さは18～34cmを測る。

建物-28（第15・16図）

W地区西端で検出された、2間（6.0m）×1間（3.3m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-40°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が南から2.9m・3.1m、梁行が3.3mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）30～46cmの楕円形を呈し、深さは20～34cmを測る。

建物-29（第15・16図）

W地区中央南端で検出された、2間以上（5.4m以上）×2間（6.2m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-6°-Eを指す。柱間寸法は、南北柱列が南から2.8m・2.6m、東西柱列が東から3.0m・3.2mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）16～40cmの円形・楕円形を呈し、深さは15～24cmを測る。

建物-30（第15・16図）

W地区西端で検出された、2間以上（4.2m以上）×2間（6.4m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-6°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が3.2mの等間、東西柱列が東から2.2m・2.0mを測る。柱穴堀方は、長さ（径）24～44cmの円形・楕円形を呈し、深さは12～32cmを測る。

建物-31（第15・16図）

W地区北西端で検出された、3間以上（8.6m以上）×2間（5.6m）の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-5°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が南から3.0m・2.8m・2.8mを測り、梁行は2.8mの等間である。柱穴堀方は、長さ（径）28～60cmの円形・楕円形を呈し、深さは20～24cmを測る。

建物-32 (第15・16図)

W地区北西端で検出された、2間以上(5.8m以上)×2間(5.6m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-39°-Wを指す。柱間寸法は、南北柱列が南から3.0m・2.8mを測り、東西柱列は2.8mの等間である。柱穴堀方は、長さ(径)32~52cmの楕円形・不整形円形を呈し、深さは15~28cmを測る。

建物-33 (第15・16図)

W地区北西端で検出された、3間(8.2m)×2間(3.4m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-29°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が東から2.6m・2.8m・2.8mを測り、梁行は1.7mの等間である。柱穴堀方は、長さ(径)20~40cmの円形・楕円形を呈し、深さは14~30cmを測る。

建物-34 (第15・16図)

W地区南東端で検出された、3間(8.0m)×1間(3.2m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-25°-Eを指す。柱間寸法は、桁行が南から2.6m・2.8m・2.6m、梁行が3.2mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)24~26cmの円形を呈し、深さは12~20cmを測る。

建物-35 (第15・16図)

W地区中央東側で検出された、2間(4.6m)×2間(4.0m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-23°-Eを指す。柱間寸法は、南北柱列が南から2.0m・2.6m、東西柱列が東から2.2m・1.8mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)21~37cmの円形を呈し、深さは11~22cmを測る。

建物-36 (第15・16図)

W地区東側で検出された、3間(7.6m)×2間(4.8m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-18°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が南から2.6m・2.6m・2.4mを測り、梁行は2.4mの等間である。柱穴堀方は、長さ(径)20~40cmの円形・隅丸方形を呈し、深さは12~22cmを測る。

建物-37 (第15・16図)

W地区東端で検出された、2間(5.0m)×1間(3.0m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-40°-Wを指す。柱間寸法は、桁行が南から2.4m・2.6m、梁行が3.0mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)24~36cmの円形・楕円形を呈し、深さは10~18cmを測る。

建物-38 (第15・16図)

W地区北端で検出された、3間(9.8m)×1間(3.4m)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-7°-Eを指す。柱間寸法は、桁行が東から2.8m・3.4m・3.6m、梁行は3.4mを測る。柱穴堀方は、長さ(径)24~46cmの円形・楕円形を呈し、深さは12~18cmを測る。

建物-39 (第15・16図)

W地区北端で検出された、1間以上(3.2m以上)×1間以上(2.8m以上)の掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN-21°-Eを指す。柱穴堀方は、長さ(径)26~36cmの円形を呈し、深さは16~18cmを測る。

第6節 遺物

土器の調整技法には、ハケメ調整・ヘラミガキ調整・ナデ調整・ヘラケズリ調整などがあるが、以下の記述では「調整」を省略し、単に「ハケメ」「ヘラミガキ」「ナデ」「ヘラケズリ」…と記す。

(1) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、調査区全体から出土しているが、特に中央西調査区で後期末葉の遺物が多く、中央東調査区の東側で晩期末葉の遺物量が多い。文様の名称は、『縄文土器大観4』に依った(小林・小川1989)。

A 後期前半の土器(第19図1) 気屋式に比定できる土器である。

1は口縁部が内湾気味に立ち上がる浅鉢で、口径は約13cmを測る。口縁部から底部にかけて幾何学文様を施す。文様外の縄文は磨り消し、文様内には右下がりのRL縄文を残す。

B 後期末葉の土器(第19図2～6) 八日市新保式に比定できる一群である

2は口縁部が斜め上方へ直線的に立ち上がる鉢で、口径は約14cmを測る。口縁部には綾杉文を施し、その下部には3条の上方弧文と2条の沈線を連結させた文様を施す。後期後葉に属する可能性もある。

3は体部が直線的に外傾し、口縁端部が肥厚する浅鉢で、口径は約26cmを測る。口縁部には背向弧文と3条の縦位沈線を交互に施し、体部は内外面ともに丁寧に磨いている。外面にはススが付着している。

4は体部が直線的に外傾し、ほぼ直立する短い口縁部がつく浅鉢で、口径は約27cmを測る。口縁部には3単位の縦位の短い隆帯によって寸断される1条の沈線が巡る。体部は内外面ともに丁寧に磨いている。

5は体部が直線的に外傾し、内屈する口縁部を持つ鉢で、口径は約29cmを測る。口縁端部には3条を1単位とする斜位の短沈線を綾杉状に施す。口縁部には横位の沈線文・上方弧文・対向弧文を施し、それらを寸断するように縦位の短い対向弧文を施す。地文は右下がりのRL縄文であるが、文様内を除いては磨り消されている。

6は口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢で、口径は約24cmを測る。口縁上部には無文帯を巡らせ、その下には左下がりのLR縄文を施す。本江・広野新遺跡の平縁深鉢P類に類似する。

C 晩期後葉から末葉の土器(第19図7～16) 大洞A式から大洞A'式併行期に比定できる一群である。

7は口縁部がほぼ直線的に立ち上がる鉢で、口径は約35cmを測る。口縁部外面には工字文を施し、体部外面は研磨されている。また、口縁部内外面には、赤彩が施されている。

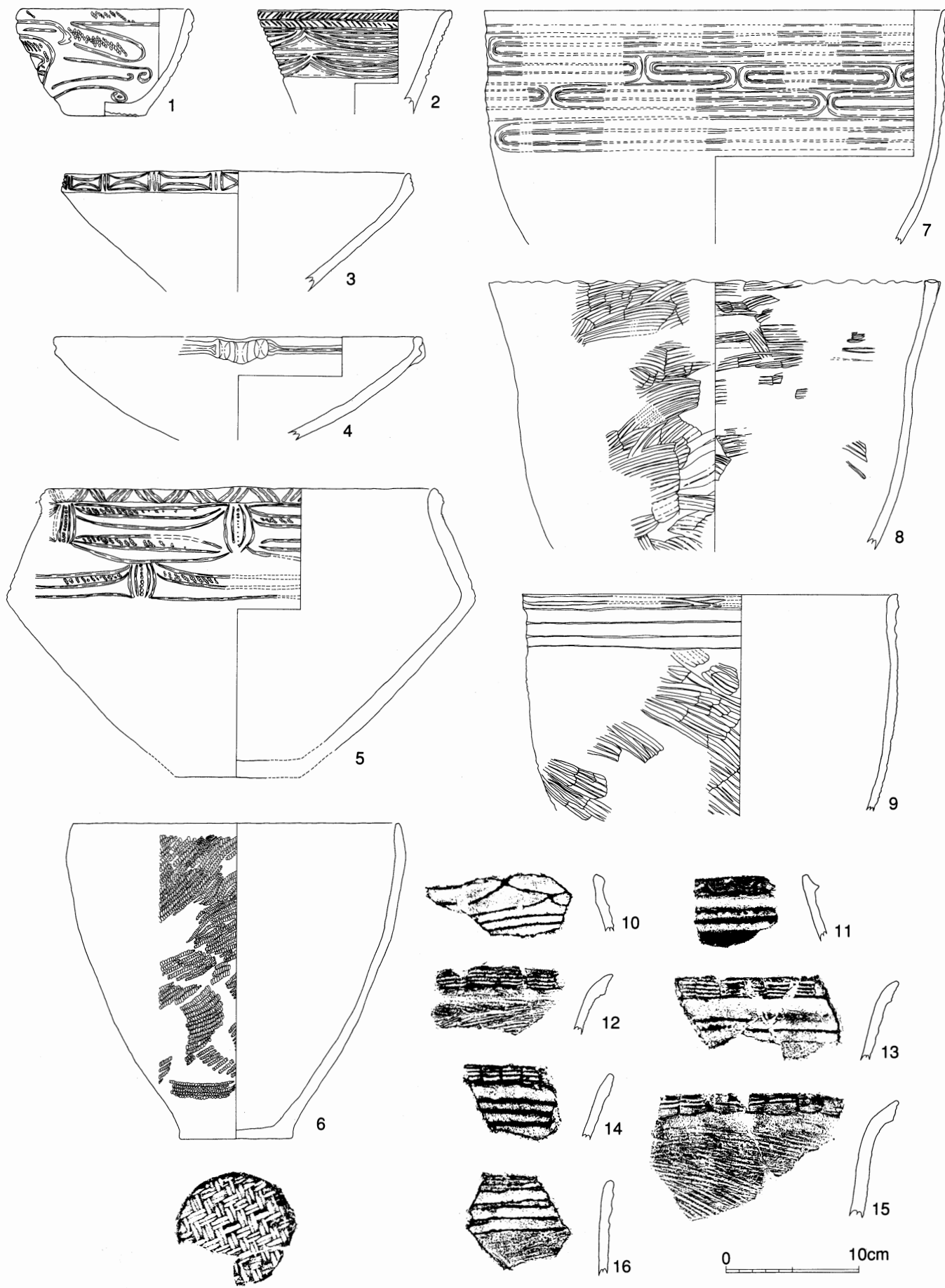
8は体部上半まで内湾気味に立ち上がり、口縁部が若干外傾する深鉢で、口径は約34cmを測る。口縁端部は指押圧により小波状を呈する。地文は横位とやや左下がりの条痕である。外面にはススが付着している。

9・16は口縁部がほぼ直線的に立ち上がる深鉢で、口縁部外面には指ナデによる3条の直線文を施す。9は口径約28cmを測り、地文は右下がりの条痕である。16の地文は左下がりの条痕で、外面にはススが付着している。

10は口縁部がやや内傾する浅鉢または無頸壺で、口縁部外面には浮線文を施し、赤彩されている。

11は口縁部がやや内傾する甕で、口縁部上部には刻みのない突帯を持つ。大洞C₂式併行期に属する可能性もある。

12～15は口縁部がやや外傾し、口縁端部が若干肥厚する甕で、口縁端部は二枚貝で連続的に押圧することにより、面取りした形態となっている。13・14の口縁部外面にはヘラもしくは指頭により直線文が施される。12の地文は左下がりの条痕で、15の地文は右下がりの条痕である。



第19図 遺物実測図 包含層 (S=1/4)

(2) 古墳時代前期の遺物

古墳時代前期の遺物は、中央西調査区と中央東調査区の西側の遺構及び遺物包含層からの出土が大部分である。竪穴住居から出土した土器は小破片のものも多かったが、住居-01・03・06・07や土坑-02では、完形に近いものや大型破片が床面直上から出土している。特に焼失家屋と考えられる住居-03では、床に据え付けられたまま潰れた状態の土器が、住居の西壁沿いと北東隅付近でまとまって出土しており、良好な一括資料と言える。一方、異なった遺構から出土した破片が接合できたもの(第22図47)もあり、遺構間相互の時期関係を知る上での手がかりになっている。

遺物包含層からの出土品は、量が多いものの、復元できるような資料は数少ない。また、X=1・2、Y=13・14地区からは住居-07の検出中に多くの土器が出土しており、時期的にも類似することから、住居-07の上層資料として捉えられる可能性が高い。

土器の分類は、遺物包含層からの出土も多いことから、住居跡・土坑・穴・溝など遺構からの出土遺物も含めて一括して器種ごとに分類した。また、全形を知り得ない器種が多く、主に口縁部の形態差によって分類を行った。

器種は、甕・壺・鉢・高杯・器台・蓋がある。

甕(第20図、第22図17~24・37~42、第23図56~64・72~75・83・84、第24図85~112、第25図123~135・141~145・158、第26図161~165・179・180・182・183・186・187、第27図191~225、第28図226~238)

甕はA1・A2・B1~B9・C1~C4・D1~D4・E1~E10・F・G1~G11・H1・H2・I・J類があり、出土量は最も多い。

甕A類(第25図123・141)有段口縁を持ち、口縁部に擬凹線文を施すものを一括した。

甕A1(第25図123)口縁部が斜め上方に弱く外反しながら立ち上がり、口縁下部がやや突出する。頸部は内面に面を持つ。口縁部外面には6条の擬凹線文を施し、口縁部内面と頸部内外面にはヨコナデを行う。

甕A2(第25図141)口縁部が緩やかに斜め上方に立ち上がるもので、口縁部外面には5条の擬凹線文を施す。

甕B類(第22図17・22・37、第23図83・84、第24図86、第25図142・143、第26図182・186・187、第27図191~202)有段口縁を持ち、口縁部無文のもの。

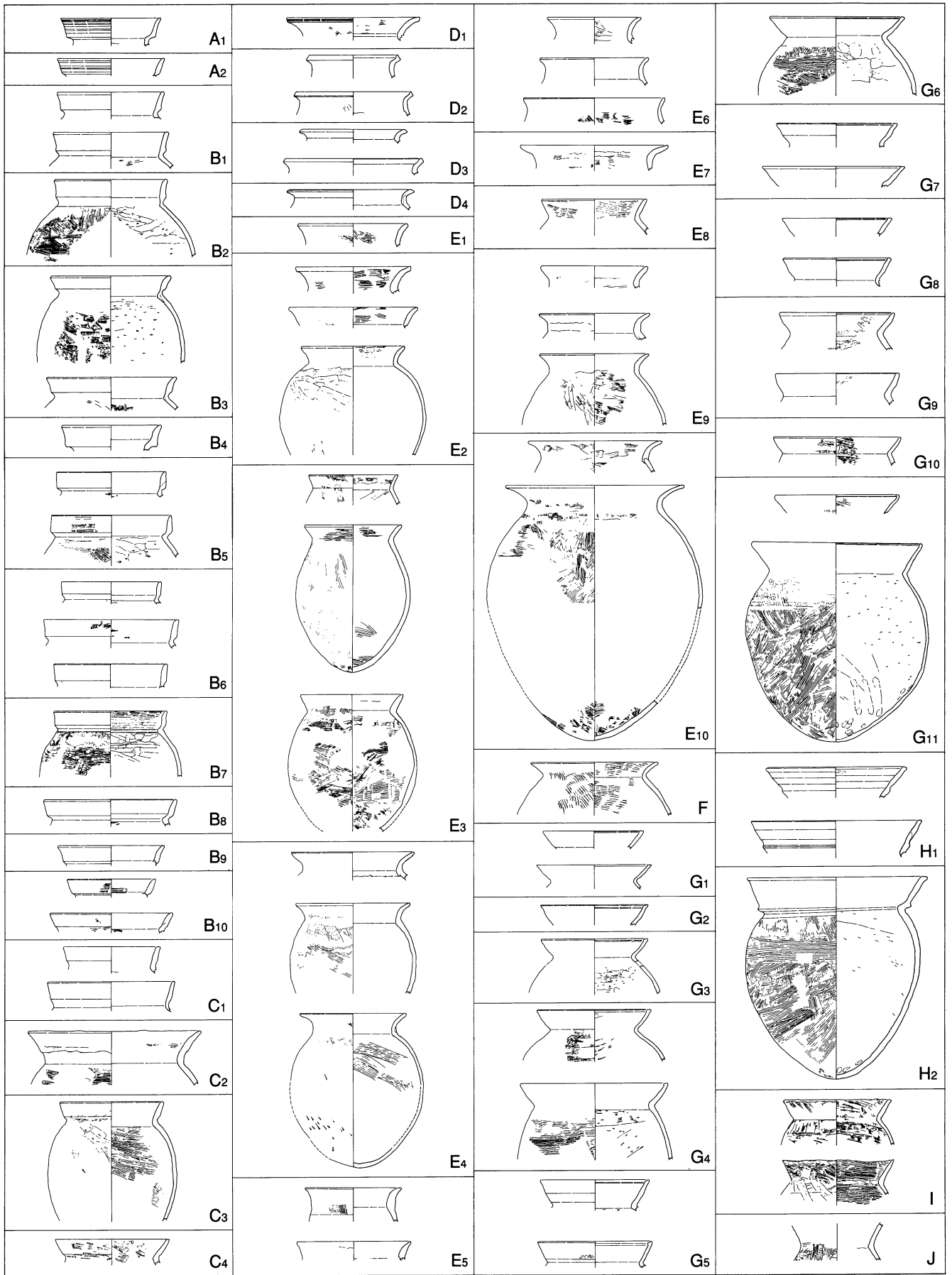
甕B1(第27図191~193)口縁部がやや斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁下部が突出する。193は頸部内面以下にヘラケズリを施す。

甕B2(第25図143)口縁部が頸部から直立するもので、口縁部は僅かに外反しながら立ち上がり、口縁部下端は突出する。頸部から胴部外面にはハケを行い、内面は屈曲部までヘラケズリを施す。口縁部と頸部の内外面にはヨコナデを行い、特に外面のナデは丁寧で、頸部のタテハケをナデ消す。

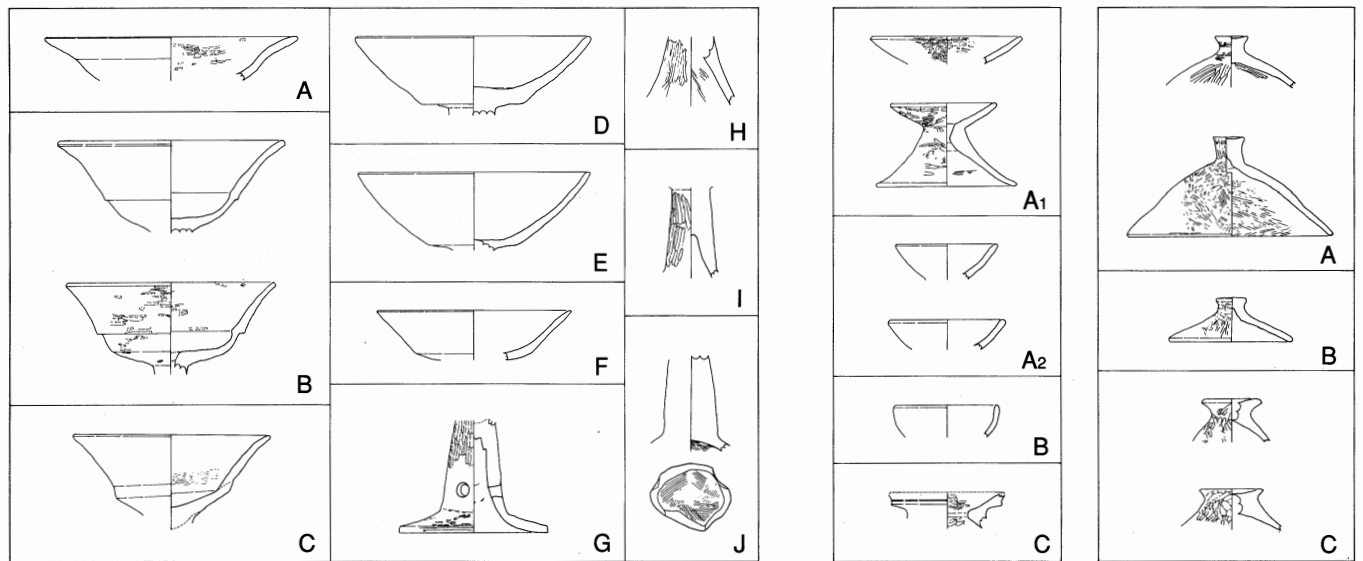
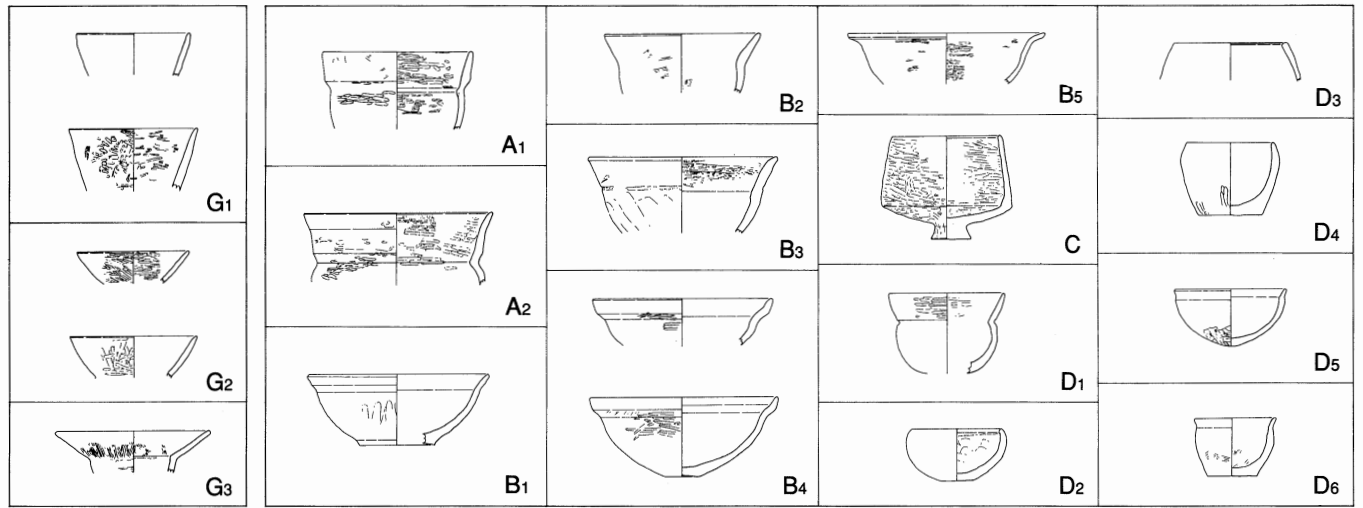
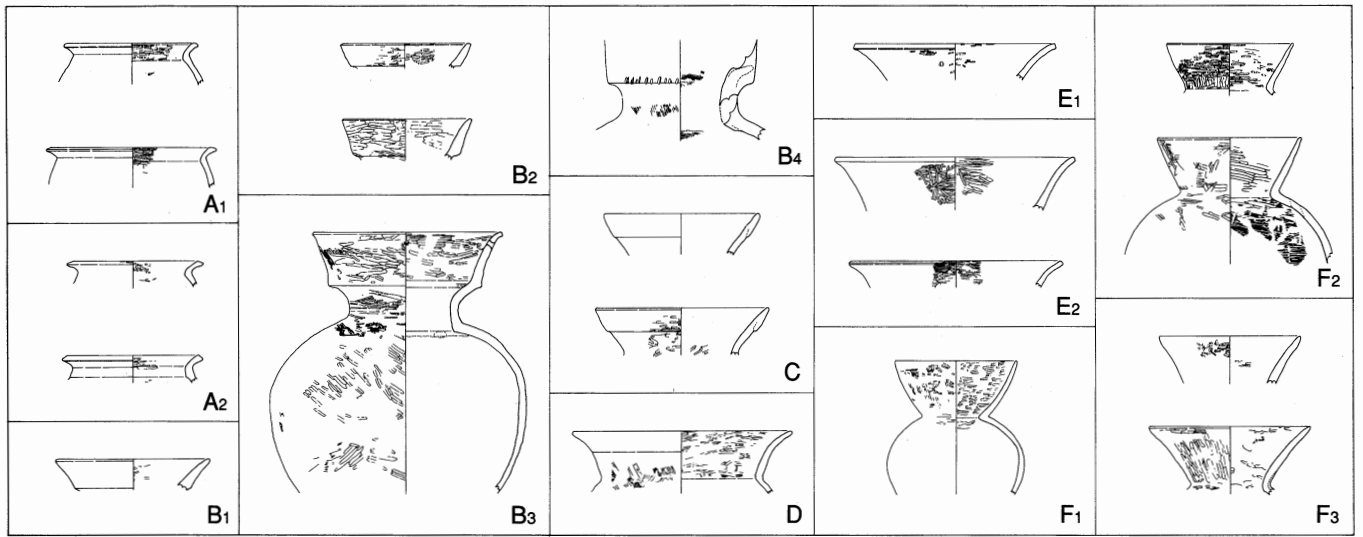
甕B3(第23図84、第27図195)口縁部がやや斜め上方に立ち上がるもので、頸部に比べて口縁部が厚く、口縁下部がやや突出する。また、頸部内面は粘土紐の張り付けにより「く」の字状を呈する。84は胴部外面にはハケ、内面は屈曲部までヘラケズリを施す。口縁部と頸部の外面には丁寧にヨコナデを施し、口縁端部と口縁部内面にはナデを行う。

甕B4(第27図196)口縁部下端で屈曲し、ほぼ直立する。口縁部は弱く外反し、口縁下部が大きく突出する。口縁部と頸部の内外面にはヨコナデを行う。196は口縁部の小破片であり、壺となる可能性もある。

甕B5(第24図86、第25図142、第27図202)頸部が「く」の字状を呈し、口縁部は口縁下部で屈曲して、ほぼ直立する。口縁端部は尖り、口縁下部はやや突出する。142は頸部から胴部外面に右下がりのハケを行い、その後頸部に強いヨコナデを施す。胴部と頸部の内面は屈曲部までヘラケズリを施す。口縁部は外面にヨコハケ、内面にはヨコナデを行う。



第20図 甕分類図 (S=1/8)



第21図 壺・鉢・高杯・器台・蓋分類図 (壺 S=1/8 その他 S=1/6)

甕B6（第22図17、第26図182・187、第27図197）口縁下部で屈曲し、直線的に立ち上がる。口縁下部はやや突出する。17は口縁端部に工具で斜方向の刻みを施す。187は頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部内外面にヨコナデを行う。頸部外面はタテハケ、内面には屈曲部までヘラケズリを施す。

甕B7（第23図83）口縁下部で屈曲し、ほぼ直立する。口縁部は弱く外反し、口縁部から頸部まで器壁の厚さが変化しない。頸部は内面に幅の狭い面を持ち、肩が張る。口縁部外面はヨコナデを行い、口縁部内面は単位の大きな工具でナデた感じである。頸部から胴部外面にはタテハケを行った後、頸部には強いヨコナデを施し、肩部には断続的なヨコハケを施す。また、頸部から胴部内面にはヘラケズリを施す。

甕B8（第26図186）口縁部が下端で斜め上方に屈曲して、直線的にのびる。頸部は内面に幅の狭い面を持つ。口縁部内外面と頸部外面はナデを行い、頸部内面にはヘラケズリを施す。

甕B9（第27図199）口縁部が下端で屈曲し、弱く外反しながら直立気味に立ち上がる。

甕B10（第22図22・37、第27図200）頸部が「く」の字状を呈し、口縁下端で屈曲して斜め上方に立ち上がる。器壁の厚さは、口縁部から頸部までほとんど変化しない。200は口縁部と頸部の内外面にハケを行い、口縁部にはその後ヨコナデを施す。

甕C類（第23図57、第24図85・94・95、第27図203）口縁部が有段無文口縁に近い形態を呈し、甕B類の退化形態と推定されるもの。

甕C1（第24図85、第27図203）頸部の屈曲が弱く、口縁部は直立気味に立ち上がる。頸部外面を強くヨコナデして凹ませることにより、口縁部が有段状となる。

甕C2（第23図57）口縁部が外反してのび、口縁部を折り返すことにより有段状にする。頸部から胴部外面には右下がりのハケを行った後、断続的なヨコハケを施す。形態は甕E4類に似る。

甕C3（第24図95）頸部が「く」の字状を呈し、口縁部が短く外傾する。頸部外面を器具で押圧して凹ませることにより、口縁部が有段状となる。口縁部外面はハケの後ヨコナデを行う。頸部から胴部外面にはハケとヘラケズリを施し、内面にはハケを行う。形態はE3類に似る。

甕C4（第24図94）口縁部が内湾気味に外傾し、口縁下端から頸部にタテハケを入念に施して段をつけ、有段口縁状にする。口縁部内面・外面にはハケを残し、ヨコナデを施さない。形態・調整はG10類に似る。

甕D類（第26図183、第27図204～208）口縁部が短く外傾して口縁端部を面取りするものや、口縁端部に擬凹線文を施すものを一括した。

甕D1類（第27図208）口縁部が外反し、口縁端部に4条の擬凹線文を施す。

甕D2類（第27図204・205）頸部が若干立ち上がり、口縁部は短く外傾する。頸部から器壁が厚くなり、口縁部はさらに肥厚して断面三角形を呈する。

甕D3類（第26図183、第27図206）口縁部が短く外傾し、口縁端部が僅かに肥厚する。

甕D4類（第27図207）頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部が外に短く折れる甕で、逆「コ」の字状の形態になる。口縁端部には、1条の擬凹線文が巡る。口縁部内外面と頸部外面はヨコナデ、頸部内面にはヘラケズリを施す。

甕E類（第22図18・20・21・23・38～41、第23図56・60～63・72～74、第24図87～93、第25図124～126・144・158、第26図161・164、第27図209～220）在地の「く」の字口縁甕を一括した。

甕E1類（第22図20、第24図87）頸部の屈曲が弱く、緩やかに口縁部に至る。口縁部は外反し、口縁端部を面取りする。

甕E2類（第22図38・39、第23図60、第25図144、第27図210）口縁部が短く、斜め上方に弱く外反して開き、口縁端部を面取りするもの。口縁部内面にはハケの後ナデを行うが、ハケが明瞭に残るものが多い。210は肩の張る

器形で、胴部外面にはヘラケズリ状の調整を施す。

甕 E 3 類 (第22図18、第23図74、第24図88～90、第26図161、第27図209・211) 頸部が「く」の字状を呈し、口縁部が外反気味に斜め上方に開くもの。161は卵球形の甕で、胴部上半には断続的なヨコハケを施す。211は肩の張らない卵球形の甕で、底部は丸底である。胴部上半の内面にナデを行い、その他の部位にはハケを施す。

甕 E 4 類 (第22図23、第25図124・158、第27図214・215) 頸部で直立気味に立ち上がり、口縁部が斜め上方にのびるもの。158は胴部外面にヘラケズリ、内面にはハケを施す。215は胴部外面にハケを行い、内面にはナデを施す。158・215ともに頸部から胴部外面にタテハケを行うが、頸部にはその後ヨコナデを施し、ナデ消す。

甕 E 5 類 (第25図125、第27図220) 頸部が緩く立ち上がり、器壁の厚いもので、口縁部は先細りする。

甕 E 6 類 (第22図40、第23図63・73、第24図92・93、第27図216～219) 頸部での屈曲が弱く、短い口縁部がなだらかに外傾する。胴部は肩の張らない、小型の甕と考えられる。

甕 E 7 類 (第22図21、第23図72) 口縁部が大きく外反し、口縁内面を端部付近で若干凹ませるもの。21は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部は大きく外に開く。

甕 E 8 類 (第23図62、第25図126) 頸部が「く」の字状を呈し、口縁部が直線的に外傾するもの。口縁部内外面には粗いヨコハケを行う。形態的にはE 3 類に、口縁部の調整はI 類に類似する。

甕 E 9 類 (第22図41、第23図61、第26図164) 頸部が直立気味にのびて面を持ち、口縁部が外傾するもの。42・164は頸部外面にも面を持ち、逆「コ」の字状の口縁部となるもので、形態的にはD 4 類に近い。61は頸部内面に面を持つことから本類に含めた。

甕 E 10 類 (第23図56、第24図91) 頸部で屈曲して、斜め上方に口縁部が大きく外反してのびるもの。56は器高が36cmほどになると推定される大型品で、底部は丸底となる。

甕 F 類 (第27図222) 畿内の影響を受けていると推定されるもの。222は頸部で屈曲して、弱く外反しながら斜め上方にのびる。肩部外面には面を持っており、タタキを施していると思われるが、その他の部位に施しているヨコハケの原体との違いが明確ではない。

甕 G 類 (第22図24・42、第23図64・75、第24図97～112、第25図127～135・145、第26図162・165・179、第28図226～238) 布留甕・布留傾向甕と、それらの影響を受けていると推定されるものを一括した。

甕 G 1 (第22図24、第24図97、第25図127) 口縁部が内湾気味に外傾し、口縁端部が内側に僅かに肥厚するもの。口縁端部は水平で、中央付近が若干凹む。口縁部内外面にはヨコナデを施す。24は白みを帯びた色調を呈し、胎土も精良である。

甕 G 2 (第23図75) 口縁部が内湾気味に外傾し、口縁端部が内外に僅かに肥厚するもの。口縁端部はやや内傾し、中央付近で若干凹む。口縁部内面上半はナデ、口縁部内面下半と外面はヨコハケを施す。

甕 G 3 (第24図98・第25図129・132) 口縁部が内湾気味に外傾し、口縁端部が内側に明瞭に肥厚するもの。口縁端部はほぼ水平で、中央付近で若干凹む。132は、胴部上半の外面はヨコナデのみで、ヨコハケは施さない。内面はヘラケズリを施し、指圧痕が残る。

甕 G 4 (第24図99～101・103・104・109・110、第25図130・131・134、第28図226・228) 口縁部が内湾気味に外傾し、口縁端部が内側に明瞭に肥厚する。口縁端部は面取りし、水平に近い。甕 G 類の主体をなす類である。口縁部内外面にはヨコナデを行う。胴部外面はヨコハケ、胴部内面にはヘラケズリを施す。

甕 G 5 (第24図102・105、第25図133、第26図179、第28図227・229・230) 口縁部が内湾気味に外傾し、口縁端部が内側に明瞭に肥厚する。口縁端部は強く内傾し、面取りしている。133は、口縁部内外面にはハケの後ヨコナデを施す。胴部外面にはヨコハケ、内面にはヘラケズリを施す。

甕G 6（第22図42、第23図64、第24図107・111、第26図165・179、第28図231）口縁部が内湾気味に外傾し、口縁端部は丸みを帯びて肥厚する。口縁部内外面にはヨコナデを施す。110は、胴部外面にタテハケの後右下がりのハケを行い、最後に連続的なヨコハケを施す。頸部内面には指圧痕が残り、胴部内面にはヘラケズリを施す。

甕G 7（第24図106・108、第25図128、第28図234・238）口縁部は外傾して斜め上方にのびるが、口縁部半ば近くで傾斜が変化し、若干立ち上がる。端部の形態は多様で、細分が可能である。口縁部内外面にはヨコナデを施す。

甕G 8（第28図232・235・236）口縁部は外傾して斜め上方にのびるが、口縁部半ば近くで若干傾斜が変化する。口縁端部から頸部まで器壁の厚みはほぼ変わらないが、口縁端部近くの内面を沈線で凹ませることにより、端部は肥厚しているように見える。口縁部内外面にはヨコナデを施す。

甕G 9（第25図135、第28図237）頸部で強く屈曲し、内湾気味の口縁部が斜め上方にのびる。口縁端部は肥厚しない。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はハケの後ヨコナデを施す。135は胴部内面にヘラケズリを施す。

甕G 10（第25図145）頸部で強く屈曲し、内湾気味の口縁部が斜め上方にのびる。口縁端部は肥厚しない。口縁部内外面にはハケを施し、外面のみナデ消す。頸部内面にもハケを施す。

甕G 11（第26図162、第28図233）頸部で強く屈曲し、口縁部は斜め上方に直線的にのびる。口縁端部は丸みを帯びて、内側に明瞭に肥厚する。162は口縁部内外にヨコナデを施し、頸部外面には右下がりのハケ後ヨコナデを施す。胴部外面は頸部から続く右下がりのハケを施した後、左下がりのハケを施す。内面は頸部の屈曲部までヘラケズリを施し、胴部下半から底部には指圧痕が残る。

甕H類（第23図59、第28図223・224）山陰系の有段口縁甕を一括した。

甕H 1（第28図223・224）口縁部が直線的に外傾し、口縁部下端がやや突出する。口縁端部を面取りし、口縁部内外面にはヨコナデを施す。

甕H 2（第23図59）頸部で鋭く屈曲し、外反して開く口縁部下端に鋭い稜を持つもの。口縁部は突出部で傾斜を変え、斜め上方に直線的にのびる。口縁端部は面取りし、外側に肥厚する。口縁部内外面にはヨコナデを施す。胴部外面は胴部中程にタテハケを施し、次いで肩部に連続的なヨコハケを施す。その後、頸部から続くタテハケと胴部下半に左下がりを中心としたハケを施す。頸部外面はタテハケ後に丁寧なヨコナデを施す。内面は頸部の屈曲部以下にヘラケズリを施し、底部には指圧痕が残る。

甕I類（第22図19、第24図96）口縁部内外面に粗いハケを残し、口縁端部の作りが粗いもので、北近江の粗製「く」の字状口縁甕に類似する。19は頸部で屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。肩部外面には甕B 7類などと同様に断続的なヨコハケを施す。96は頸部内面に工具でナデを施して幅の狭い面を持ち、端部の先細る口縁部が直線的に外傾する。胴部上半外面はヘラケズリ、内面にはヨコハケを施す。

甕J類（第28図225）肩上部から頸部にかけて格子目文を施すもので、北信系と考えられる。内面にはナデを施し、口縁下部の外面は摩滅により調整は不明である。弥生時代後期～終末期に属する可能性もある。

壺（第21図、第22図25～29・43～45、第23図65・76・77、第24図113、第25図121・122・146～148、第26図166～173・188・189、第28図239～250）

壺は、A 1・A 2・B 1～B 4・C・D・E 1・E 2・F 1～F 3・G 1～G 3類がある。出土量は多い。

壺A（第26図188・189、第28図239・240）短い「く」の字状口縁を持つもので、口縁形態は甕D 3類とはほぼ同一形態である。

A 1類（第26図188、第28図239）口縁端部を面取りしないもので、口縁部内面はヘラミガキ、頸部以下にはヘラケズリ後ナデを施す。

A 2類（第26図189、第28図240）口縁端部を面取りするもので、口縁部内面にはヘラミガキ、頸部以下にはへ

ラケズリを施す。

壺B類（第22図43、第25図121、第26図169、第28図241・242）在地の有段口縁壺を一括した。

壺B 1（第28図242）口縁部が斜め上方に弱く外反し、口縁部下端がやや突出するもの。口縁部は内外面ともにヘラミガキを施し、外面を赤彩する。口縁部形態は甕B 1類に類似する。

壺B 2（第22図43、第28図241）口縁部が斜め上方に外傾し、口縁部下端が突出するもの。口縁端部は面取りし、口縁部は内外面にヘラミガキを施す。

壺B 3（第25図121）頸部はほぼ直立し、口縁部は大きく外反して開き、口縁部下端が突出する。口縁部は突出部で傾斜を変え、外反しながら立ち上がる。口縁部付近は1ヶ所に穿孔する。調整は頸部上半にヨコナデを施す以外、ヘラミガキを多用する。

壺B 4（第26図169）頸部が筒状を呈し、口縁部が直立ぎみに立ち上がるもので、器壁は壺類の中で極端に厚い。口縁部下端には、ヘラ状工具による刻みを施す。

壺C類（第25図148、第26図170、第28図243）外傾する口縁部を折り返し、口縁部を肥厚させる東日本系の壺を一括した。口縁部内外面にヘラミガキを施し、赤彩する。

壺D類（第28図249）広口壺を一括した。頸部が短く、口縁部は斜め上方に立ち上がり、中程から強く外反する。口縁部内外面にはヘラミガキ、頸部外面に短いタテハケを施す。

壺E類（第22図25・44、第23図76、第25図146・147、第26図166）二重口縁壺と推定されるものを一括した。

壺E 1（第22図25、第25図146・147、第26図166）口縁部が外反しながら斜め上方にのびるもの。口縁部はE 2類に比べて傾きが大きい。口縁部内外面にはヘラミガキを施す。146・147・166は内外面を赤彩する。

壺E 2（第22図44、第23図76）口縁部が弱く外反して斜め上方にのび、口縁端部を面取りするもの。口縁部内外面にはヘラミガキを施す。45は内外面を赤彩する。

壺F類（第22図26・28、第23図77、第25図122、第26図167・168・172、第28図244～248）長い口縁部を持つものを一括した。

壺F 1（第25図122）頸部で鋭く屈曲し、口縁部が内湾しながら斜め上方にのびる。内外面にはヘラミガキを多用し、赤彩を施す。

壺F 2（第22図26・28、第23図77、第26図167・168・172、第28図244・248）頸部で屈曲し、口縁部が直線的に斜め上方にのびるもので、口縁部内外面にはヘラミガキを多用する。167・172・245は内外面を赤彩する。248は胴部外面にヘラミガキ、内面にはヨコハケを施す。

壺F 3（第28図245～247）頸部で屈曲し、口縁部が外反しながら斜め上方にのびる。口縁部内外面にはヘラミガキを施す。246は口縁部外面にススが付着する。

壺G類（第22図27・29、第23図65、第24図113、第26図171）小型丸底壺と推定されるものを一括した。

壺G 1（第22図27、第23図65）口縁部が直線的に立ち上がるもの。27は口縁部内外面にヘラミガキを施す。65は口縁部外面にヨコハケ、口縁部内面にヨコナデを施した後不定方向のナデを施す。

壺G 2（第22図29、第26図171）口縁部が内湾気味に外傾するもの。29は口縁部外面にヘラミガキ、口縁部内面にはヨコナデを施す。171は口縁部内外面にヘラミガキを施す。

壺G 3（第24図113）頸部径が小さく、長い口縁部が直線的に外傾する。口縁部内外面は下部にハケを施し、上部にヨコナデを施す。胴部外面にはヨコハケを施す。

鉢（第21図、第22図30～33・46～48、第23図66・71、第25図149・150、第26図174・175、第28図251～256）

鉢は、A 1・A 2・B 1～B 5・C・D 1～D 6類がある。出土量は少ない。

鉢A類（第22図47、第25図150）有段口縁状の口縁部を持つものを一括した。

鉢A 1（第22図47）頸部で屈曲して斜め上方に開き、口縁部はやや外傾する。32は口縁部は先細りする形態で、口縁部下端はやや突出する。口縁部・胴部は内外面ともにヘラミガキを施し、赤彩する。

鉢A 2（第25図150）頸部で屈曲して斜め上方に開き、口縁部は外反しながら直立気味にのびる。口縁部下端は僅かながら突出する。口縁部・胴部は内外面にヘラミガキを施し、赤彩する。

鉢B類（第22図30・31・46、第23図66・71、第25図149、第28図251）体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が短く外傾するもの。

鉢B 1（第23図66）胴部・口縁部が内湾気味に開き、口縁部先端が緩く屈曲して外方に開くもの。胴部は比較的浅く、底部は平底を呈する。口縁部内外面にヨコナデを施し、胴部外面には幅広のヘラミガキを施す。

鉢B 2（第28図251）頸部で屈曲し、口縁部が直線的に外傾するもの。口縁部はやや先細りし、肩部は張らない。口縁部・胴部内外面にハケを施し、口縁部にはその後ヨコナデする。

鉢B 3（第25図149）胴部が内湾気味に外傾し、口縁部が下端から僅かに外に開くもの。口縁部下端には1条の沈線が巡る。口縁部外面はヨコナデ、内面にはヨコハケを施す。胴部外面はヘラケズリ、内面にはナデを施す。

鉢B 4（第22図30・31）胴部が内湾気味に外傾し、口縁部が外に開いて先端部をつまみ上げるもの。口縁部・胴部内外面にはヘラミガキを施す。

鉢B 5（第22図46）胴部が内湾気味に外傾し、口縁部先端を外に折り曲げるもの。口縁部・胴部内外面にはヘラミガキを施す。

鉢C類（第23図71）底部は丸みを帯び、腰部で屈曲して口縁部が内傾気味に立ち上がる台付きの鉢。器表面は内外面ともに全てヘラミガキを施す。外面は黒色処理している可能性が高い。本類型は管見の限り類例のない器形である。器形的には翠尾Ⅰ遺跡の月影Ⅱ式期の無頸加飾台付き壺に類似しており（河合1997）、その退化形態となる可能性を持つ。また、台の底面までヘラミガキを施していることから、垂下するかえりを持つ蓋の一類型となる可能性もある。

鉢D類（第22図32・33・48、第23図78・79、第26図174・175、第28図253～255）小型の鉢を一括した。

鉢D 1（第26図174）胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が直線的に開く小型の鉢。口縁部は先細りする形態で、頸部外面には沈線が巡る。口縁部・胴部内外面にはヘラミガキを施す。

鉢D 2（第28図254・255）小さな平底の底部から胴部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が内側にやや肥厚する小型の鉢。

鉢D 3（第22図32・48）口縁部が内湾気味に内傾する小型の鉢。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。

鉢D 4（第22図33）平底の底部から胴部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部を内傾気味におさめた小型の鉢。外面はヘラミガキ、内面にはナデを施す。

鉢D 5（第23図78、第26図175）丸底の底部から胴部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外側につまみだす小型の鉢。175は口縁部内外面と胴部内面にナデ、胴部から底部外面にかけてヘラケズリを施す。

鉢D 6（第23図79、第28図253）平底の底部から胴部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外側につまみだす小型の鉢。253は口縁部内外面にヨコナデ、胴部内外面にはハケを施す。

高杯（第21図、第22図34・55、第23図67、第24図115・117、第25図136～138・151、第26図181、第28図257～267）

高杯は、A・B・C・D・E・F・G類がある。出土量は少ない。

高杯A類（第26図181）口縁部が内湾気味に外傾し、中程から外反して開くもの。外面はヨコナデ、内面はヘラ

ミガキを施し、赤彩する。

高杯B類（第22図151、第28図257・258）浅い杯底部が内湾して立ち上がり、外反してのびる口縁部がつく有段の高杯。257は口縁端部を面取りし、内外面にヘラミガキを施す。258は内外面に赤彩を施すが、摩滅しており調整は不明である。

高杯C類（第22図34）杯底部が外傾して直線的にのび、口縁部下部で屈曲して直立気味に立ち上がった後に、斜め上方に外反してのびる有稜の高杯。口縁部下端の内面にはヨコハケを施し、その他の部位にはヨコナデを施す。

高杯D類（第25図136）杯底部が平坦で、口縁部は内湾気味に開く有稜の高杯。杯部内外面には赤彩を施す。

高杯E類（第28図259）底部の小さい椀形の杯部を持つもので、内外面にはヘラミガキを施す。

高杯F類（第24図115）杯底部で屈曲し、口縁部は直線的に外傾するもの。

高杯G類（第24図117）棒状の脚部が途中で屈曲し、外に開く畿内系の高杯。脚部は中空で、3ヶ所に穿孔する。棒状部には縦位のヘラミガキを施し、裾部には横位のヘラミガキを施す。

高杯H類（第22図55）脚部が「八」の字状に開くもので、脚部外面には縦位のヘラミガキ、内面にはハケの後ナデを施す。

高杯I類（第23図67、第25図137、第28図262・263）棒状で半中実の脚部のものを一括した。67・137は棒状部外面には縦位のヘラミガキ、内面にはナデを施す。

高杯J類（第25図138）棒状で中実の脚部のもの。外面にはヘラミガキ、内面には反時計回りにハケを施す。

器台（第21図、第22図51・52、第23図81・82、第24図119、第26図190）

器台は、A1・A2・B・C類がある。出土量は少ない

器台A類（第22図51、第23図81・82、第26図190）いわゆる小型器台を一括した。

器台A1（第22図51、第26図190）受部は内湾気味に開き、脚部は途中で屈曲して開くもの。51は口縁端部を丸くおさめ、口縁部内外面と脚部外面はヘラミガキを施し、脚部内面にはハケ後ナデを施す。190は口縁端部を面取りする。

器台A2（第23図81・82）受部が内湾して、斜め上方にのびるもの。内外面にはヨコナデを施す。

器台B類（第22図52）受部が内湾して立ち上がり、椀状を呈するもの。内外面にはヨコナデを施す。

器台C類（第24図119）受部が肥厚しながら開き、端部に擬凹線文を施すもの。外面はヨコナデ、内面はヘラミガキを施す。

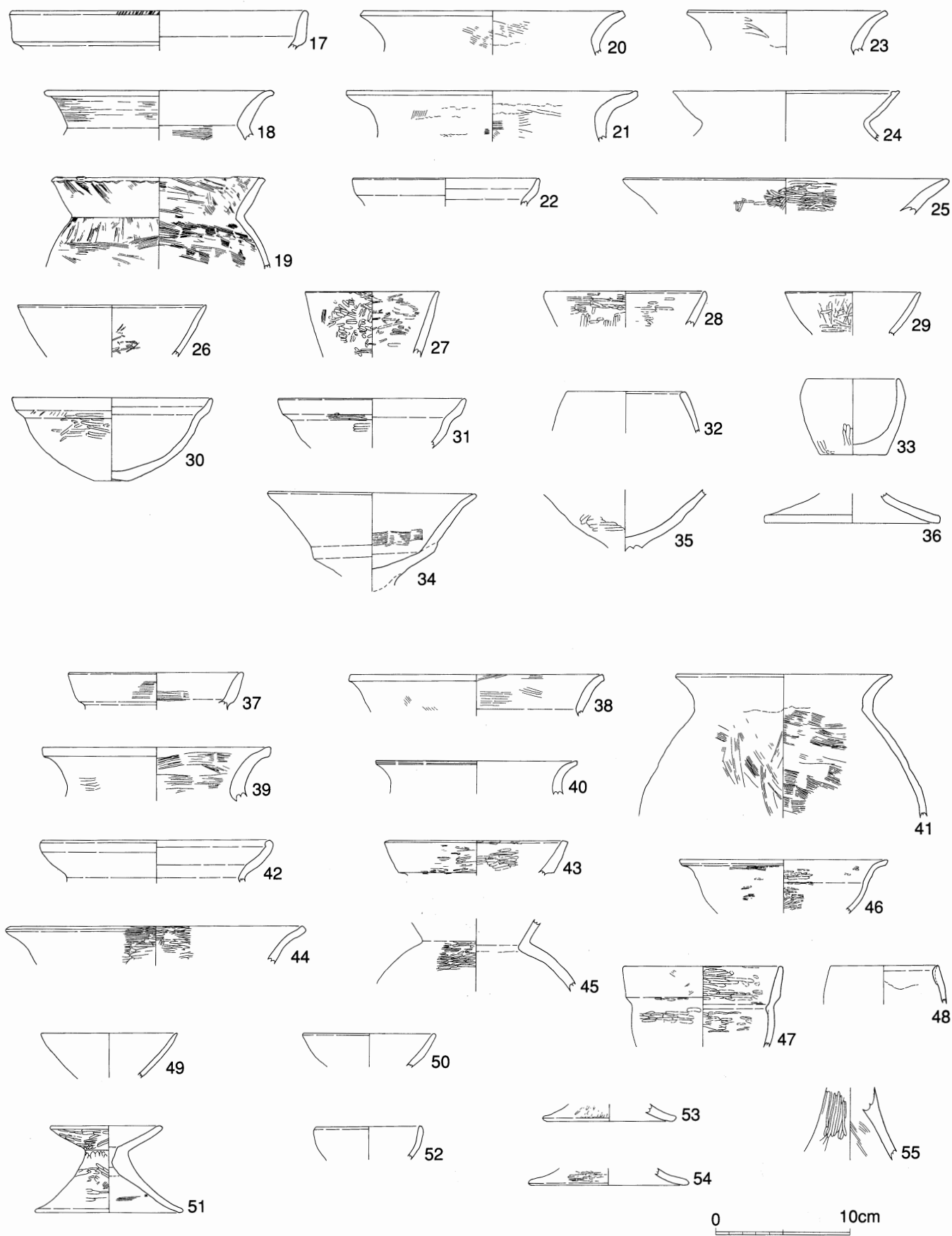
蓋（第21図・第25図140・152、第28図271～273）

蓋は、A・B・C類がある。出土量は少ない。

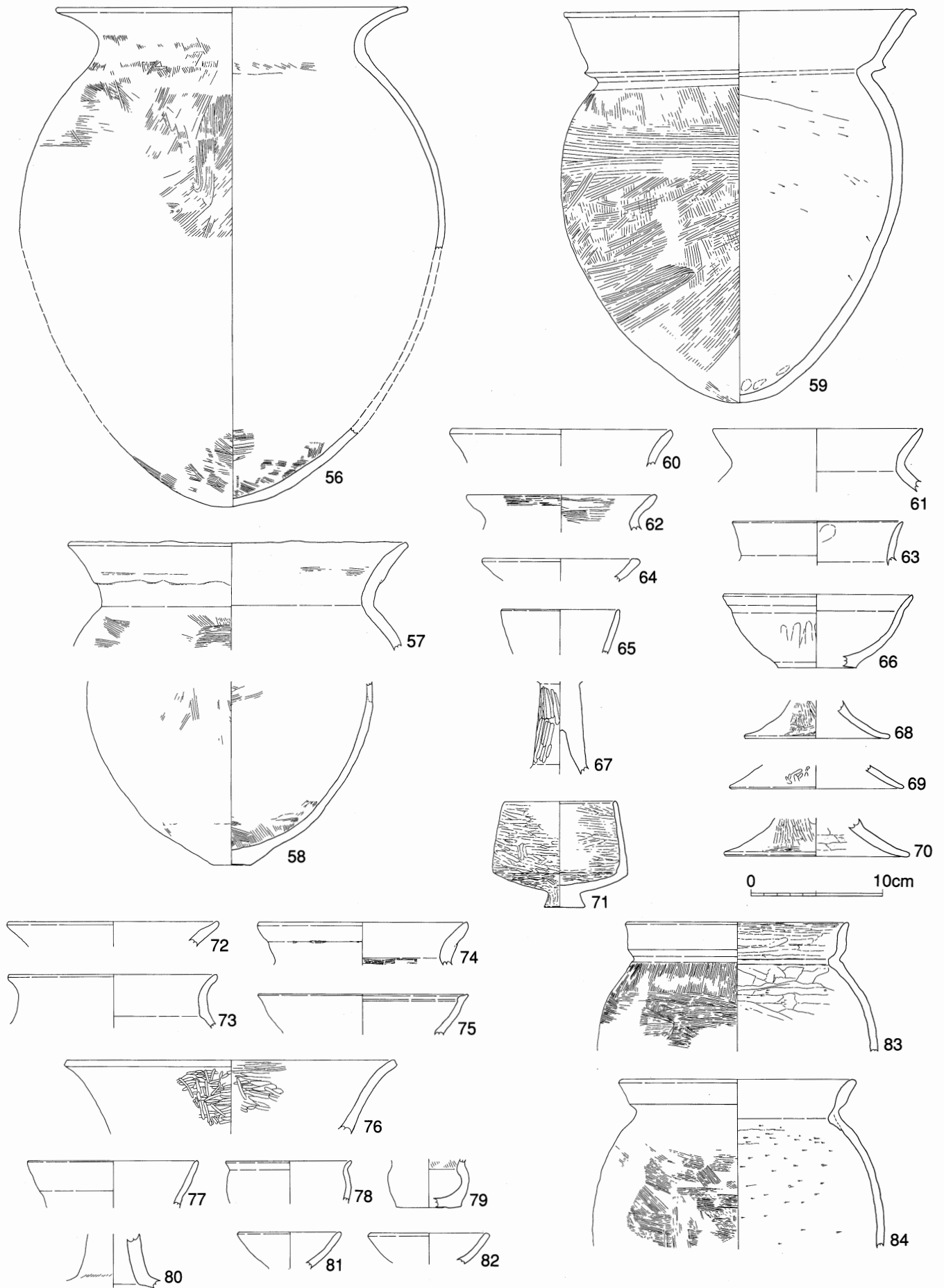
蓋A類（第25図152、第28図273）紐頂部が凹み、胴部が笠状に開くもの。口縁部・胴部は内外面ともヘラミガキを施す。274は外面を赤彩する。

蓋B類（第25図140）紐頂部が平坦で、胴部が笠状に開くもの。外面にはヘラミガキを施し、赤彩する。

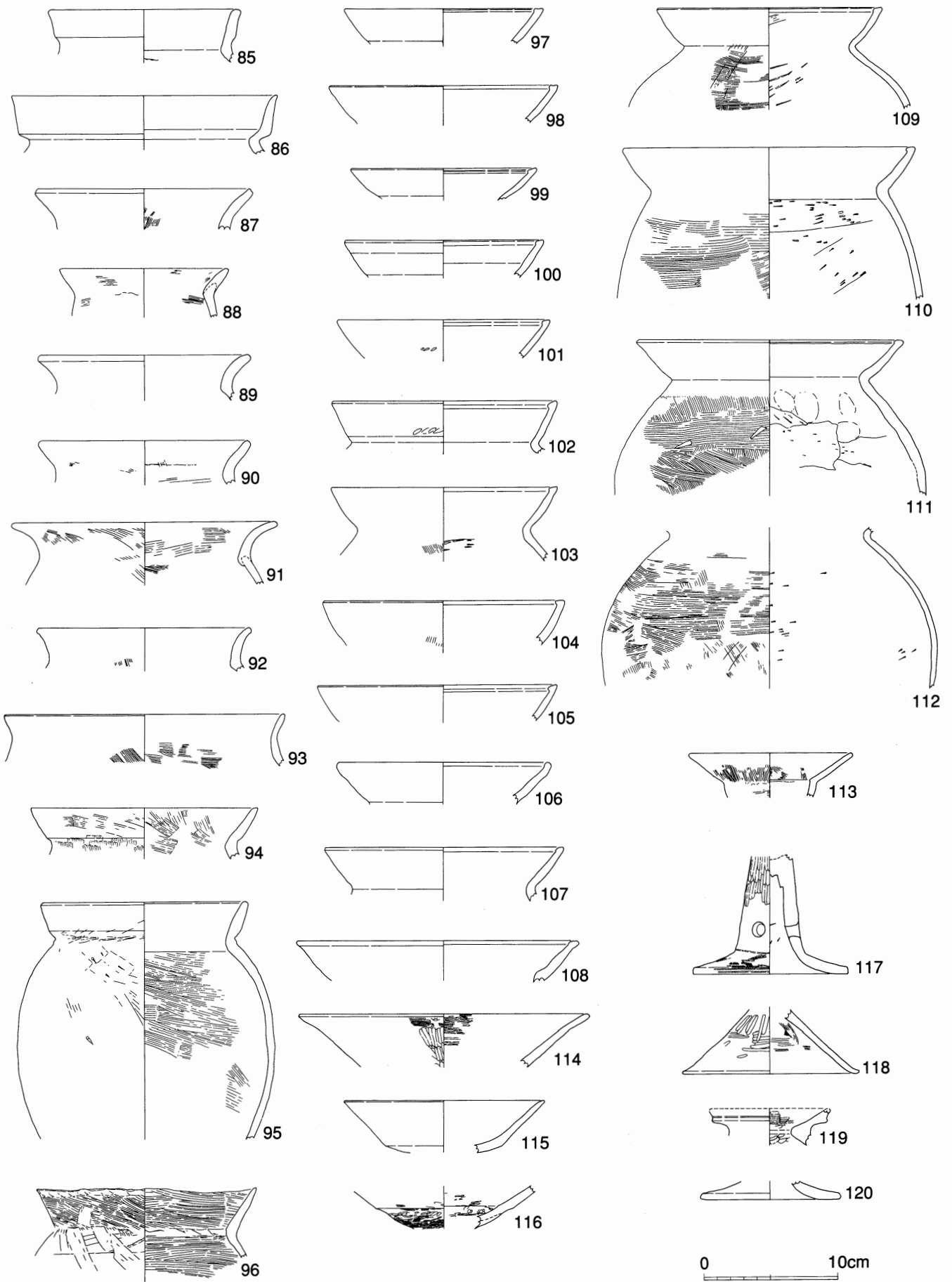
蓋C類（第28図271・272）中央部が凹む大きな紐部を持つもの。273は紐頂部を含めて、内外面全てにヘラミガキを施す。



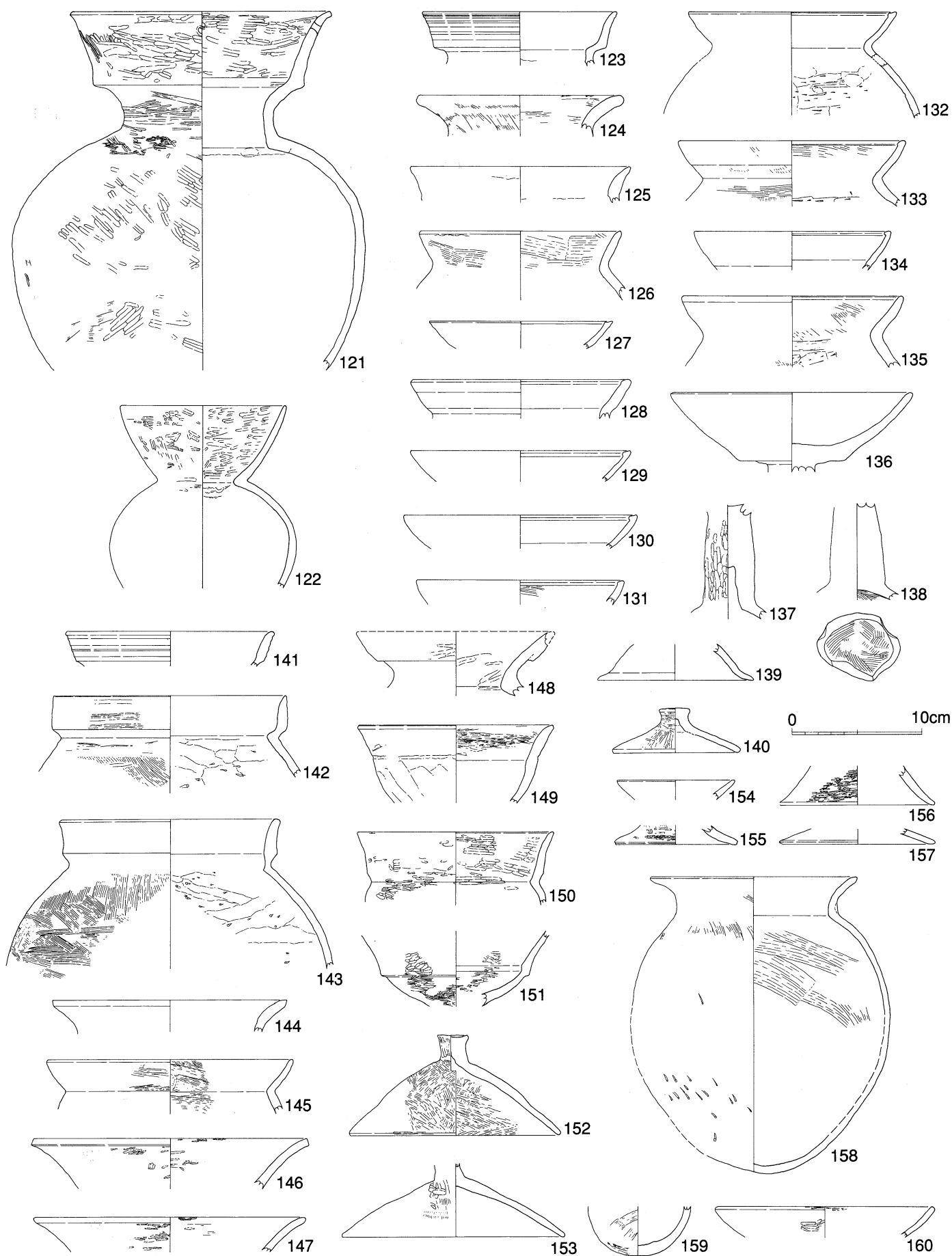
第22図 遺物実測図 17~36. 住居-01 37~55. 住居-02 (S=1/4) 10cm 17~55



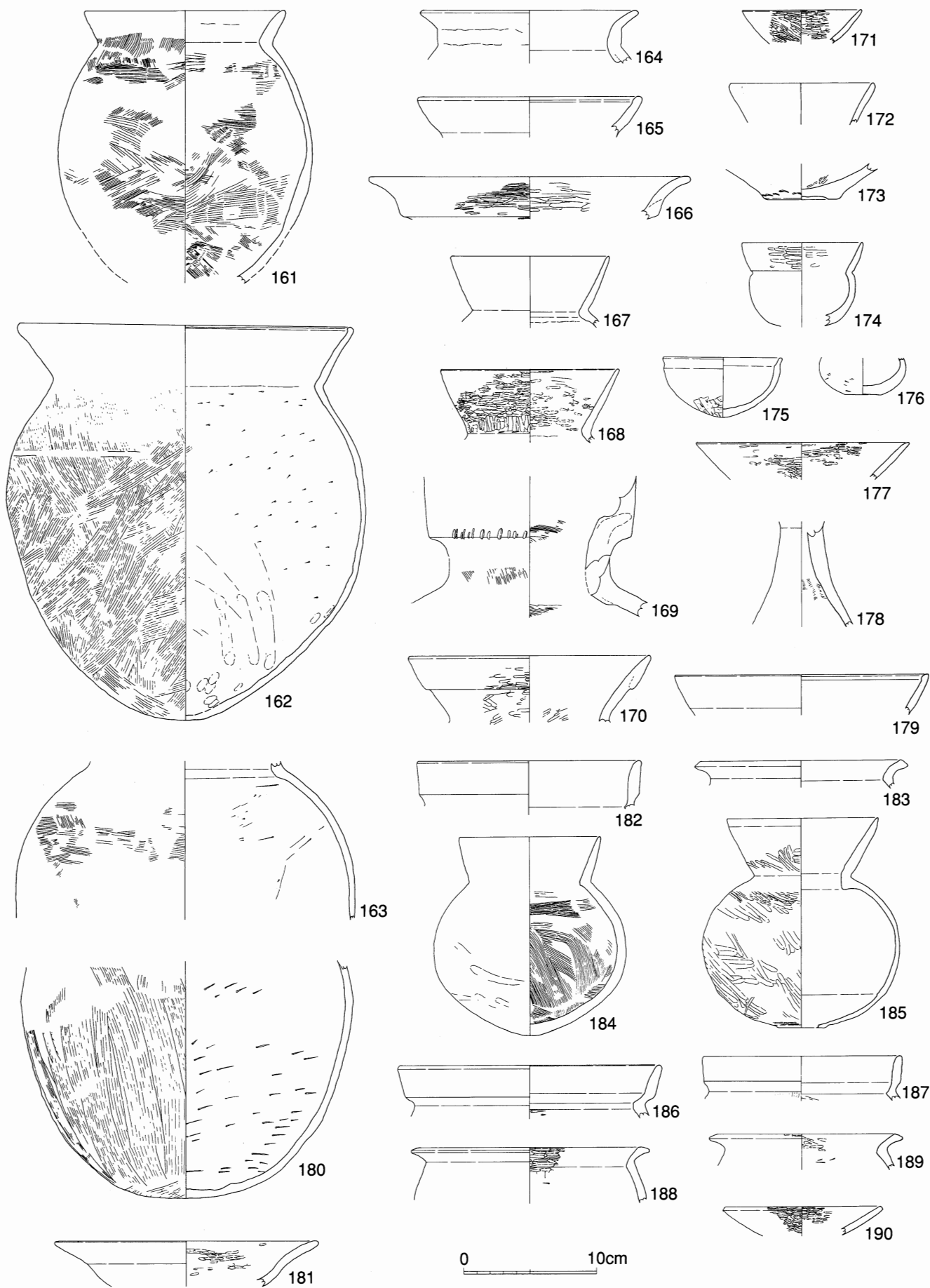
第23図 遺物実測図 56~71. 住居-03 72~82. 住居-05 83・84. 住居-06 (S=1/4)



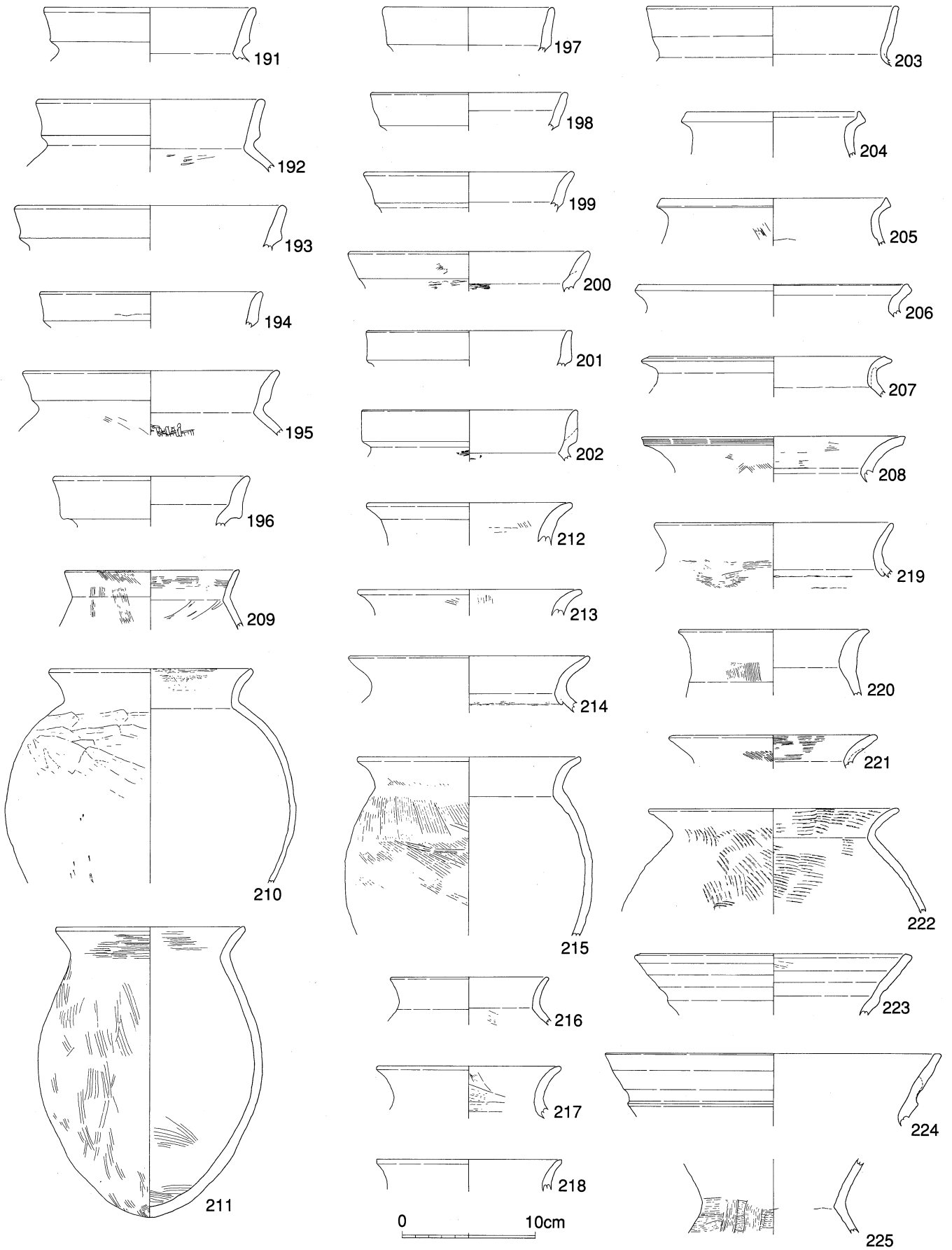
第24図 遺物実測図 住居-07 (S=1/4)



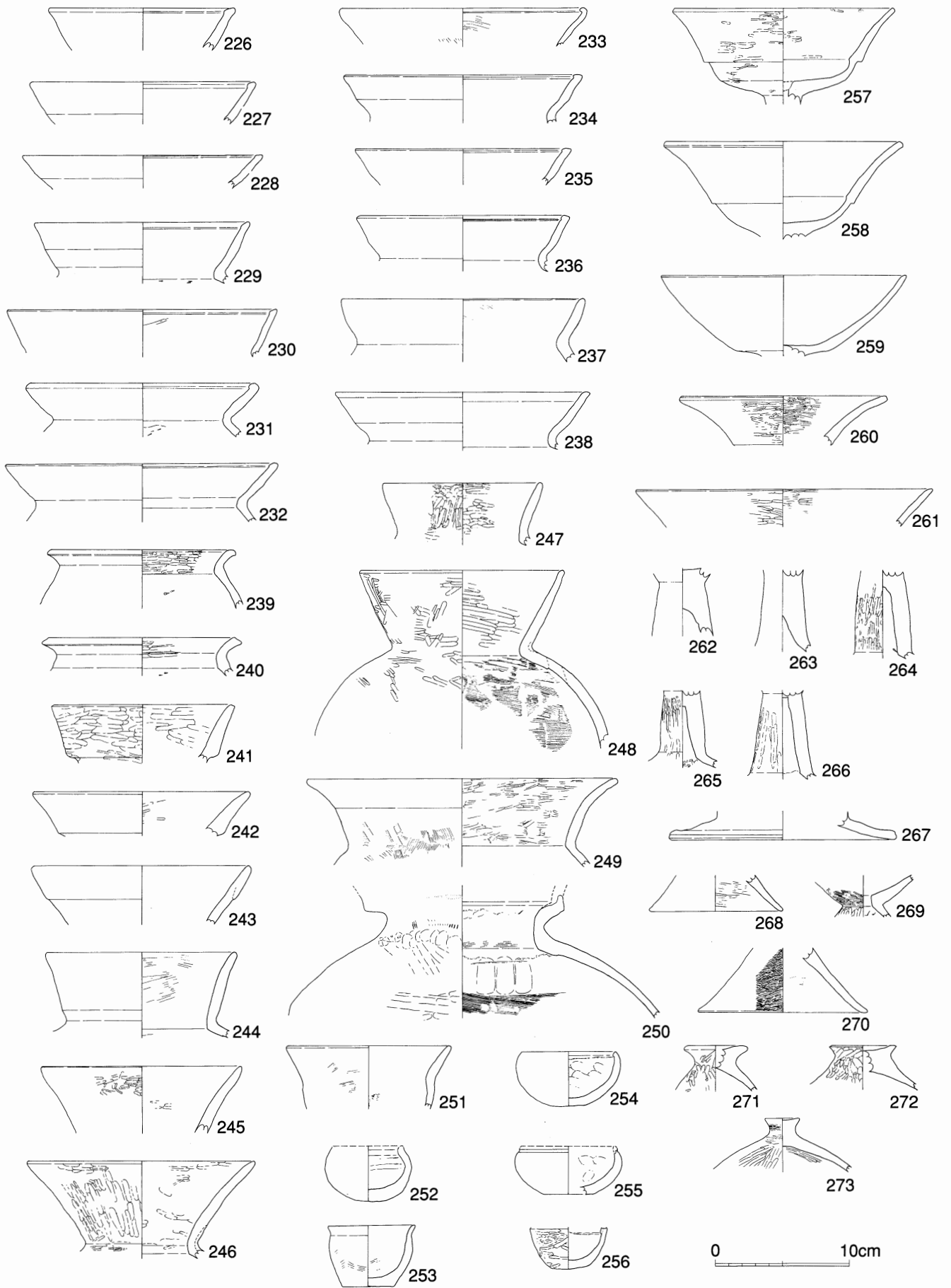
第25图 遺物実測図 121・122.住居-07 158~160.土坑-04 141~157.溝-26 123~140.土器集中区 (S=1/4)



第26图 遺物実測図 180・181. 炉-01 161~178. 土坑-03 182~185. 溝-27 186~190. 畝状遺構 179. 穴-100 (S=1/4)



第27図 遺物実測図 包含層 (S=1/4)



第28図 遺物実測図 包含層 (S=1/4)

(3) 古墳時代中期～後期の遺物

古墳時代中期～後期の遺物には須恵器・土師器・置竈があり、住居-09・10、建物-21、穴-87などの遺構に伴って出土したものと、遺物包含層から出土したものがある。遺物包含層の遺物は中央東調査区の東側から東調査区のW地区を中心に出土しており、特にY=24・25区からの出土が多い。

A 須恵器 (第29図274～284) 須恵器は、杯G蓋・杯H蓋・杯H・提瓶・甕がある。

杯G蓋 (第29図278) 278は遺物包含層から出土した。口縁部内外面にはロクロナデを施し、口径は18cmを測る。7世紀前半に属すると考えられる。

杯H蓋 (第29図274～277) 278は穴-87から、その他は遺物包含層から出土した。274は、天井部の頂部が平らで、口縁部は外反して開く。頂部はヘラ切り未調整で、口縁部内外面と天井部内面にはロクロナデを施す。口径は11.7cm、器高は3.0cmを測る。275は天井部が丸みを持ち、口縁部は外反して開く。頂部はヘラ切り後にナデを施す。口縁部内外面と天井部内面にはロクロナデを施す。口径は11.8cm、器高は3.4cmを測る。276は天井部が丸みを持ち、口縁部は天井部からなだらかに外傾する。頂部はヘラ切り後に不定方向のナデを施す。口縁部内外面にはロクロナデ、頂部内面にはヨコナデを施す。口径は12.2cm、器高は3.8cmを測る。277は、天井部が丸みを持ち、肩の段を経て緩やかに口縁部へ至る。頂部外面にはヘラケズリ、口縁部内外面と天井部内面にはロクロナデを施す。天井部内面はその後不定方向のナデを行う。口径は14.5cmを測る。

いずれも6世紀後半から7世紀前半のものと考えられる。

杯H (第29図279～282) 281は住居-09、279は建物-21から、その他は遺物包含層から出土した。279は底部が平底気味で、立ち上がりは内傾して、端部を丸くおさめる。口径は11.8cm、器高は3.5cmを測る。280は底部が平らで、立ち上がりは内傾して端部を丸くおさめる。口径は10.8cm、器高は3.6cmを測る。281は底部が丸みを持ち、立ち上がりは内傾して、端部を丸くおさめる。口径は11.6cm、器高は4.1cmを測る。282は体部が張り、立ち上がりは内傾してやや長くのび、端部に1条の沈線を巡らせる。口径は12.4cmを測る。

282は5世紀末、279～281は6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。

提瓶 (第29図283) 283は遺物包含層から出土した。口頸部は内湾気味にほぼ直立し、口縁端部を面取りして、内側に肥厚する。7世紀前半に属すると考えられる。

甕 (第29図284) 中央西調査区の溝-26から出土した。体部下半は回転ヘラケズリ、上半にはロクロナデを施す。円孔の有無が不明なため、長頸壺となる可能性もある。6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。

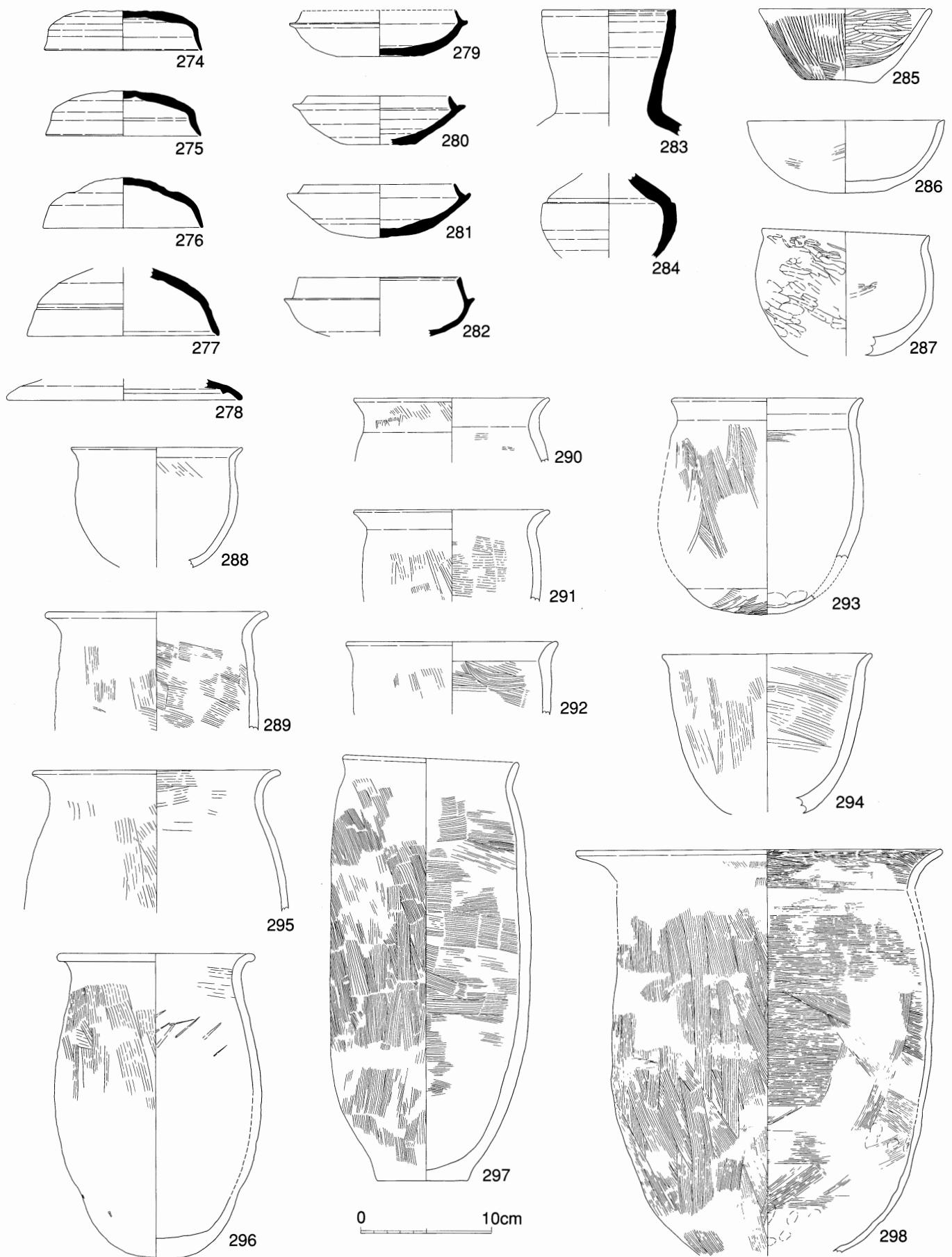
B 土師器 (第29図285～298、第30図299～303) 土師器は、椀・壺・甕・甑・鍋・製塩土器がある。

椀 (第29図285・286) 285は住居-10の周溝、286は遺物包含層から出土した。285は、底部が平底気味で、口縁部は内湾気味に外傾する。口径は13.2cm、器高は5.6cmを測る。286は底部が丸みを持ち、体部・口縁部は強く内湾して立ち上がる。口径は15.0cm、器高は5.5cmを測る。いずれも調整は外面にタテハケ、内面にヘラミガキを施す。

285・286はともに6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。

壺 (第29図287) 東調査区のX 6 Y 28区から出土した。胴部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外側につまみだす短頸の壺。底部は平底を呈すると推定される。口縁端部をヨコナデする以外は、すべてヘラミガキを施す。6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。

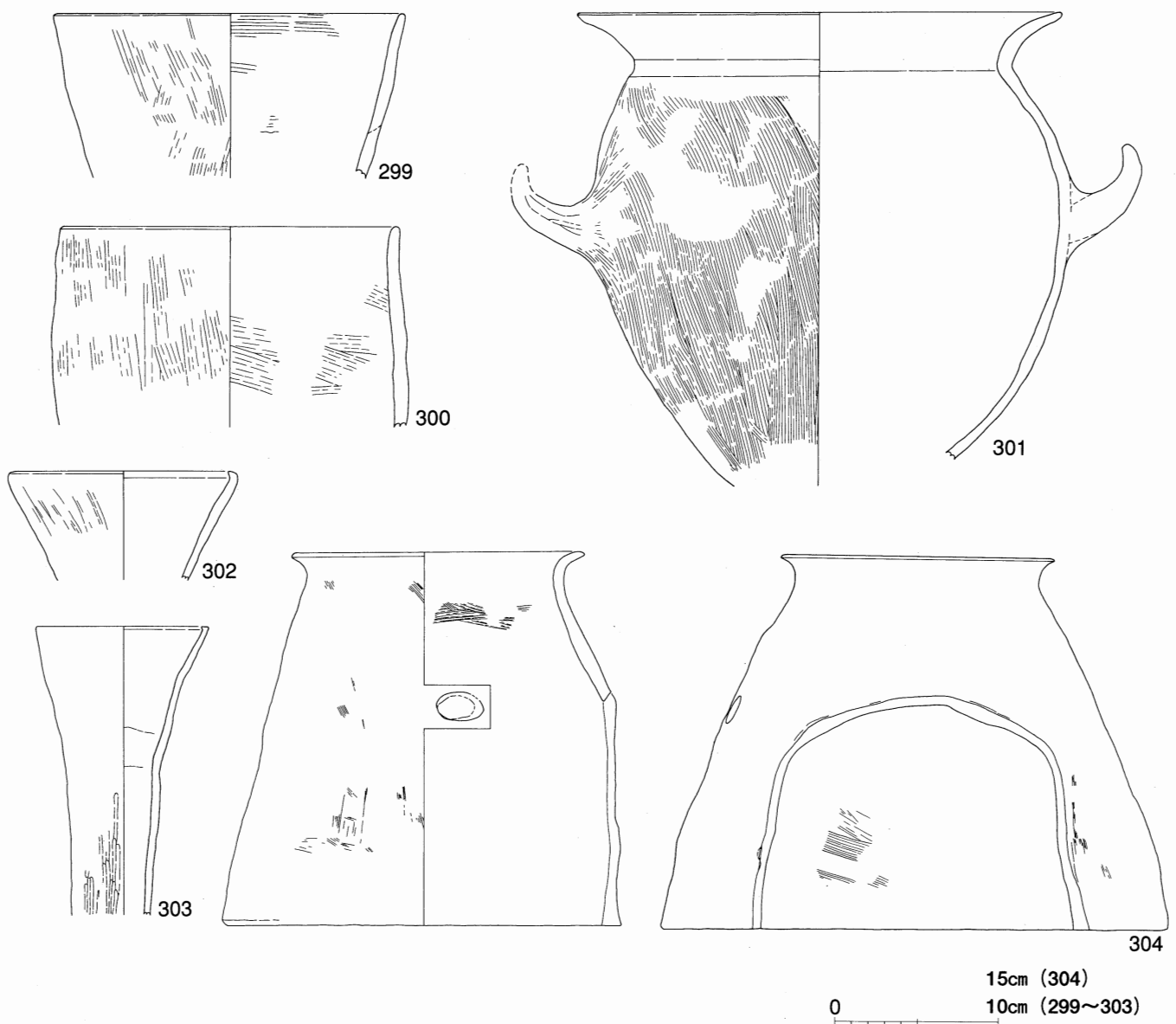
甕 (第29図288～298) 292・298は住居-04、290・291・295は住居-09、288・294は住居-10、296は住居-10の周溝、293は土坑-07から、その他は遺物包含層から出土した。288～294は胴の張りが弱く、口縁部を外側につまみ出す小型の甕。調整は胴部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施し、口縁部内外にヨコナデを施すものが多い。口径は14.0～16.8cmを測る。295・296は胴の張りが弱く、短い口縁部が外反して開く長胴の甕。296は胴部上半外面



第29図 遺物実測図 292・298.住居-04 281・290・291・295.住居-09 288・294.住居-10 285・296.住居-10周溝
 279.建物-21 293.土坑-07 284.溝-26 278.穴-87 その他.包含層 (S=1/4)

にタテハケ、胴部下半外面と胴部内面にヘラケズリを施す。口径は15.0cm、器高は23.3cmを測る。297は短い口縁部が僅かに外傾し、張りのない胴部が付く長胴の甕。底部は平底である。胴部外面はタテハケ、胴部内面にはヨコハケを施し、口縁部内外面はヨコナデを行う。口径は13.4cm、器高は32.0cmを測る。一般的な長胴甕と比べて、口径に対する器高の比率が大きい。298は、口縁部が「く」の字状に外半し、胴部径を上回る。胴部最大径は上位にあり、砲弾型をなして底部にのびる。調整は内外面全体にハケの後、口縁部外面に強いヨコナデを施す。口径は27.8cmを測る。

いずれも6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。



第30図 遺物実測図 301.住居-08 302. 炉-01 300. 土坑-06 299・303. 畝状遺構②群
304. 包含層 (S=1/4、304のみ1/6)

甌（第30図299・300）300は土坑-06から、299は畝状遺構②群から出土した。299はバケツ形を呈し、口縁部は僅かに外反する。内外面にはハケを施し、口径は23.4cmを測る。300は直立気味の口縁部から直線的に胴部に至る。内外面にはハケを施し、口径は20.8cmを測る。

いずれも6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。

鍋（第30図301）301は住居-08から出土した。胴部が強く張り、口縁部が大きく外反するもので、牛角状の把手が付く。口縁部内外面にはヨコハケの後ヨコナデを施す。胴部は外面にタテハケ、内面にヘラケズリの後ナデを施す。口径は29.8cmを測る。外面にはススが付着し、内面の底部付近には炭化物が付着している。形態は小矢部市桜町遺跡産田地区出土の鍋に類似している。6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。

製塩土器（第30図302・303）302は炉1から、303は畝状遺構②群から出土した。302は外面にハケの後ナデ、内面にナデを施す。口径は13.0cmを測る。303は下半部外面に縦位のヘラミガキ、内面にナデを施す。口径は10.4cmを測る。

いずれも6世紀後半から7世紀前半に属すると考えられる。

置竈（第30図304）東調査区のX5Y23区から出土した。口径は24.0～26.5cm、器高は34.3cmを測る。両側面には高さ2cm弱、幅3cm弱の穴があり、把手が付いていた可能性がある。使用痕の観察からは、日常的な使用ではなく、祭祀に用いられたものと推定される。

（4） 奈良時代～平安時代の遺物

奈良時代から平安時代の遺物には須恵器・土師器があり、建物-01・03、溝-07などに伴って出土したものと、遺物包含層から出土したのものがある。遺物包含層の遺物は西調査区東側から中央東調査区西側で出土しており、特にY4・7区からの出土量が多い。

A 須恵器（第31図305～346） 須恵器は、杯B蓋・杯B・杯A・壺がある。

杯B蓋（第31図305～318）308・309は建物-01、307・311・316は溝-07、305は溝-26から、その他は遺物包含層から出土した。頂部切り離し技法・調整技法により3群に分類できる。

I群（第31図305～308）つまみが付き、頂部はヘラ切り技法によって切り離す。頂部から肩部にかけてはロクロケズリ、口縁部から頂部内面にはロクロナデを施すもの。全形を知り得るものは305のみで、他はつまみが付くものと想定してこの群に入れた。形態は、頂部が丸みを持って緩やかに縁端部に至るもの（305）と肩が張って斜め下方にのびるもの（306・307）とがある。また、縁端部の形態は、折り曲げるもの（305）、三角形を呈するもの（306・307）丸くおさめるもの（308）がある。305は内面に「く」の字状の墨書が残る。口径は11.8cm～13.7cmのものがある。

305は8世紀中頃～後半、306は8世紀後半、307・308は9世紀前半のものと考えられる。

II群（第31図309）つまみが付くと想定され、頂部はヘラ切り技法によって切り離し、全面にロクロナデを施すもの。口径は12.8cmを測り、縁端部は丸くおさめる。9世紀前半のものと考えられる。

III群（第31図310～318）つまみが付き、頂部は糸切り技法によって切り離すもの。肩部にはロクロケズリ、口縁部から頂部内面にはロクロナデを施す。全形を知り得るものは311・313のみで、他はつまみが付くものと想定してこの群に入れた。頂部は平坦になるもの（310～317）と緩やかに傾斜するもの（318）がある。頂部外面は糸切りの後、基本的にナデを施しているが、316だけは糸切り後未調整である。口径は11.2～12.5cmのものと16.0cmの2種がある。

いずれも9世紀中頃のものと考えられる。

杯 (第31図319~339)

第31図319~324は杯Bである。324は畝状遺構④群から、その他は遺物包含層から出土した。形態は口縁部がやや外傾するもの(319)と外傾するもの(320~324)に分類できる。口縁部は内外面ともにロクロナデを施す。底部内面は中心部までロクロナデを施すもの(319・321・323)と仕上げナデを施すもの(322)がある。底部外面は、322がヘラ切り未調整、その他はヘラ切りの後ナデを施す。高台は全て貼り付けで、高台端面の傾斜は、内傾するもの(321・324)と水平なもの(319・320・322・323)がある。口径は11.5~12.0cmと14.0cmの2種に分類できる。

321は8世紀後半、319は8世紀末~9世紀初頭、320・322~324は9世紀前半~中頃の遺物と考えられる。

第31図325~337は杯Aである。333は建物-01、325・331・334は溝-07、327は畝状遺構④群から、その他は遺物包含層から出土した。形態は口縁部がやや外傾するもの(325)、口縁部が外傾するもの(326~333)、口縁部が外に開き、器高の低いもの(334~336)、腰に段を持つもの(337)に分類できる。いずれも口縁部の内外面と底部内面にはロクロナデを施す。底部外面は329がヘラ切り後未調整、337が糸切り後未調整、その他はヘラ切り後にナデを施す。327は底部外面に「-」状のヘラ記号を残す。口径は11.0~13.0cmのものがある。

325は8世紀中頃、326・327は8世紀後半、328・329は8世紀末~9世紀初頭、330は9世紀前半、331~337は9世紀中頃~後半の遺物と考えられる。

第31図338~342は杯の口縁部破片で、339は畝状遺構③群から、その他は遺物包含層から出土した。形態は、口縁部が外傾するもの(338)とやや外傾するもの(339~342)に分類できる。いずれも口縁部の内外面にロクロナデを施す。口径は11.2~12.0cmと14.8cmの2種がある。

339は8世紀中頃、340~342は8世紀末~9世紀初頭、338は9世紀中頃の遺物と考えられる。

盤 (第31図343) 343は建物-03から出土した盤の口縁部破片で、内外面にロクロナデを施す。口縁端部を面取りし、口径は19.8cmを測る。時期は口縁端部の形態から、8世紀中頃と考えられる。

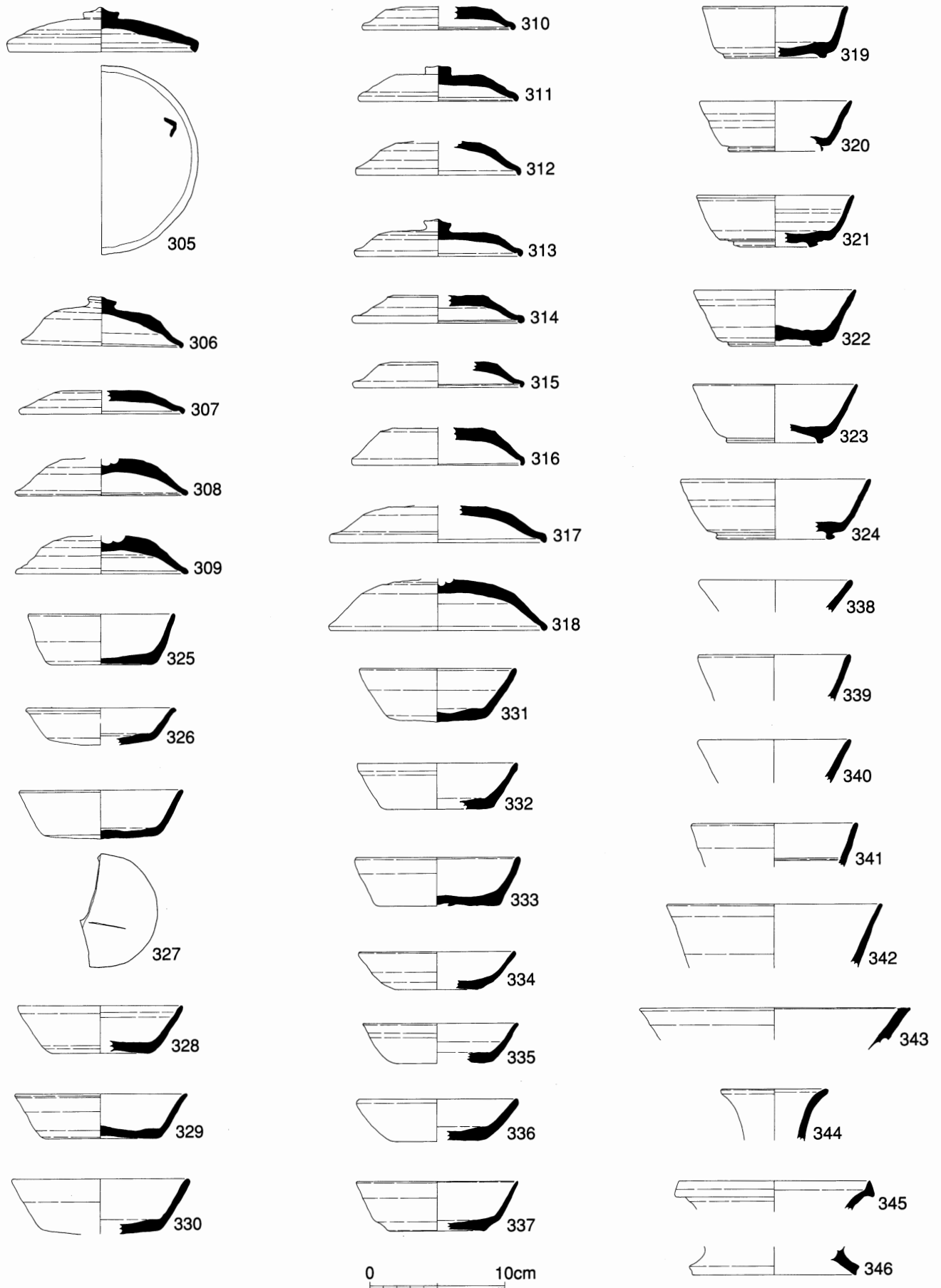
壺 (第31図344~346) 344~346はいずれも遺物包含層から出土した。344は長頸壺の口縁部破片で、口縁端部付近で外傾度が増し、端部を丸くおさめる。内外面にはロクロナデを施し、口径は7.6cmを測る。345は口縁部が外反して外に開き、口縁端部は面取りして肥厚する。内外面にはロクロナデを施し、口径は14.0cmを測る。346は壺の高台と考えられ、高台端面の傾斜は内傾している。内外面にはロクロナデを施し、高台径は12.0cmを測る。

346は8世紀末~9世紀初頭、345は9世紀代、344は9世紀後半の遺物と考えられる。

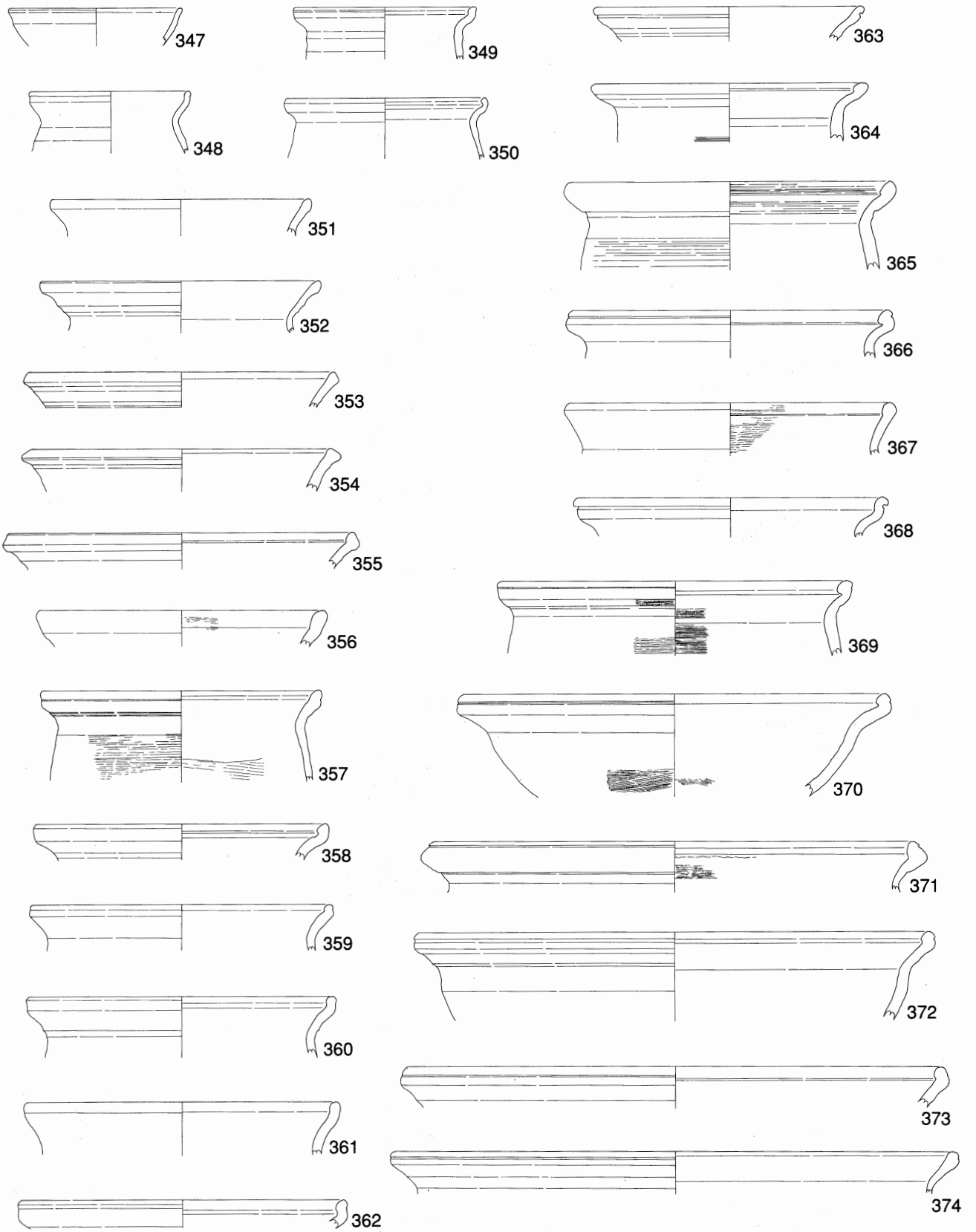
B 土師器 (第32図347~374) 土師器は、椀・甕・鍋がある

椀 (第32図347) 347は建物-01から出土した椀の口縁部破片で、口径は12.2cmを測る。内外面にロクロナデを施す。9世紀中頃~後半の遺物と考えられる。

甕 (第32図348~369) 357・367は溝-07から、その他は遺物包含層から出土した。口径11.2~14.0cmの小型品(348~350)と口径18.2~24.4cmの大型品(351~369)がある。口縁部形態は多様で、6種9類に分類できる。A1類(351・352)口縁部が外傾し、端部を丸くおさめるもの。A2類(363)口縁部が外傾し、端部を丸くおさめ、外面に沈線を引くもの。B類(353~355)口縁部が外傾し、端部を肥厚させ、面取りするもの。C1類(349・358・360~362)口縁端部付近で折れ、ほぼ直立し、外面に沈線を引かないもの。C2類(348・357・359・368)口縁端部付近で折れ、ほぼ直立し、外面に沈線を引くもの。D類(350)口縁端部を内面に巻き込み、端部先端と内面に隙間を持つもの。E類(366・369)口縁端部近くで内屈させ、端部は肥厚する。外面には沈線を引き、内面に段が付くもの。F1類(356・364)口縁端部内面を肥厚気味に仕上げたもの。F2類(365・367)口縁端部を内側に巻き込み肥厚させ、内面には巻き込みによる段が付くもの。364・365は胴部上半外面にカキメを施し、365は口縁部内面にもカキメを施す。357は胴部上半内外面にヨコハケを施し、367は口縁部内面にヨコハケを施す。



第31図 遺物実測図 308・309・333.建物-01 343.建物-03 307・311・316・325・331・334.溝-07 305.溝-26
 324・327. 畝状遺構④群 339. 畝状遺構③群 その他. 包含層 (S=1/4)



0 10cm

第32図 遺物実測図 347.建物-01 357・367・372・373.溝-07 その他.包含層 (S=1/4)

351～355は8世紀後半～9世紀初頭、348・357・360・362・363は9世紀前半、349・350・356・358・359・361・364～368は9世紀中頃～10世紀初頭と推定される。

鍋（第32図370～374）372・373は溝-07から、その他は遺物包含層から出土した。口縁部形態は多様で、4種に分類できる。甕の形態分類を用いると、370・373はE類、372はC2類、374はA2類に属する。371は口縁部近くで内屈し、外面に沈線を引く。端部は肥厚せず、内面に段がない。370は胴部内外面にハケメを施す。口径は30.0～39.8cmを測る。

370・371・373は9世紀代、372・374は10世紀前半と推定される。

（5）中・近世の遺物

中・近世の遺物には土師器皿・瀬戸美濃・珠洲・越中瀬戸があり、大半が遺物包含層から出土した。遺物は西調査区を中心に出土しているが、出土量は少ない。

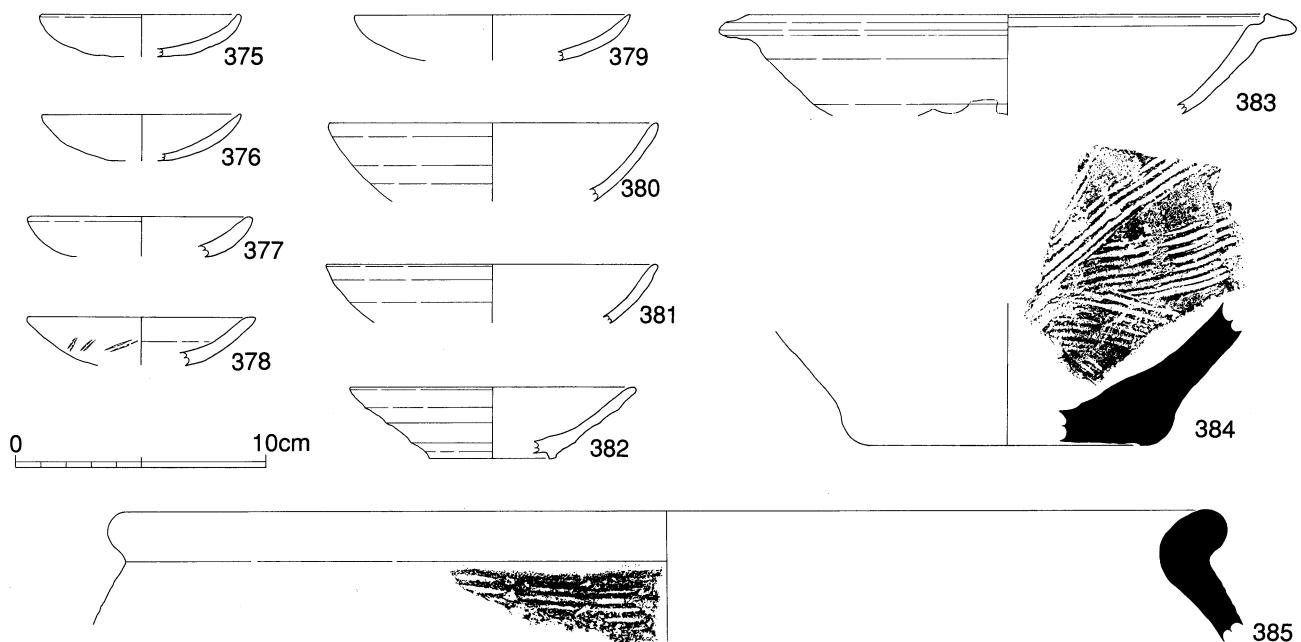
土師器皿（第33図375～381）小型で器高の低い非ロクロ成形のもの（375～379）とやや大型で深身のロクロ成形のもの（380・381）がある。非ロクロ成形のものは、口径7.8～11.0cmを測る。378は外面にハケ状工具の端を放射状に当てた痕が残る。ロクロ成形のものは、口径13.0～13.2cmを測る。

いずれも、12世紀後葉～13世紀前葉に属すると考えられる。

珠洲（第33図384・385）384は播鉢の底部破片で、底径は11.0cmを測る。卸し目は2.5cmの原体に8条である。珠洲VI期に属し、15世紀中葉のものと考えられる。385は甕の口縁部破片で、外面に平行叩き痕、内面に当て具痕が残る。外面の3cm当たりの平行叩き条数は8条で、IV期に属し、14世紀後葉のものと考えられる。

瀬戸美濃（第33図383）383は体部がほぼ直線的に外傾し、水平方向に外折する口縁部の上面中央に小突起が形成される折縁深皿である。口径は20.8cmを測る。内外面に灰釉を施すが、外面には2次被熱痕を残す。古瀬戸後Ⅲ期に属し、15世紀前葉のものと考えられる。

越中瀬戸（第33図382）382は口縁部が直線的に外傾し、削り出し高台を持つ丸皿で、灰釉を施す。内ハゲであり、外底面も無釉である。口径は11.4cm、器高は2.8cmを測る。



第33図 遺物実測図 包含層 (S=1/3)

第4章 調査成果

本年度の調査で得られた新知見は以下の通りである。

1. 遺跡は、古墳時代前期・後期、古代及び中世の集落跡と考えられる。
2. 検出した主な遺構は、竪穴住居跡10棟、掘立柱建物39棟、炉跡3ヶ所、土坑26基、溝7条、畝状遺構235条、穴1081個である。
3. 竪穴住居の時期は、出土した遺物や遺構の切り合いなどから、
 - 第1段階：住居-01・02・03・05・06・・・3世紀末（漆町遺跡8群併行期）
 - 第2段階：住居-07・・・4世紀前半（漆町遺跡9群併行期）
 - 第3段階：住居-08・09・10・・・6世紀末から7世紀初頭（飛鳥I期）
 の3段階に分かれるものと考えられる。
 なお、住居-04は、出土遺物が少なく正確な時期は不明である。
4. 掘立柱建物の時期は、遺物の出土量が少なく時期が明確なものは少ない。時期の確定しているものとしては、
 - 第1段階：建物-21・・・7世紀前半
 - 第2段階：建物-01～06・・・8世紀中頃から9世紀代
 の2段階が明らかとなっている。
5. 縄文時代の遺物は、調査区全体から出土しているが、全て遺物包含層からの出土である。出土遺物は、後期末葉の八日市新保式と晩期末葉の大洞A式からA'式併行期に属するものが大半を占め、中期以前にさかのぼる資料は出土していない。縄文時代後期後葉～晩期後葉の遺物は、利田横枕遺跡に近接する五郎丸遺跡や横沢II遺跡からも出土しており、周辺に集落の存在が想定されるが、未だ遺構の検出例がなく、今後の調査の進展を待ちたい。
6. 古墳時代前期の遺物は、中央西調査区と中央東調査区の西側の遺構及び遺物包含層から出土したものが大部分である。竪穴住居から出土した土器は小破片のものも多かったが、住居-01～03・06・07や土坑-03では、完形に近いものや大型破片が床面直上から出土している。特に焼失家屋と考えられる住居-03では、床に据え付けられたまま潰れた状態の土器が、住居の西壁沿いと北東隅付近でまとまって出土している。また、多数の遺構から「布留甕」が出土しており、加賀や能登、そして畿内との併行関係を考えていく上で貴重な資料を得ることができた。
 そこで簡略ではあるが、布留甕・布留傾向甕に着目して、遺物出土量の多い住居-01・02・03・05・07、土坑-03の位置づけを行いたい。各遺構の器種構成は、以下の通りである。

表1 住居・土坑出土土器の器種構成

時期	遺構名	甕																									
		B5	B6	B10	C1	C2	C3	C4	E1	E2	E3	E4	E6	E7	E8	E9	E10	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G11	H2	I
漆町8群	住居-01		○	○					○			○		○				○									○
	住居-02			○						○			○			○	○						○				
	住居-03			○		○				○			○		○	○							○				○
	住居-05										○		○	○					○								
	土坑-03										○					○							○		○		
漆町9群	住居-07	○			○		○	○	○		○		○			○	○		○	◎	○	○	○			○	

時期	遺構名	壺					鉢				高杯					器台			
		B	C	E	F	G	A	B	C	D	C	F	G	H	I	A	B	C	
漆町8群	住居-01			○	○	○		○		○	○								
	住居-02	○		○			○	○		○				○		○	○		
	住居-03					○		○	○						○				
	住居-05			○			○			○						○			
	土坑-03	○	○	○	○	○				○									
漆町9群	住居-07	○			○	○								○	○	○			○

甕B類 有段口縁
 甕C類 B類とE・G類の折衷形態
 甕E類 在地の「く」の字口縁甕
 甕G1～2類 端部の肥厚が僅かなもの
 甕G3～5類 端部の肥厚が顕著なもの
 甕G6類 端部が丸みを帯びているもの
 甕G7・11類 布留傾向甕など
 甕H類 山陰系の甕
 壺B類 有段口縁壺
 高杯G類 畿内系の高杯

住居-01・02・03・05・土坑-03では、口縁端部の肥厚が顕著なG3～5類が出土しておらず、それらが甕の主体をなしている住居-07より古い様相を呈し、前者は漆町8群併行期、後者は漆町9群併行期に比定できる。しかし、北陸南西部では漆町9群併行期までに途絶えると推定されている、有段口縁の甕(B類)・壺(B類)や布留傾向甕が残存し、有段無文口縁甕は退化形態のもの(C類)が増加することが指摘できる。

7. 古墳時代中期に属する遺物は、ごく少量であり、当該期と確定できる遺構は検出されていない。溝-27から出土した184・185は小矢部市道林寺遺跡の第3号住居跡出土遺物とほぼ同時期と推定される。

8. 古墳時代後期の遺物は、住居-09・10、建物-21、穴-87などに伴って出土したものと、遺物包含層から出土したものがある。遺物包含層の遺物は中央東調査区の東側から東調査区のW地区を中心に出土しており、特にY=24・25区からの出土が多い。

今回の調査で出土した「置竈」や「甑」、「鍋」は、大陸的な様相の強い遺物とされている。富山県内では高岡市麻生谷新生園遺跡(6世紀中葉～7世紀初頭)で置竈と考えられる破片が出土している。一方の造り付け竈は、小矢部市五社遺跡の例が最も古く、5世紀中葉に比定されている。また、婦中町中名IV遺跡の例などから県西部に本格的に導入されるのは7世紀代と考えられるが、神通川以東への普及は現在のところ8世紀後半と想定されている。

白岩川流域は、利田横枕遺跡の東約2.7kmに所在する辻坂の上遺跡から、6世紀前半の甑が出土しており、小矢部川流域とならんで渡来系の遺物がいち早く出現する地域である。今回の発掘では、渡来人の居住を直接証明する遺構は検出されなかったが、白岩川流域に大陸あるいは半島からの渡来系の人々が存在した可能性は高く、「置竈」や「甑」、「鍋」は渡来系の人々のステータスシンボルであったと推定される。

9. 古代の遺物は、建物-01・03、溝-07などに伴って出土したものと、遺物包含層から出土したものがある。遺物包含層の遺物は西調査区東側から中央東調査区西側で出土しており、特にY4・7区からの出土が多い。

土師器は、8世紀後半から10世紀初頭に属するものがほぼ等しく出土しているが、全体として出土量が少ない。

須恵器は、8世紀前半に属するものは少量で、8世紀末から9世紀中頃のもものが主体をなす。8世紀末には立山町上末窯が操業を始めており、近隣の五郎丸遺跡では同窯産のもものが大部分を占めている。しかしながら、本遺跡での上末窯産の比率は6割強であり、他地域からの搬入品の多さが目立つ。また、酸化軟質の製品も一定量占め、その中には内面に赤彩の痕が残るものも存在する。

10. 中・近世の遺物は、ごく少量であり、大半が遺物包含層からの出土である。土師器皿・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸などがあり、時期は12世紀後半から13世紀前半と14世紀後葉以降とに分かれる。

11. 遺跡の所在する利田地区は、「東大寺領大藪荘」に比定されている浦田地区に隣接しており、正倉院に保存されている同荘の墾田図に名前のみえる「川枯郷」をこのあたりに比定する考えは古くよりあった。昭和48年の利田横枕遺跡の調査では、墨書土器が一定量存在し、出土した木片の中には木簡や人形の可能性を持つものを含んでいたことから、通常の集落とは異なる性格を持つのではないかと指摘され、立山町史では「川枯郷」の所在地に推定されている。

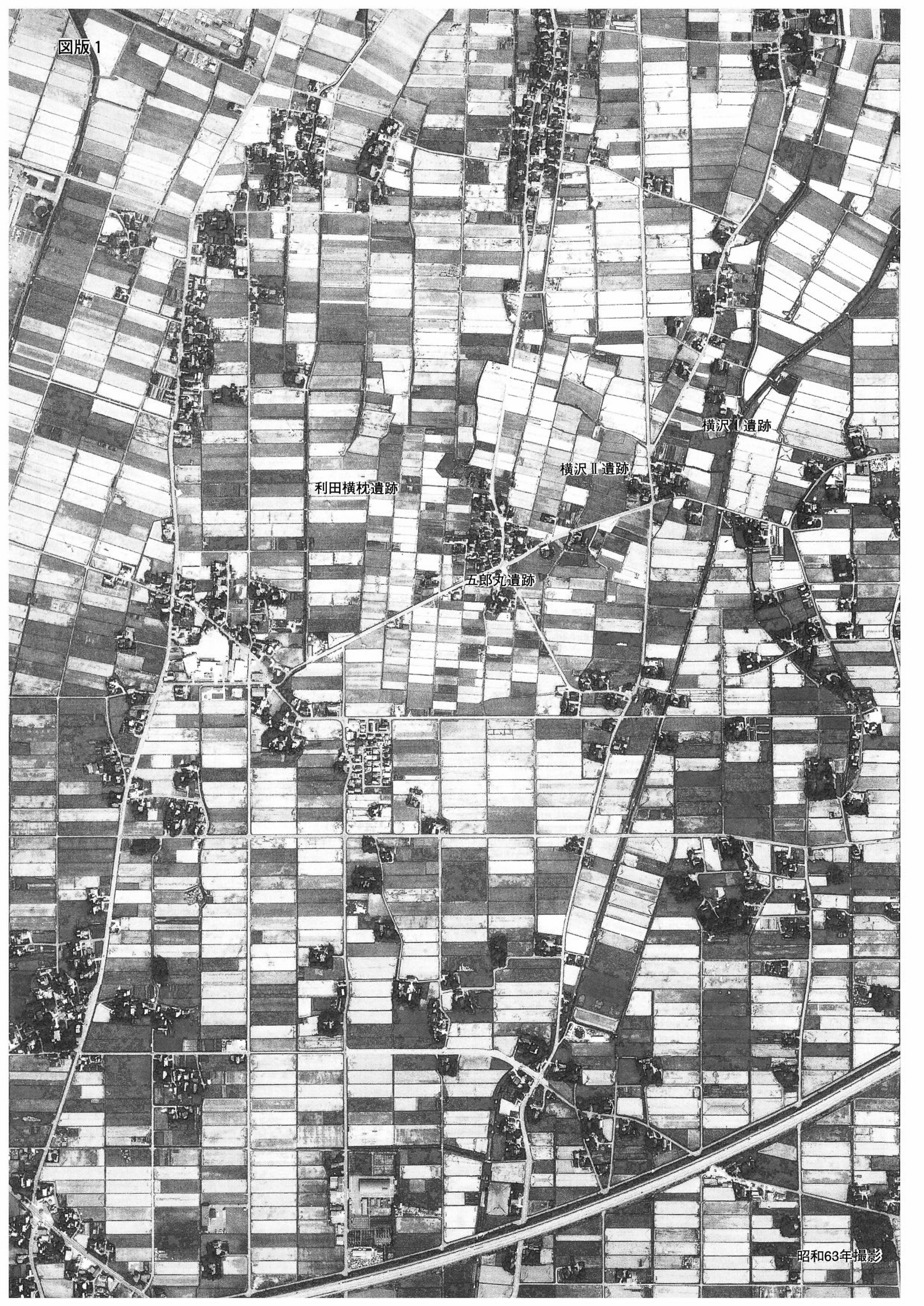
「川枯郷」の存続時期は明確ではないが、墾田図の書かれた8世紀中頃(767年)に存在したことは確かである。今回の調査で新たに所在の確認された古代集落は、8世紀中頃から9世紀代まで存続しており、「川枯郷」またはその周辺の集落である可能性は否定できない。

ただし、今回の調査で検出された8世紀中頃から9世紀代の建物は、全て調査区外へと伸びており、集落の全体像は明らかになっていない。また周辺の同時代の調査例も少ないため、これ以上の推論は不可能と考える。今後の調査の進展を待ちたい。

参考文献

- ア 甘粕健・春日真実 1994 『東日本の古墳の出現』山川出版社
- イ 石川県野々市町教育委員会 1984 『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター 1986 『鹿島町徳前C遺跡（Ⅱ・Ⅲ）』
石川県立埋蔵文化財センター 1987 『永町ガマノマカリ遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1987 『宿向山遺跡 一般国道159号線押水バイパスに係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
石川県立埋蔵文化財センター 1991 『押水町冬野遺跡群 国道159号線押水バイパス改築事業に係る石川県羽咋郡押水町冬野遺跡群発掘調査報告』
石川県立埋蔵文化財センター 1995 『谷内・杉谷遺跡群』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題 資料編』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』
石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎 1991 『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』
- ウ 上野 章 1993 「富山県における生産開始期の須恵器窯跡について」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
- オ 小田木治太郎 1989 「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第32号 石川考古学研究会
小矢部市教育委員会 1987 『富山県小矢部市 道林寺遺跡』小矢部市埋蔵文化財調査報告第22冊
- カ 金沢市・金沢市教育委員会 1996 『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市文化財紀要119
金沢市教育委員会・石川県鉄鋼団地協同組合 1992 『金沢市中屋サワ遺跡』
上市町教育委員会 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編—』
- コ 小杉町教育委員会 1999 『HS-04遺跡発掘調査報告』
小林達雄・小川忠博 1989 『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館
小林正史 1991 「土器の器形と炭化物から見た先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会
- サ (財)富山県文化振興財団 1996 『梅原護摩堂遺跡発掘調査報告—東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—』, 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2000 『富山考古学研究』紀要第3号
齋藤孝正・後藤建一 1995 『須恵器集成図録 第3巻 東日本編Ⅰ』
- ス 杉井 健 1978 「竈の地域性とその背景」『考古学研究』25巻第1号 考古学研究会
- タ 第1回東海考古学フォーラム・豊橋大会実行委員会 1993 『第1回 東海考古学フォーラム・豊橋大会 突帯文土器から条痕文土器へ』
高橋浩二 1995 「北陸における古墳出現期の社会構造—土器の計量的分析と古墳から—」『考古学雑誌』80巻第3号 日本考古学会
高橋浩二 1995 「越中における古墳出現期の様相」『大境』17 富山考古学会
高堀勝喜 1983 『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会

- 田島明人 1992 「北陸の竈とその周辺」『第32回埋蔵文化財研究集会資料集 第3分冊』（財）和歌山県文化財センター
- 立山町教育委員会 1977 『立山町史』上巻
- 立山町教育委員会 1987 『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
- 立山町教育委員会 1988 『浦田遺跡第2次発掘調査報告』
- 立山町教育委員会 1990 『辻遺跡第2次発掘調査報告書』
- 立山町教育委員会 1991 『辻遺跡第3次発掘調査報告』
- 立山町教育委員会 1994 『稚子塚古墳第1次発掘調査報告』
- 立山町教育委員会 1994 『五郎丸遺跡発掘調査報告』
- 立山町教育委員会 1995 『稚子塚古墳第2次発掘調査報告』
- 立山町教育委員会 1998 『横沢Ⅱ遺跡発掘調査報告』
- 立山町教育委員会 1999 『横沢Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告』
- 立山町教育委員会 1999 『五郎丸遺跡第2・3次発掘調査報告』
- 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1989 『立山町埋蔵文化財分布調査報告書』Ⅳ，立山町文化財調査報告書第8冊
- チ 千曲川水系古代文化研究所 1981 『研究ノート4 箱清水式土器』
- ト 栃木英道 1994 「能登地域の庄内式並行期の土器群の変遷－基準資料にかえて－」『庄内式土器研究Ⅶ－庄内式並行期の土器生産とその動き－「庄内式期の土器の併行関係」』庄内式土器研究会
- 富山県教育委員会 1981 『北陸自動車道遺跡調査報告－立山町遺構編－』
- 富山県教育委員会 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告－立山町土器・石器編－』
- 富山県教育委員会 1982 『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第3・4次緊急発掘調査概要』
- 富山県教育委員会 1991 『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編6－境A遺跡土器編』
- 富山県小杉町教育委員会 1994 『小杉町針原東遺跡発掘調査報告』
- 富山県大門町教育委員会 1990 『布目沢北遺跡発掘調査概要』大門町埋蔵文化財調査報告第6集
- 富山県埋蔵文化財センター 1991 『富山県富山市 南中田D遺跡発掘調査報告書』
- 富山考古学会企画委員会 1999 『富山考古学会創立50周年記念シンポジウム 富山平野の出現期古墳 《発表要旨・資料集》』富山考古学会
- 富山市教育委員会 1988 『昭和62年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
- 富山大学人文学部考古学研究室・北陸古代手工業生産史研究会 1989 『北陸古代手工業生産史の研究 越中上末窯 北陸の古代手工業生産』
- ノ 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 『石川県能都町 真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書』
- ハ 橋本 正・酒井重洋・久々忠義 1980 『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会
- ホ 北陸中世土器研究会 1997 『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房
- ミ 水野正好 1982 「竈形－日本古代竈神の周辺」『古代研究』24 （財）元興寺文化財研究所考古学研究室
- ヤ 安 英樹 1994 「北加賀地域の庄内式並行期の土器群の変遷」『庄内式土器研究Ⅶ－庄内式並行期の土器生産とその動き－「庄内式期の土器の併行関係」』庄内式土器研究会
- ヨ 吉岡康暢 1971 「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56巻第4号 日本考古学会



利田横枕遺跡

五郎丸遺跡

横沢Ⅱ遺跡

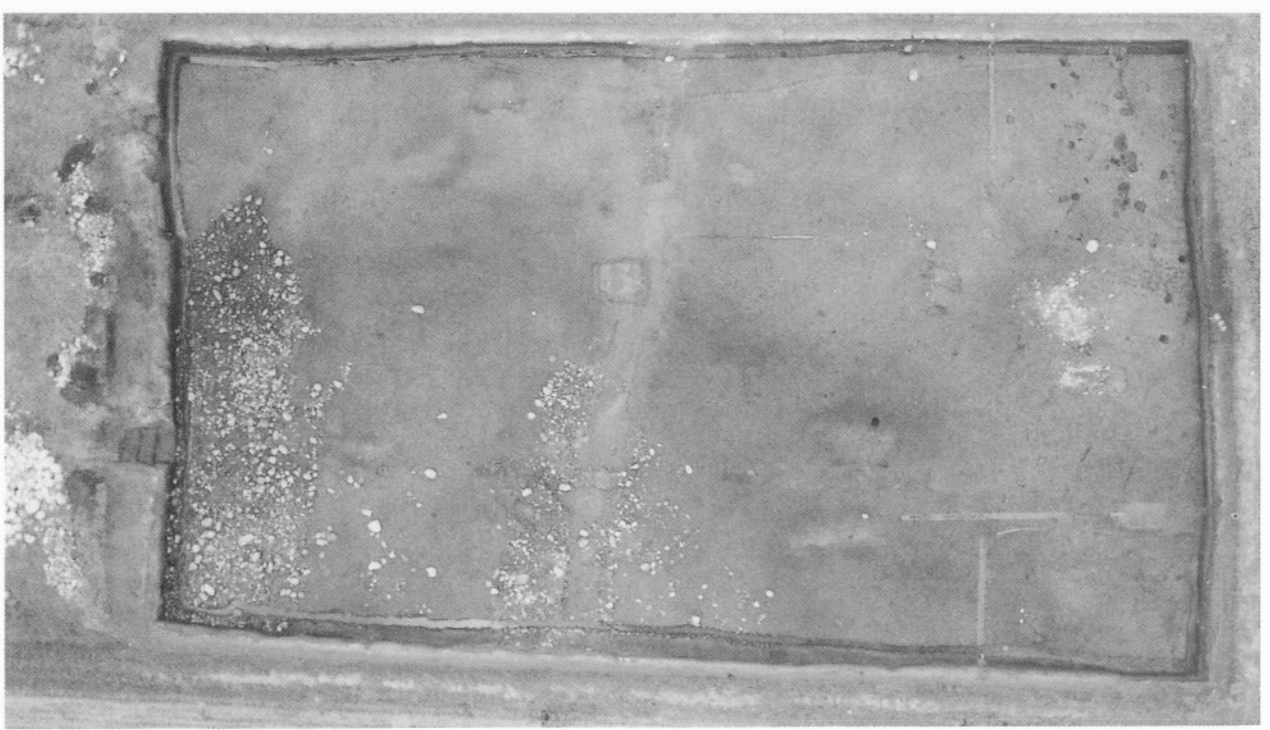
横沢Ⅰ遺跡



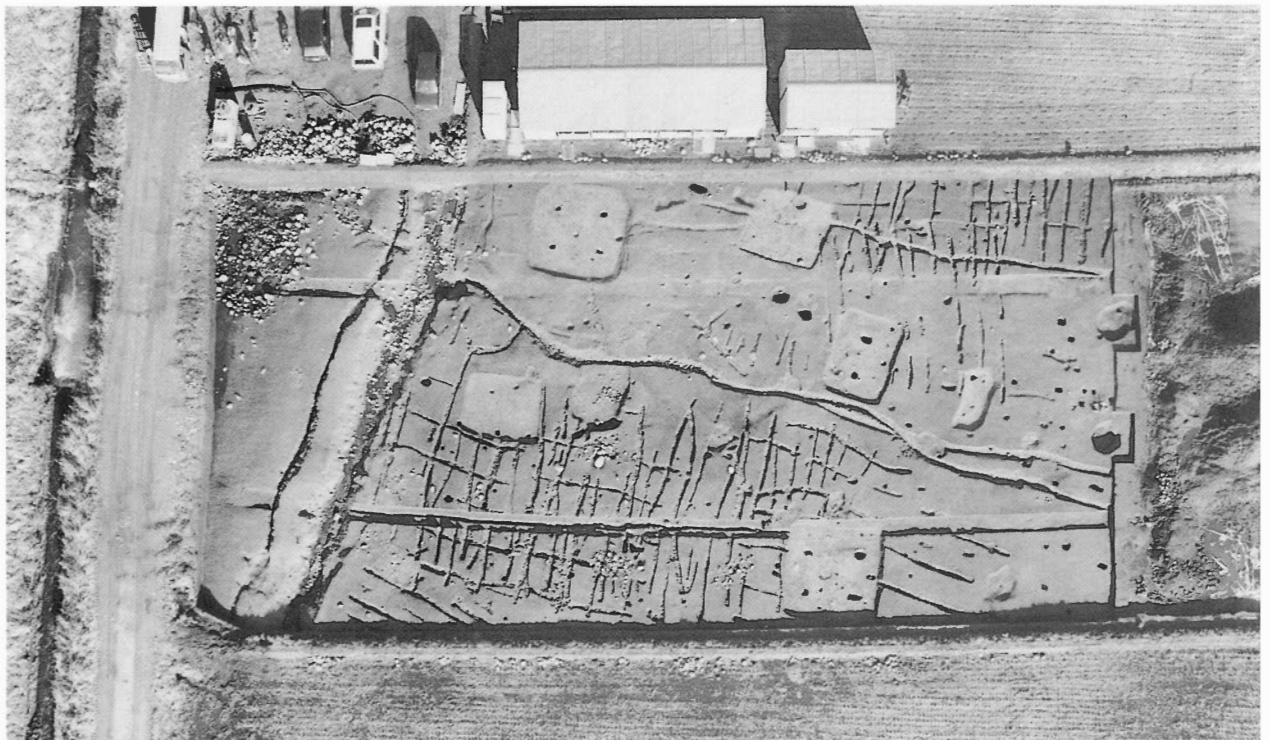
利田横枕遺跡

図版 3

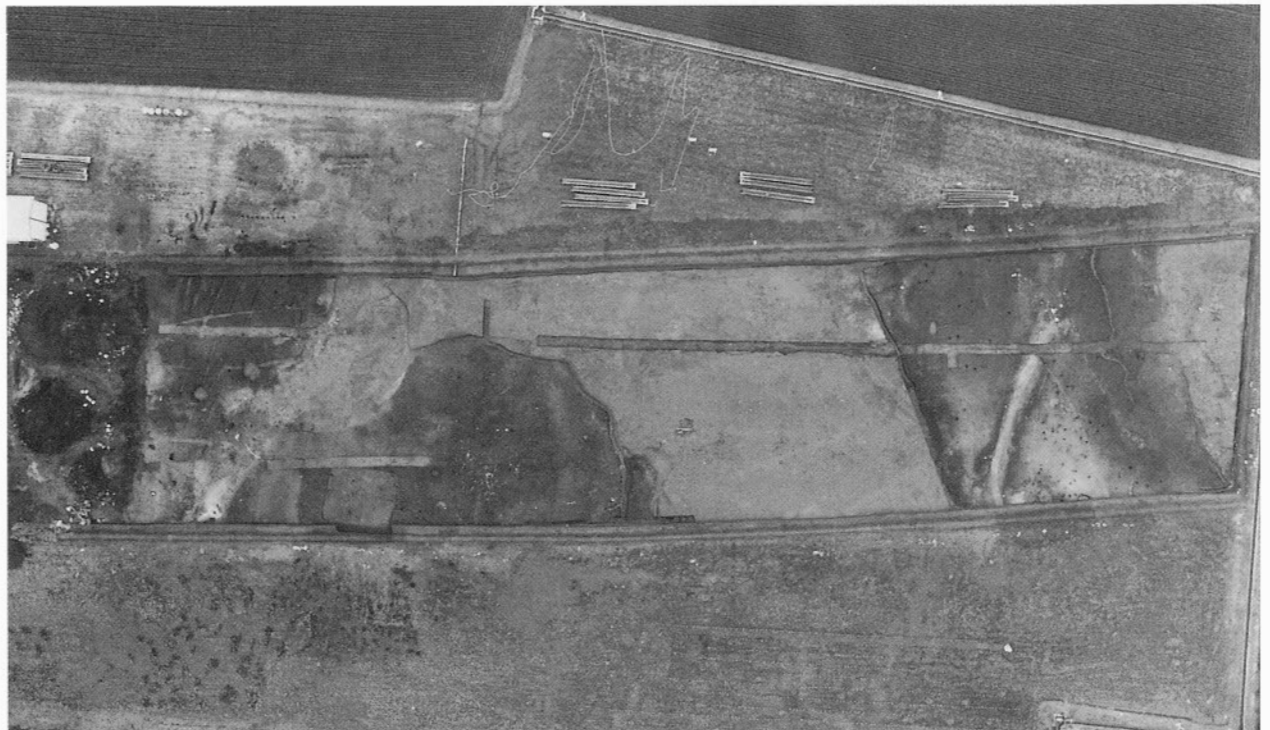
1.西調査区全景
(上から)



2.中央西調査区
全景
(上から)



3.中央東調査区
全景
(上から)



図版 4

1. 東調査区全景
(上から)



2. 住居-01
(西から)

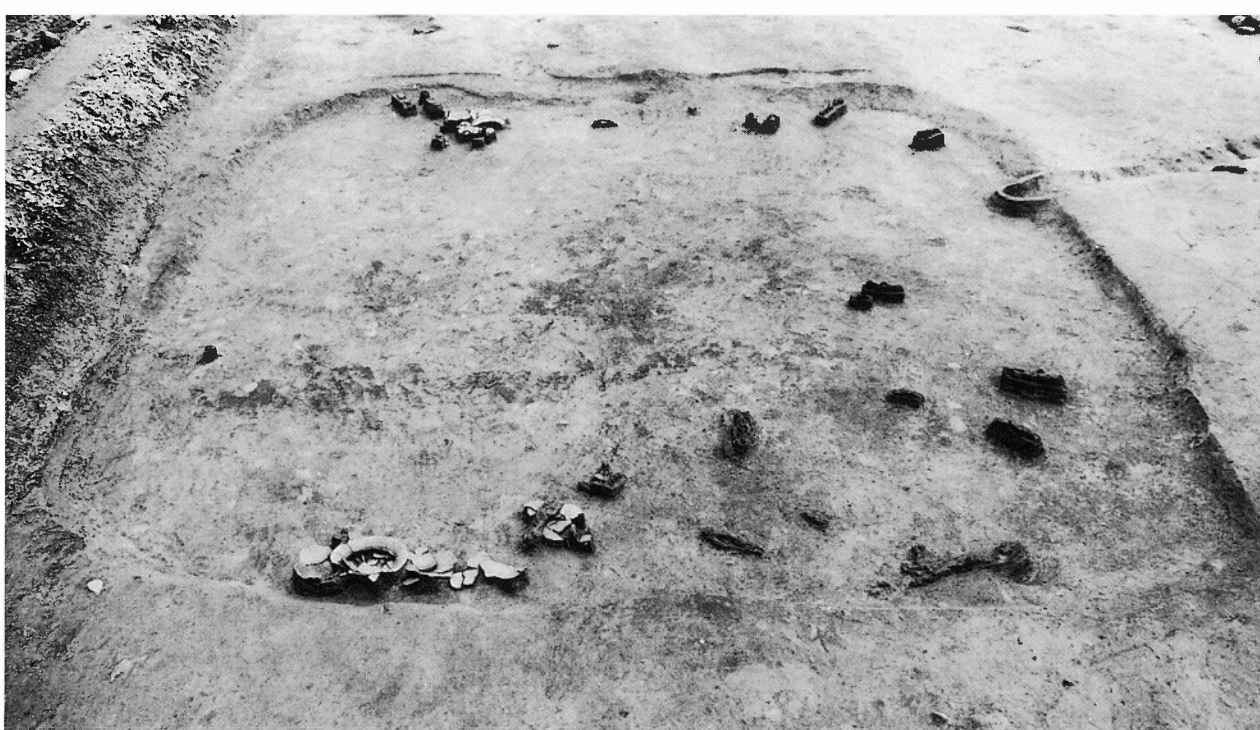


3. 住居-02
(東から)



図版 5

1.住居-03
炭化材・遺物
出土状況
(西から)



2.住居-03
遺物出土状況
(東から)



3.住居-03
(東から)



図版 6

1. 住居-04
(東から)



2. 住居-05
(北から)



3. 住居-06
(北から)



図版 7

1.住居-07
(上から)



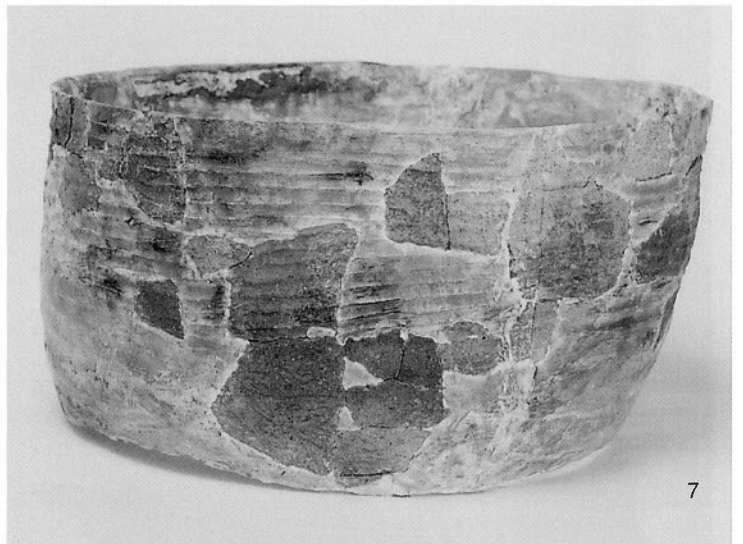
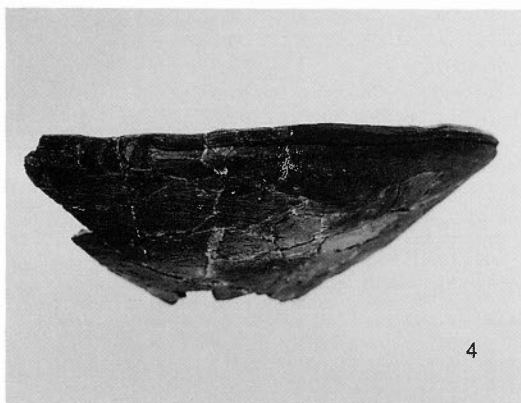
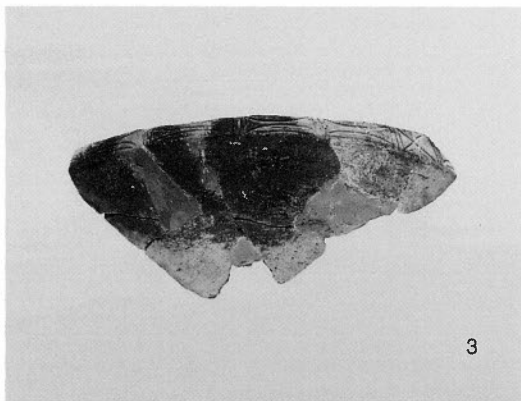
2.住居-08
(南から)



3.住居-09・10
(西から)



图版 8
遺物写真
包含層



図版 9

遺物写真

19・30・33・34.

住居-01

47・51. 住居-02

56. 住居-03



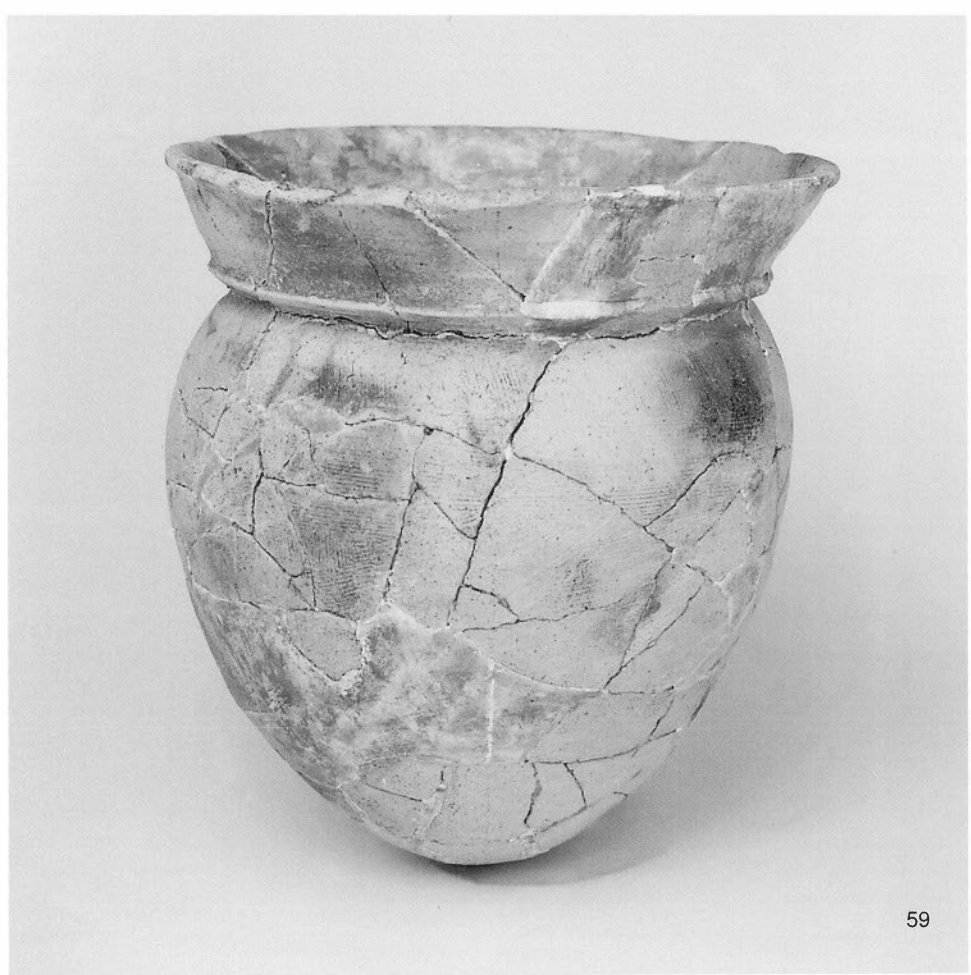
図版10

遺物写真

59・66・71. 住居-03

83・84. 住居-06

96. 住居-07



59



66



83



71



84



96

图版11

遺物写真

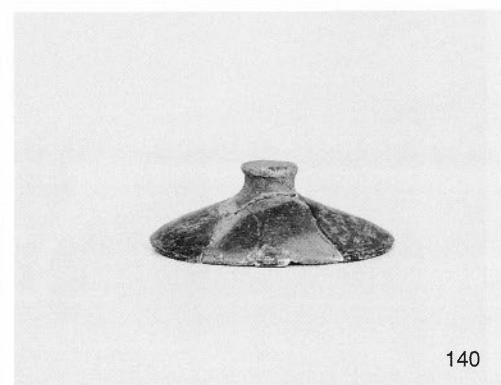
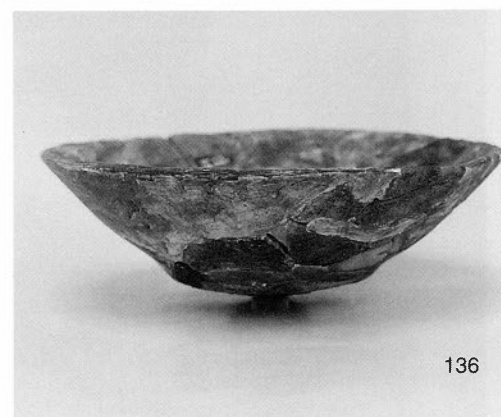
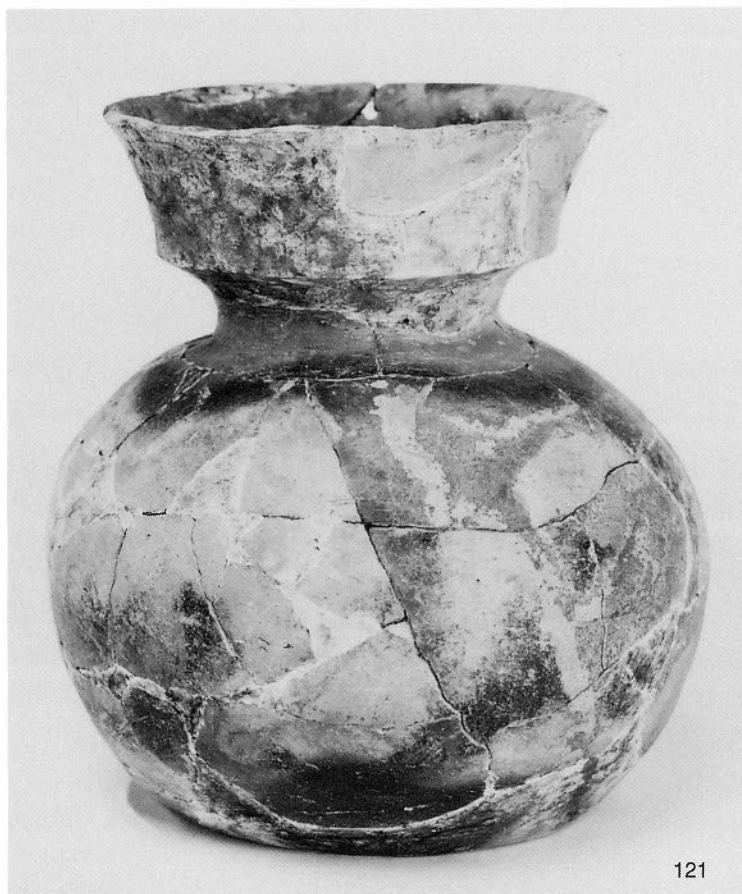
95 · 111 · 117

121 · 122.

住居-07 126

136 · 140.

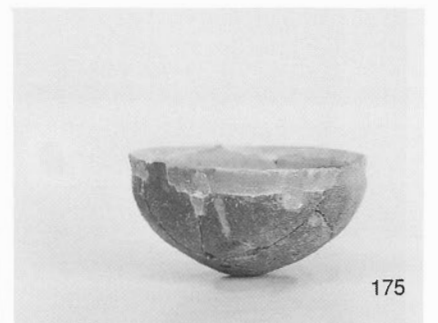
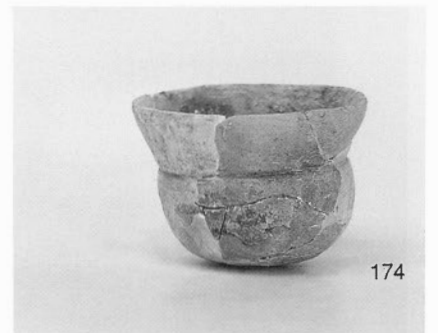
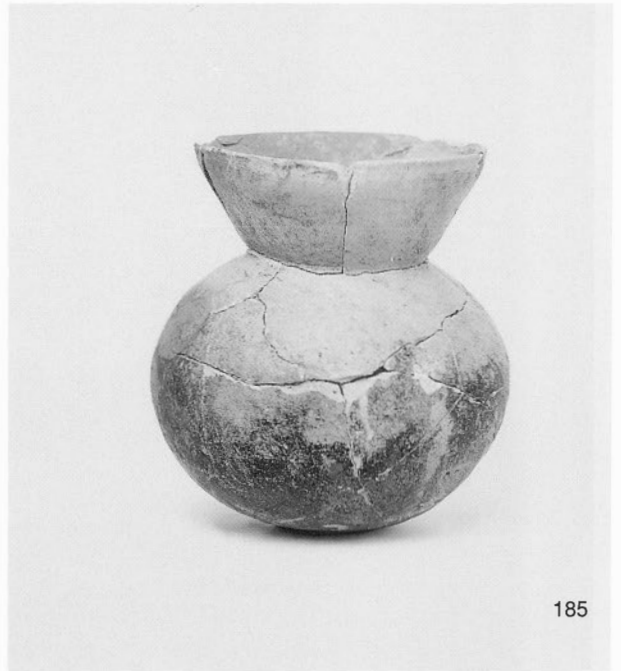
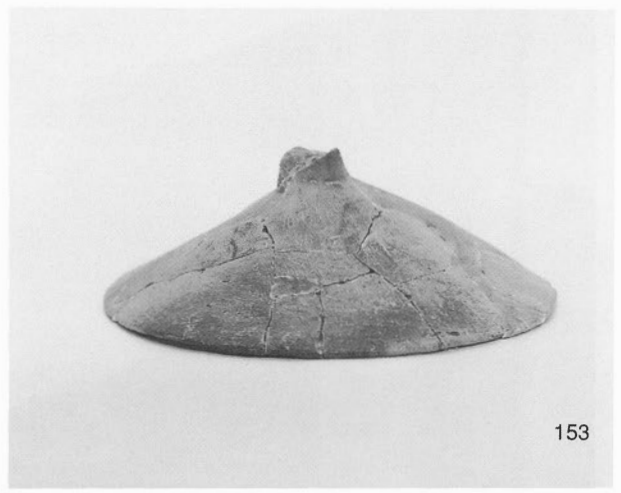
土器集中区



图版12

遺物写真

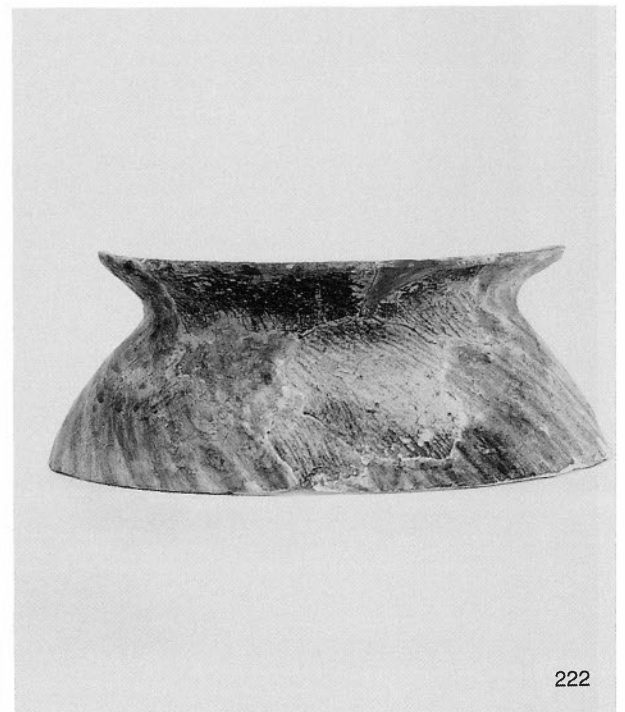
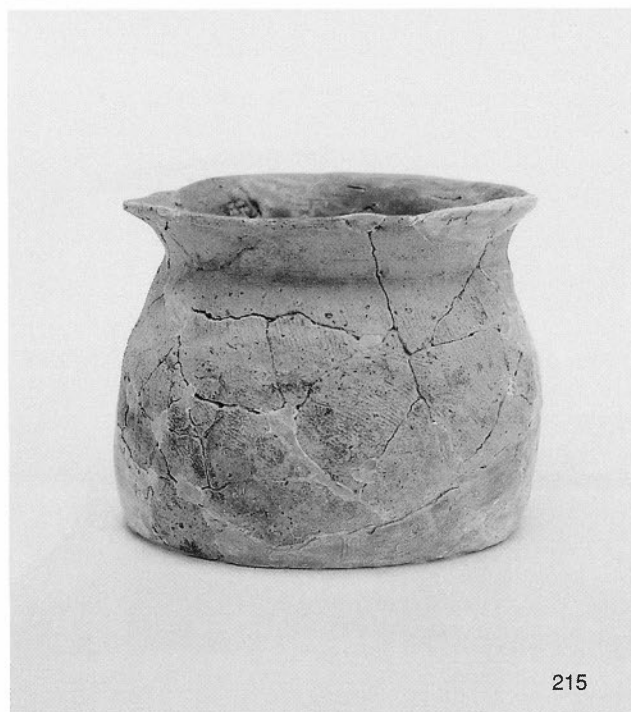
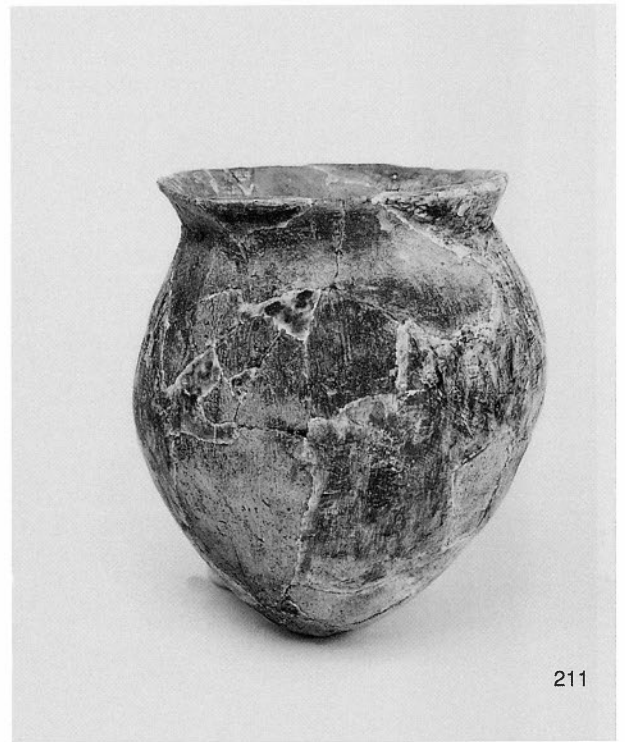
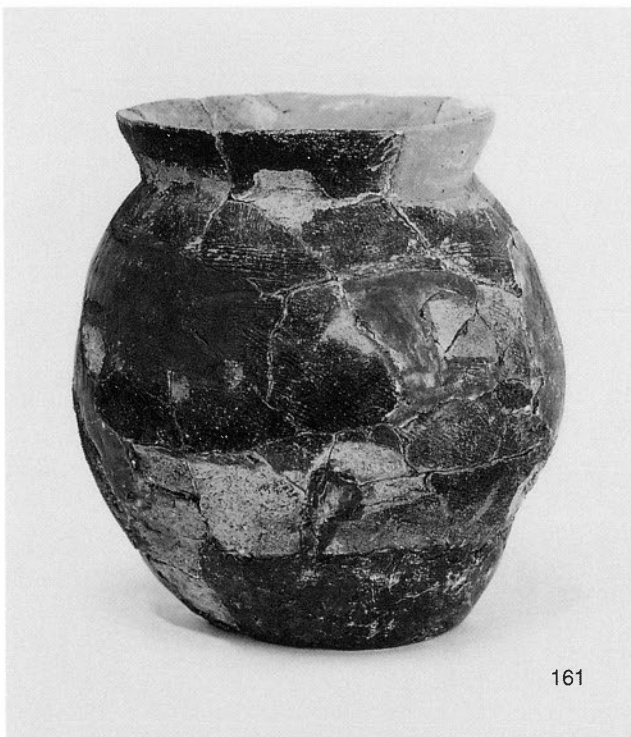
152·153. 溝-26
184·185. 溝-27
162·168·174
175. 土坑-04



図版13

遺物写真

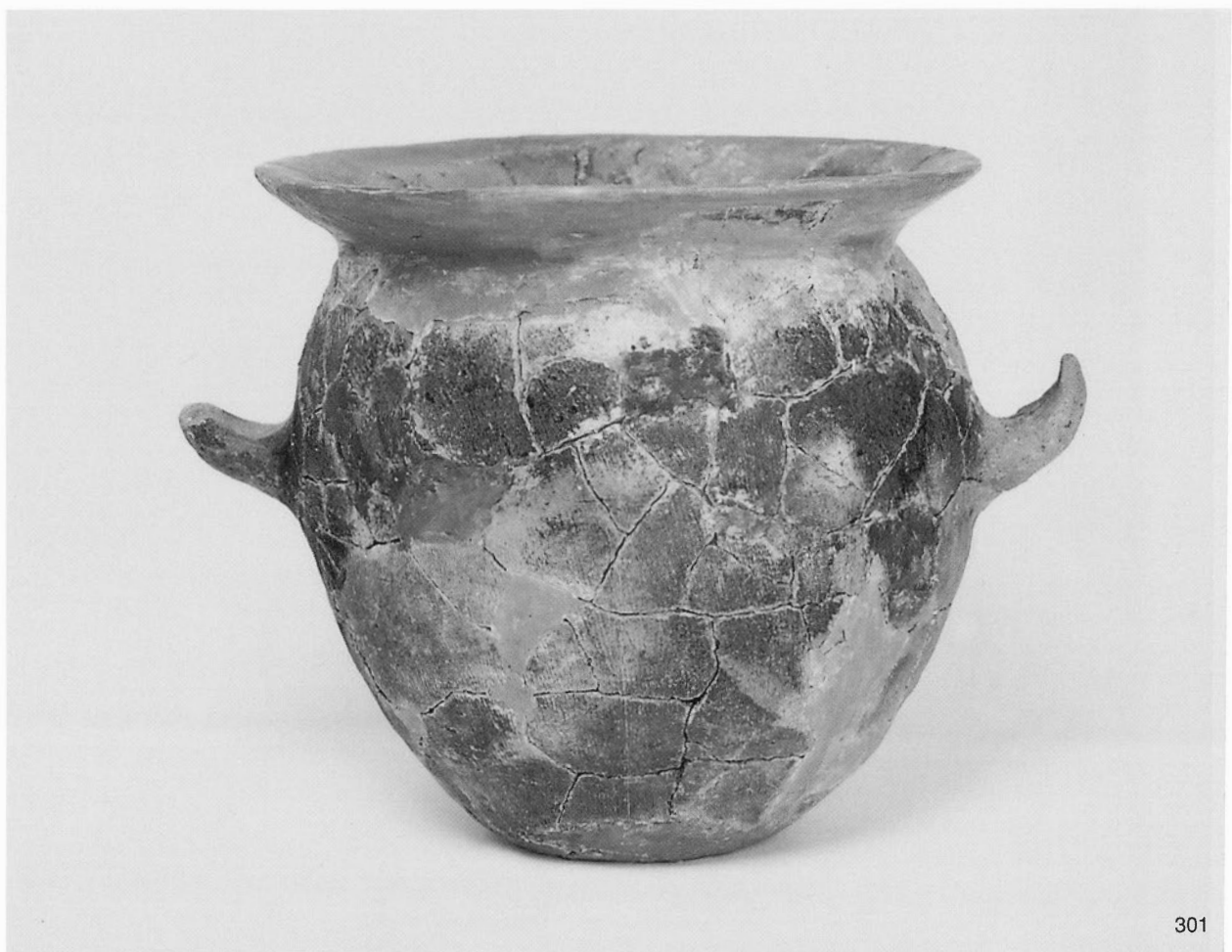
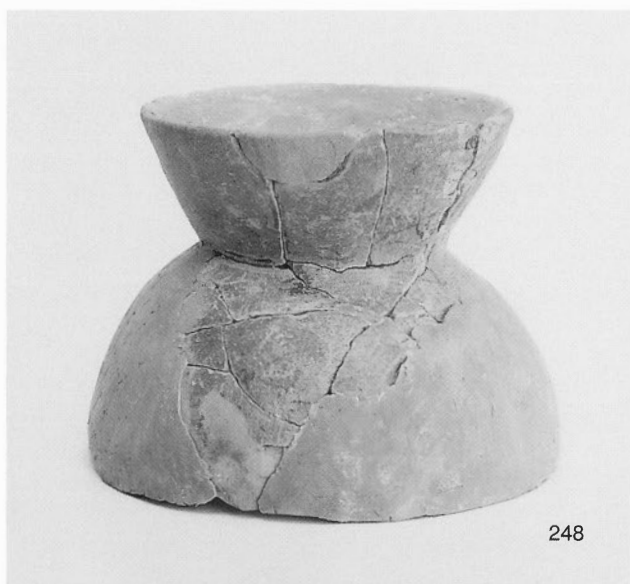
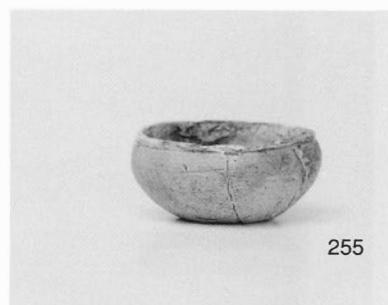
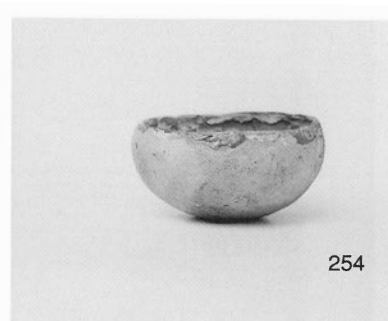
161. 土坑-03
158. 土坑-04
その他.包含層



図版14

遺物写真

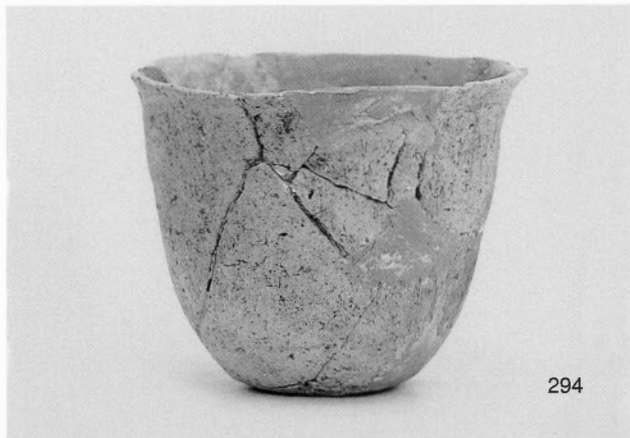
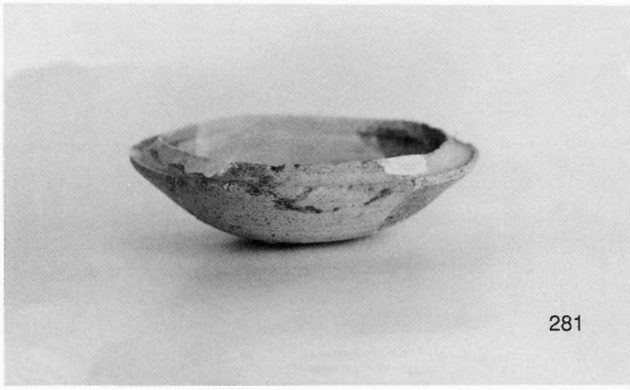
301. 住居-08
その他. 包含層



図版15

遺物写真

298. 住居-04
281・288.
住居-09
285・294・296.
住居-10



図版16

遺物写真

300. 土坑-06

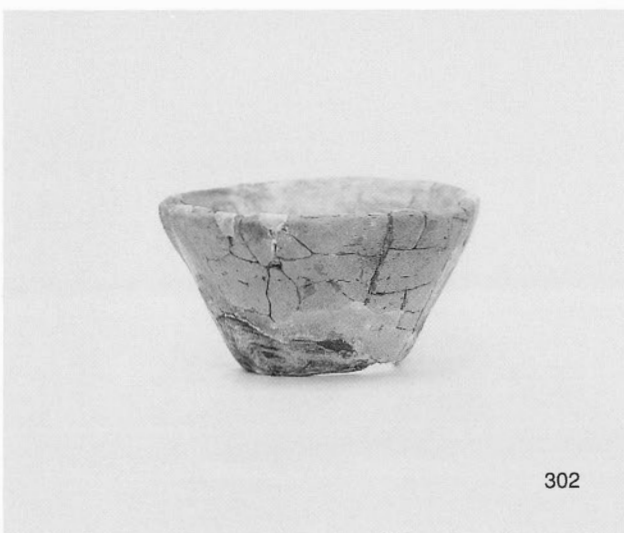
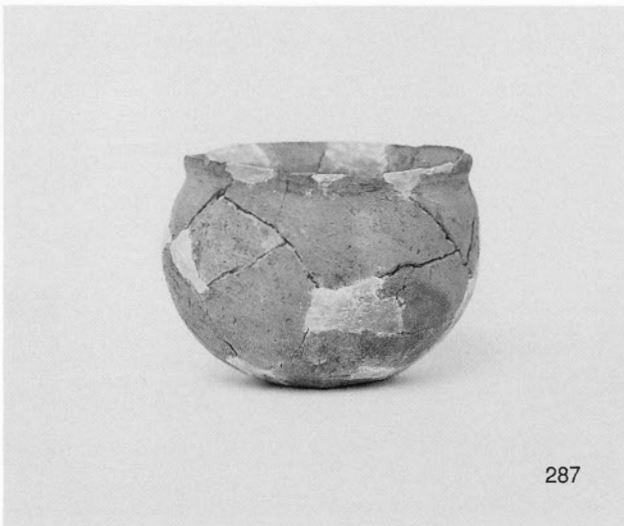
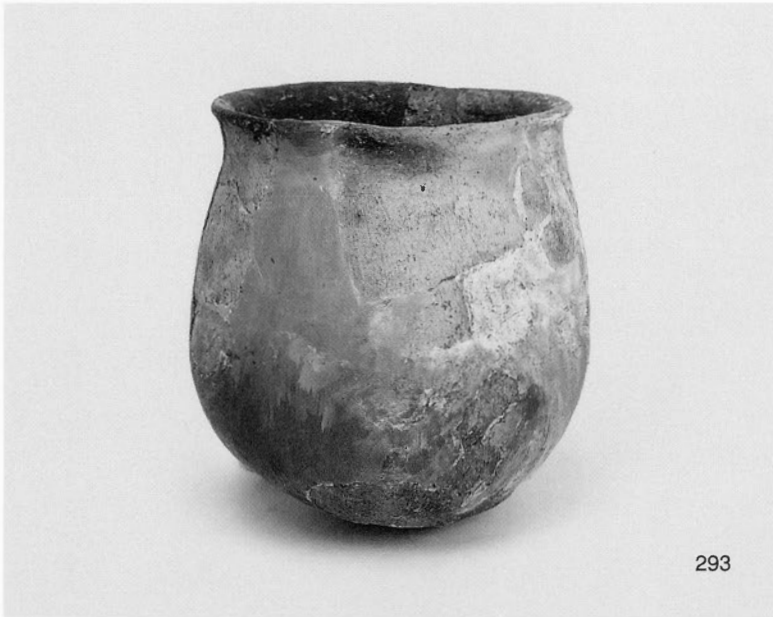
293. 土坑-07

276. 穴-87

303. 畝状遺構

②群

その他. 包含層





図版18

遺物写真

333. 建物-01

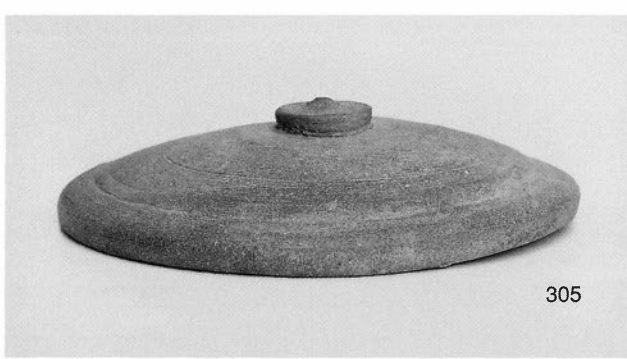
325. 溝-07

305. 溝-26

327. 畝状遺構

④群

その他. 包含層



305



306



310



319



320



321



325



327



328



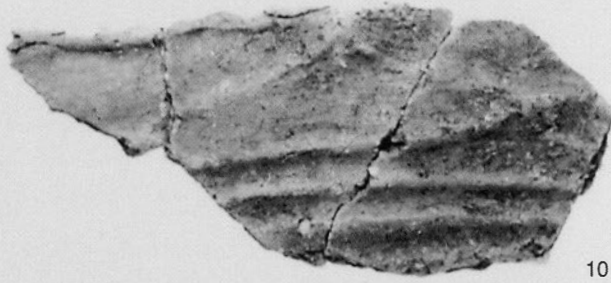
333



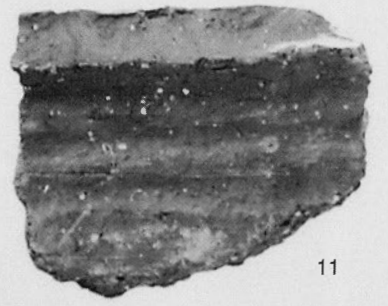
336



382



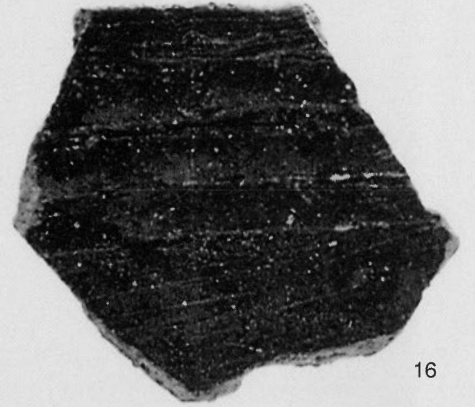
10



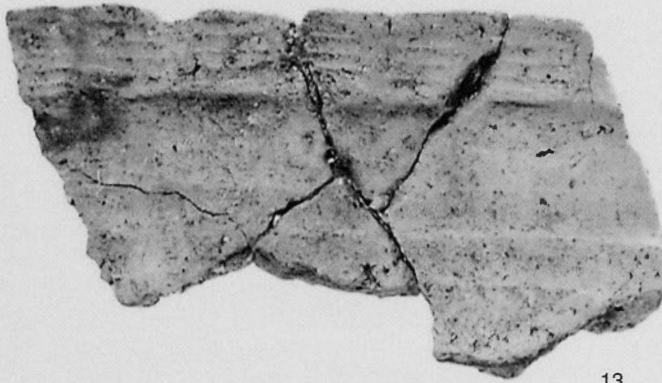
11



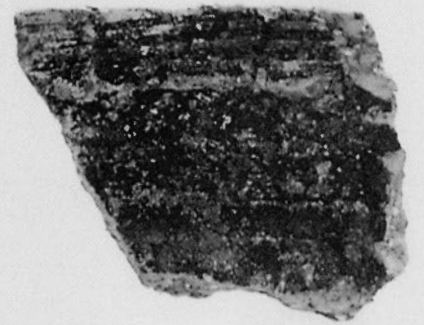
12



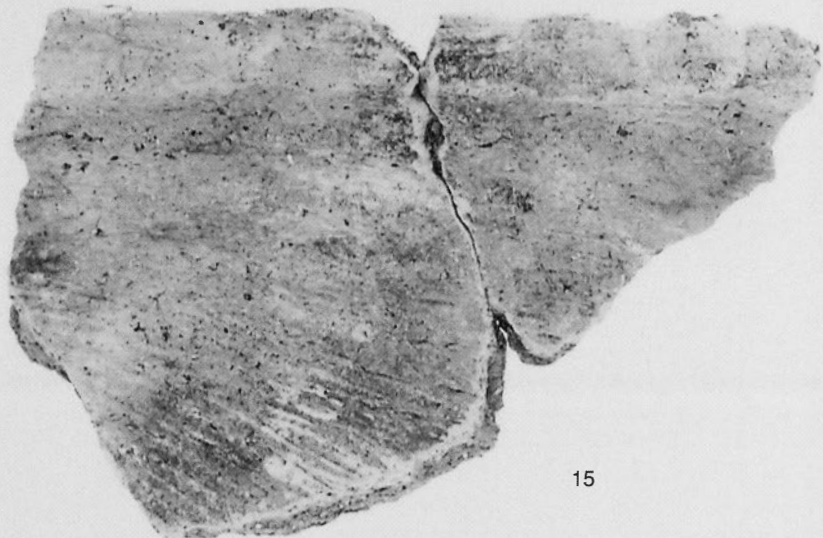
16



13



14



15

図版20

遺物写真

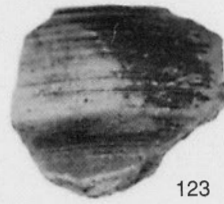
57. 住居-03
141・143. 溝-26
170. 土坑-03
124. 土器集中区
その他. 包含層



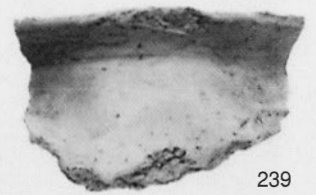
57



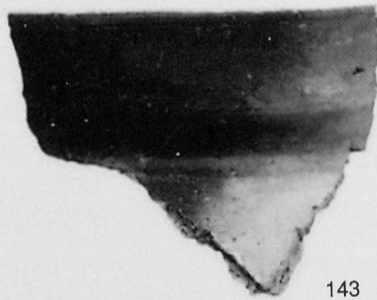
141



123



239



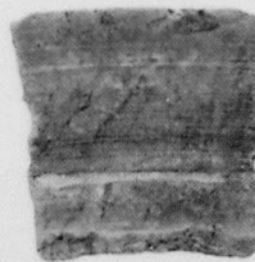
143



225



124



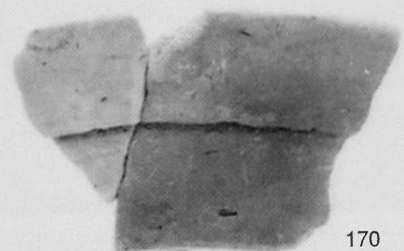
224



223



257

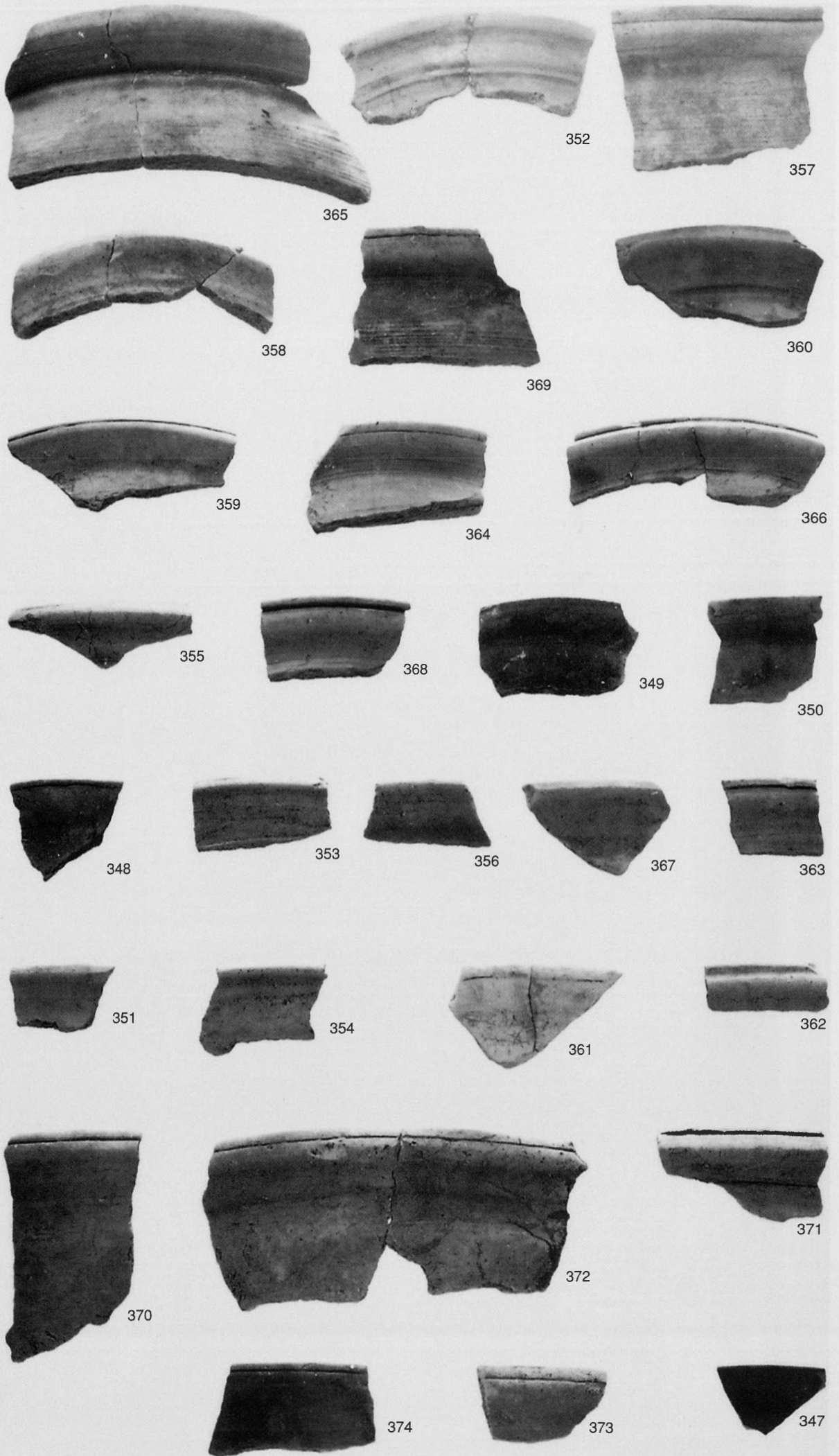


170

図版21

遺物写真

347. 建物-01
357・367・372
373. 溝-07 355.
溝-27
351・356.
畝状遺構④群



報告書抄録

ふりがな	りたよこまくらいせき							
書名	利田横枕遺跡							
副書名	主要地方道富山立山魚津線地方特定道路事業に伴う発掘調査							
編集者名	三鍋秀典、田中幸生							
編集機関	立山町教育委員会							
所在地	〒930-0292 富山県中新川郡立山町前沢2440番地							
発行機関	立山町教育委員会							
所在地発行	〒930-0292 富山県中新川郡立山町前沢2440番地							
発行年月日	西暦2001年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
りたよこまくら 利田横枕	とやまけん なかにいかわぐん 富山県中新川郡 たてやままちりた 立山町利田	323	008	36° 40' 57"	137° 17' 57"	19980430 ～ 19991104	6,000	地方特定道路 事業に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
利田横枕	集落跡	縄文・古墳・古代	竪穴住居・掘立柱 建物・畝状遺構・溝		縄文土器・土師器・須恵器・ 置竈・土師器皿			

利田横枕遺跡

—主要地方道富山立山魚津線地方特定道路事業に伴う発掘調査—

立山町文化財調査報告書第31冊

発行日 平成13年1月31日
編集・発行 立山町教育委員会
印刷 (株) チューエツ

